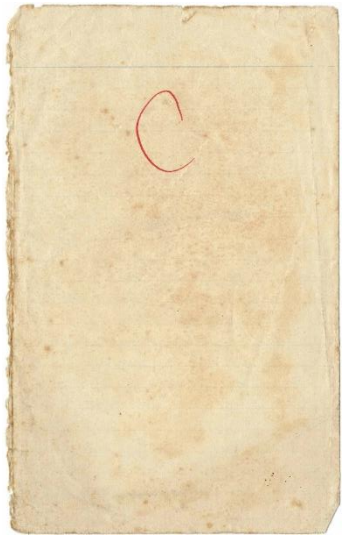
日中戦争日記Ｃ（北支戦線：1937 年 11 月 21 日～1938 年 3 月 15 日）

（参考）Ｃの日記は、右の第一軍命令に従い、榆次付近の六堡鎮に駐屯しているところから始まっている。



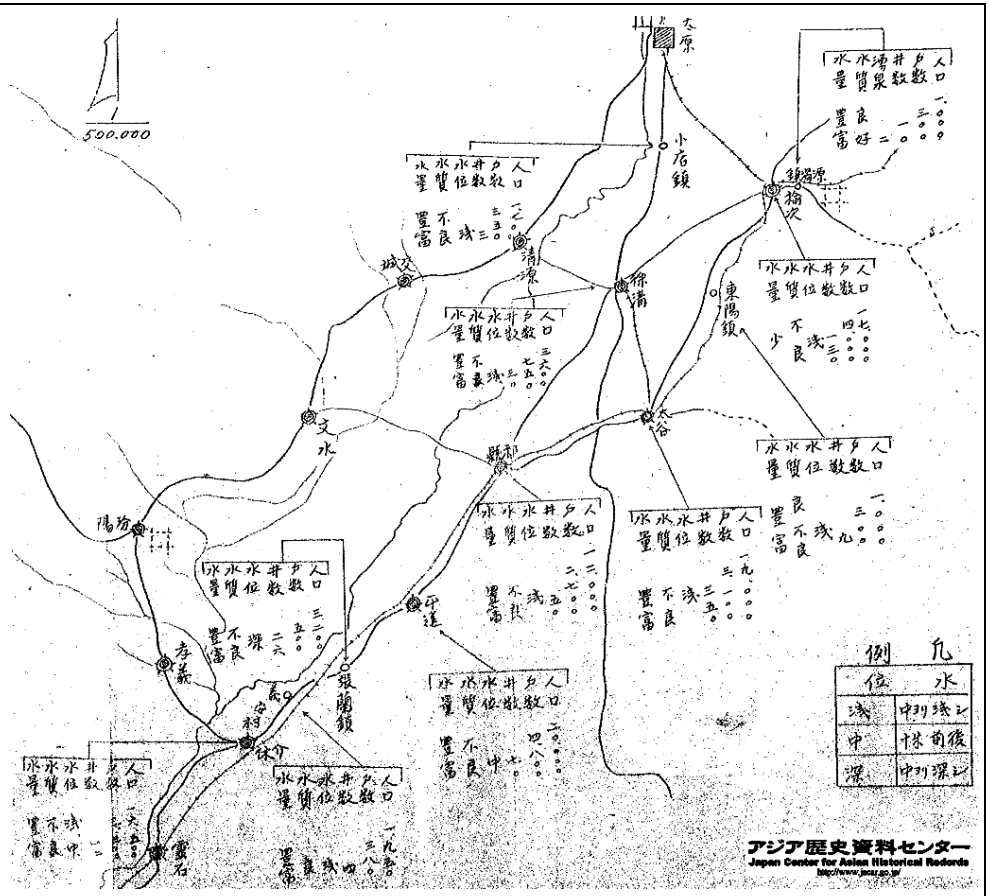
第一軍命令　　11 月 16 日午後 6 時

1．太原平地ノ敵ハ介休以南ニ退却セリ。
離石、靈石及和順附近ニハ一部残敵アリ。
臨汾平地及潞安ニハ尚敵アルガ如シ。
第 5 師團ハ、山西作戦ヲ終了シ、次期作戦準備ノ為、河北省平地ニ轉進ス。

2．軍ハ第 109 師團及第 20 師團ヲ以テ、北部太原平地ヲ確保シ、敵ノ反攻ニ際シテハ之レヲ攻撃シ、南部太原平地ニ於テ撃滅セントス。

3．第 109 師團ハ、太原附近ヲ守備スベシ。…（以下略）

4．第 20 師團ハ、主力ヲ以テ榆次附近ヲ、歩兵 4 大隊ヲ基幹トスル兵力ヲ以テ、陽泉、昔陽附近ヲ守備スベシ。
南方ニ對スル攻勢據點トシテ、一部ヲ以テ太谷ヲ保持スベシ。…（以下略、第 5 項略）



「山西省給水調査」の図［アジア歴史資料センターC04120728600 陸支受大日記(防衛省)　画像 13 枚目(靈石より南部はDの日記D63 頁参照)］

6．各師團ハ其作戦地域内ノ安定ニ任ジ、且ツ鐵道ヲ警備スベシ。
作戦地域内ノ諸縣城ハ、我軍ノ利用スルモノノ外、將来ノ攻撃ヲ顧慮シ、適宜城壁ノ一部ヲ毀却スベシ。

7．予ハ石家莊ニ在リ。　　第一軍司令官　香月中將

［アジア歴史資料センターC11110963400 第 1 軍機密作戦日誌(防衛省)　の画像 16～19 枚目］

（参考）

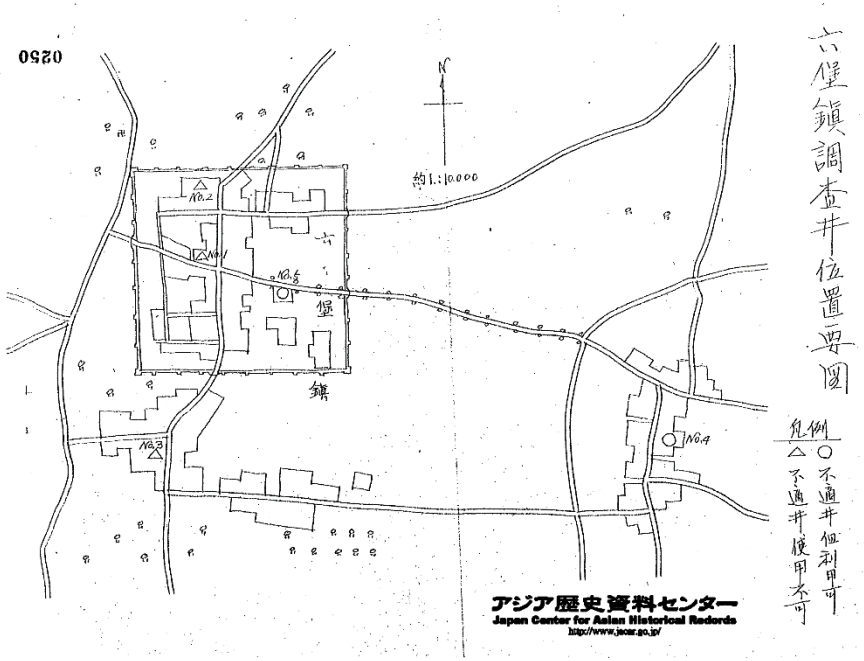
右図：六堡鎮と、太原（たいげん）、楡次（ゆじ）との位置関係は右図のとおり。

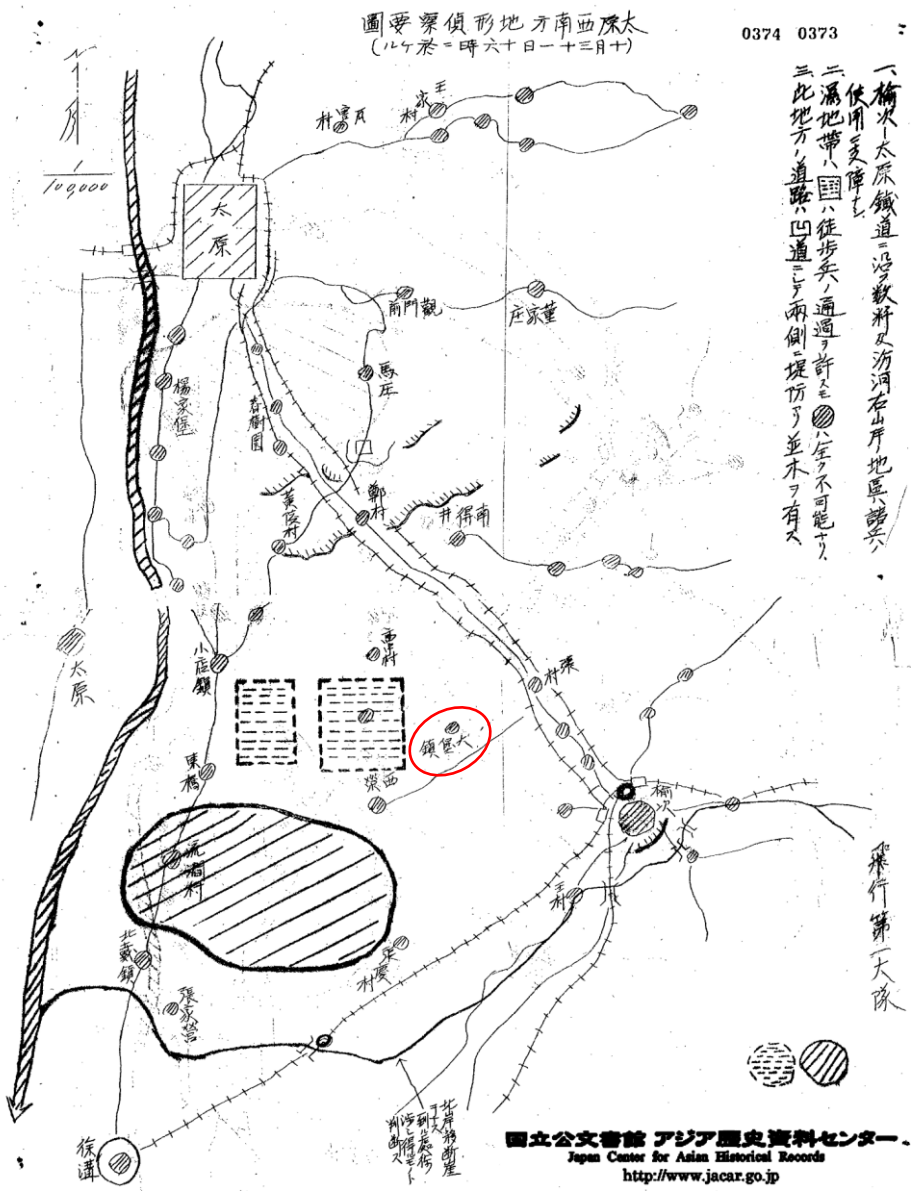
［アジア歴史資料センターC11110961900 第１軍機密作戦日誌（防衛省）の画像 48～49 枚目］

Ａの日記は楡次の手前まで行軍中に終わっている。Ｂの日記は失われているが、Ｃの日記の２月９日に「懐かしい楡次」との記述があるので、六堡鎮に駐留する前に、楡次にしばらく駐留していたのだと思われる。

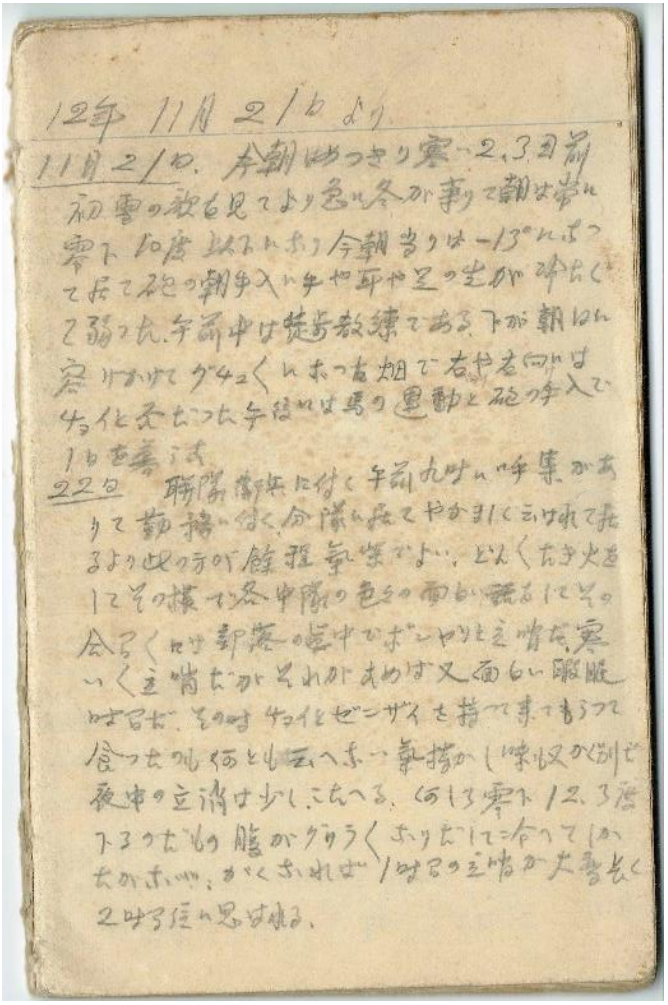
下図：六堡鎮の詳細（1937 年 12 月 18 日の「山西省給水調査」報告書によると、「土地の状況 … 楡次西北方８粁ニ在ル部落ニシテ…戸数 500、人口 2,300、城内ハ相当ノ市街ヲナシ、住民は農ヲ業トス」）

［アジア歴史資料センターC04120728700 陸支受大日記（密）（防衛省）の画像 28～30 枚目］





（以下、左半分は現本写し）



（参考：兵歴簿の関係個所抜粋）

【履歴】　昭和 12 年 11 月 11 日ヨリ昭和 13 年 2 月 10 日迄
太原（たいげん）附近掃蕩戰ニ参加

（以下、右半分は文字起こし後）

（注）○は判読不能文字、【 】内および□内は判読者の注記、※は引用資料に関する引用者の注釈等、［ ］内は資料出所を示す。明らかな誤字・当て字等は訂正し、日記本文・引用文とも句読点および濁点を適宜加除した。

【1937 年】12 年 11 月 21 日より

11 月 21 日、今朝はめっきり寒い。

2・3 日前、初雪の顔を見てより、急に冬が来りて朝は常に零下 10 度以下になり、今朝当りは−13°になって居て、砲の朝手入に、手や耳や足の先が冷たくて弱った。

【日記Ａでは華氏表記だったが、日記Ｃでは摂氏表記を使っていると思われる】

午前中は、徒歩教練である。下が朝日に溶けかけてグチュグチュになった畑で、右や右向には、チョイと否（イヤ）だった。

午後には、馬の運動と砲の手入で 1 日を暮らす。

22 日、聯（連）隊衛兵に付く。午前 9 時に呼集がありて勤務に付く。

分隊に居てやかましく云はれて居るより、此の方が餘程氣樂（よほど気楽）でよい。

どんどんたき火をして、その横で各中隊の色々の面白い話をして、その合間合間には、部落の眞（真）中でボンヤリと立哨だ。

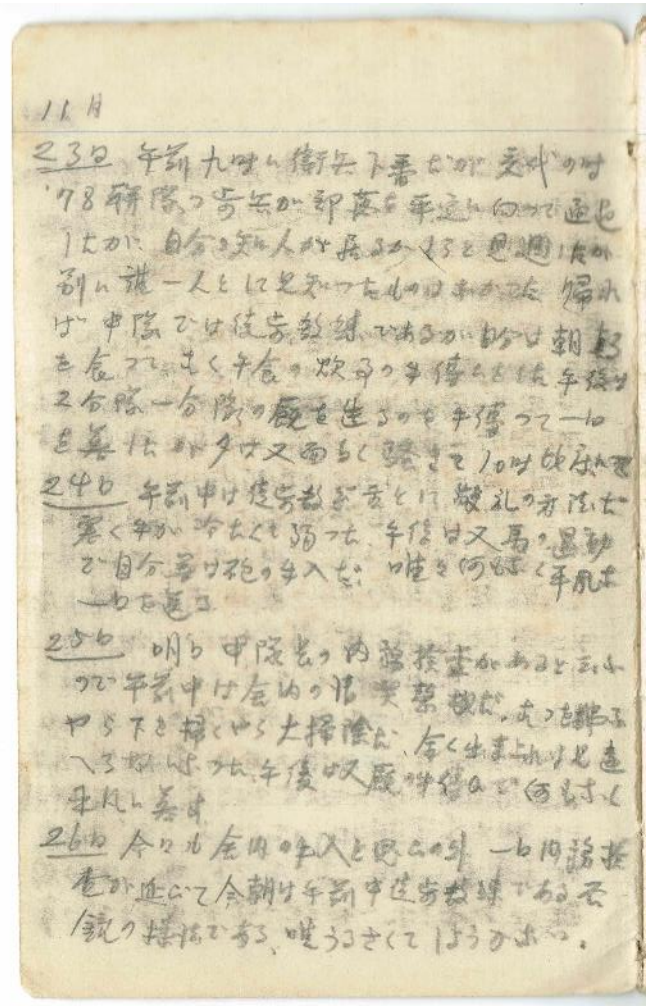
寒い寒い立哨だが、それがすめば又、面白い假（仮）眠時間だ。

その時、チョイとゼンザイを持って来てもらって食ったのも、何とも云へない氣（気）持がし、味も又かく別だ。

夜中の立哨は少しこたへる。何しろ零下 12・3 度下るのだもの。

腹がグゥラグゥラなりだして、冷へてしかたがない。

かくなれば 1 時間の立哨が大変長く、2 時間位に思われる。



【1937 年】11 月

23 日、午前 9 時に衛兵下番だが、交代の時、【第 20 師団の第】78聯(連)隊の歩兵が部落を平定に向って通過したが、自分の知人が居るかしらと見廻したが、別に誰一人として見知ったものはなかった。

帰れば中隊では徒歩教練であるが、自分は朝飯を食って、すぐ午食の炊事の手傳(伝)ひをした。

午後は【第】二分隊・一分隊の厩(うまや)を造るのを手傳(伝)って 1 日を暮したが、夕は又、面白く騒ぎて 10 時頃床につく。

24 日、午前中は徒歩教練、主として敬礼の方法だ。

寒く、手が冷たくて弱った。午後は又馬の運動で、自分等は砲の手入れだ。

唯々何もなく、平凡な 1 日を送る。

25 日、明日、中隊長の内務検査があると云ふので、午前中は舎内の清潔整頓だ。

すゝを拂(仏)ふやら、下を掃くやら大掃除だ。

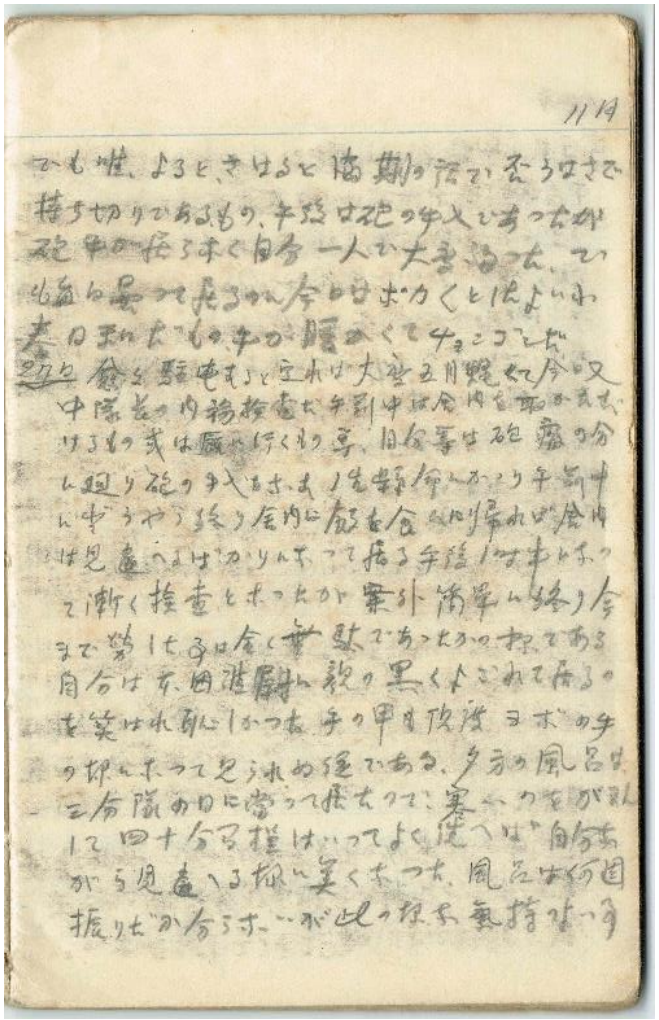
全く出来上れば、見違へる様になった。

午後は又、厩の手傳(伝)ひで、何もなく平凡に暮す。

26 日、今日も舎内の手入と思ひの外、1 日内務検査が延びて、今朝は午前中、徒歩教練である。

否、銃の操法である。

唯うるさくて、しょうがない。



【1937 年】11 月

でも唯、よるとさはると満期【除隊】の話で、否、うはさで持ち切りであるもの。

午後は砲の手入であったが、砲手が居らなく、自分 1 人で大変弱った。

でも、毎日曇って居るのに、今日はポカポカとした、よい小春日和だもの、手が暖かくてチョンゴシだ。

27 日、愈々駐屯すると定れば、大変五月蝿くて、今日又、中隊長の内務検査だ。

午前中は舎内を取かたずけるもの、或は厩に行くもの等、自分等は砲廠の分に廻り、砲の手入をなす。

一生懸命にかゝり、午前中にどうやら終り、舎内に飯を食ひに帰れば、舎内は見違へるばかりになって居る。

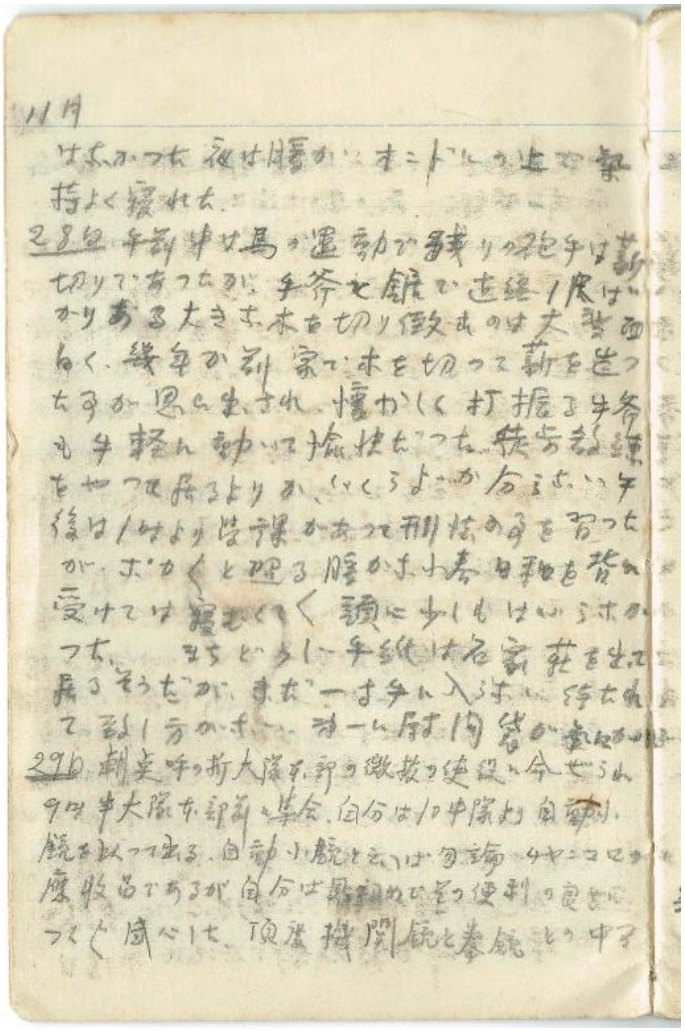
午後 1 時半になって漸く検査となったが、案外簡単に終り、今まで労した事は全く無駄であったかの様である。

自分は本田准尉に顔の黒くよごれて居るのを笑はれ恥しかった。

手の甲も、頂度ヨボ【朝鮮人の蔑称】の手の様になって、見られぬ位である。

夕方の風呂は、【自分達の第】三分隊の日に當って居たので、寒いのをがまんして 40 分間程はいって、よく洗へば、自分ながら見違へる様に美しくなった。

風呂は何週振りだか分からないが、此の様な氣持のよい事



はなかった。

夜は暖かいオンドルの上で氣持ちよく寝れた。

28 日、午前中は馬の運動で、残りの砲手は薪切りであったが、手斧と鋸で、直径 1 尺ばかりある大きな木を切り倒すのは、大変面白く、幾年か前、家で木を切って薪を造った事が思ひ出され、懐かしく打振る手斧も手軽に動いて愉快だった。

徒歩教練をやって居るよりか、いくらよいか分からない。

午後は 1 時より學課があって、刑法【おそらく陸軍刑法のこと。抗命、略奪、逃亡など罪刑が定められている［アジア歴史資料センターC12120409900 陸軍刑法 陸軍懲罰令(防衛省)］】の事を習ったが、ポカポカと照る、暖かな小春日和を背に受けては、眠くて眠くて頭に少しもはいらなかった。

まちどうしい手紙は石家莊を出て居るそうだが、未だ一寸手に入らない。

待たれて致し方がない。

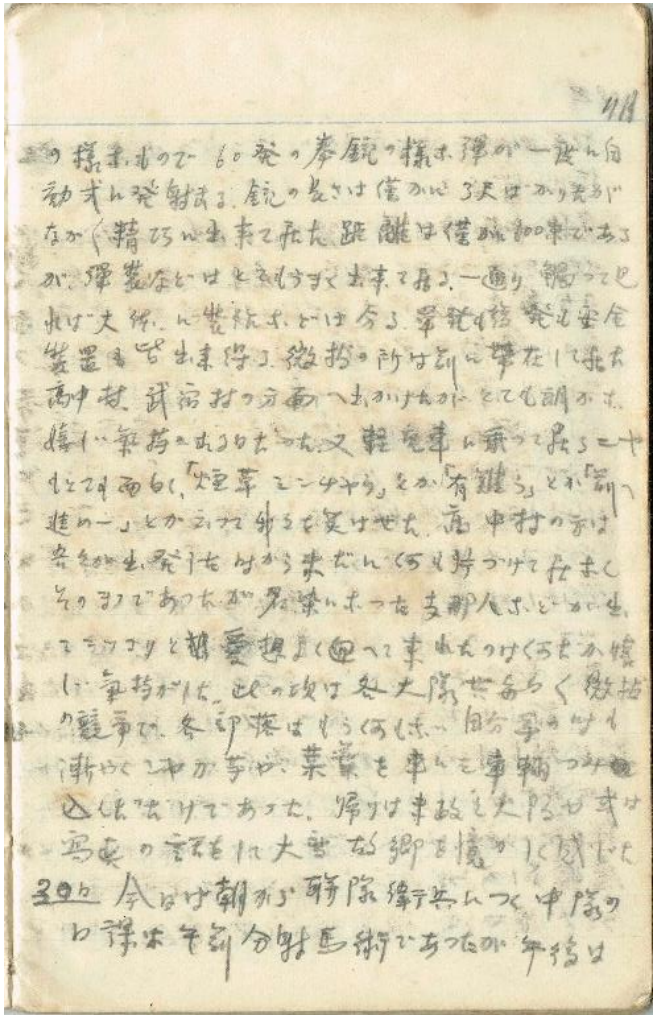
第一に、慰問袋が氣にかかる。

29 日、朝点呼の折、大隊本部の徴発【原文は「徴抜」と書いているが「徴発」のことと思われるので、これ以降「徴発」と記載する】の使役に命ぜられ、9 時半、大隊本部前に集合。

自分は 10 中隊より自動小銃を持って出る。

自動小銃と云へば、勿論チャンコロの押収品であるが、自分は見初めで、その便利の良さにつくづく感心した。

丁度、機関銃と拳銃との中間



の様なもので、60 発の拳銃の様な弾が一度に自動式に発射する。

銃の長さは僅かに 3 尺【≒90ｃｍ】ばかりだが、なかなか精巧に出来て居た。

【射程】距離は僅かに 600米(m)であるが、弾装などはとてもうまく出来て居る。

一通り触(触)って見れば、大体に操作などは分かる。

單発も複発も安全装置も皆出来得る。

徴発の所は、前に帯(帯)在して居た高中村、武宿村の方面へ出かけたが、とても朗かな嬉しい氣(気)持がする日だった。

又、輜重車(しちょう)【軍の物資を運ぶための荷車、おそらく馬で牽くタイプのもの】に乗って居るニーヤもとても面白く、「煙草シンヂャウ」【「煙草を頂戴」の意味】とか、「有難う」とか「前へ進めー」とか云って我々を笑はせた。

高中村の方は、吾々が出発した時から未だに何も片づけて居なく、そのまゝであったが、馴染みになった支那人などが出て、ニッコリと愛想よく迎へて呉れたのは、何だか嬉しい氣(気)持がした。

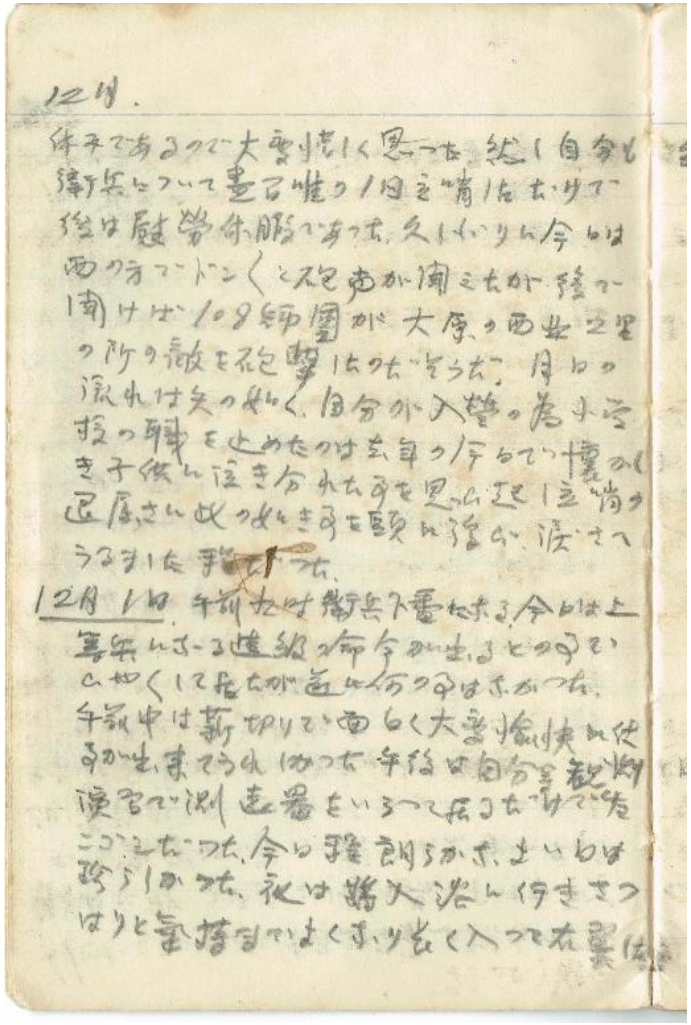
此の頃は、各大隊共、毎日毎日徴発の競争で、各部落はもう何もない。

自分等の時も、漸(よう)やくジャガ芋や、菜葉(なっぱ)を車に 3 車輌つみ込んだだけであった。

帰りは〇政と大阪や或は寫(写)真の話をして、大変故郷を懐かしく感じた。

30 日、今日は朝から聯(連)隊衛兵につく。

中隊の日課は午前、分射【おそらく分隊射撃演習のこと】、馬術であったが、午後は



【1937 年】12 月

休みであるので、大変惜しく思った。

然し自分も衛兵について、晝(昼)間、唯の 1 回立哨しただけで、後は慰勞(労)休暇であった。

久しぶりに、今日は西の方でドンドンと砲声が聞えたが、後で聞けば 108 師團が大原【おそらく第 109 師団が占領していた太原の誤りと思われるので、これ以降は「太原(たいげん)」に置き換える】の西北 2 里【≒8ｋｍ】の所の敵を砲撃したのだそうだ。

月日の流れは矢の如く、自分が入營(営)の為、小学校の職を辞めたのは去年の今日で、懐かしき子供に泣き別れた事を思ひ起し、立哨の退屈さに、此の如き事を頭に浮び、涙さへうるました程だった。

12 月 1 日、午前 9 時、衛兵下番になる。

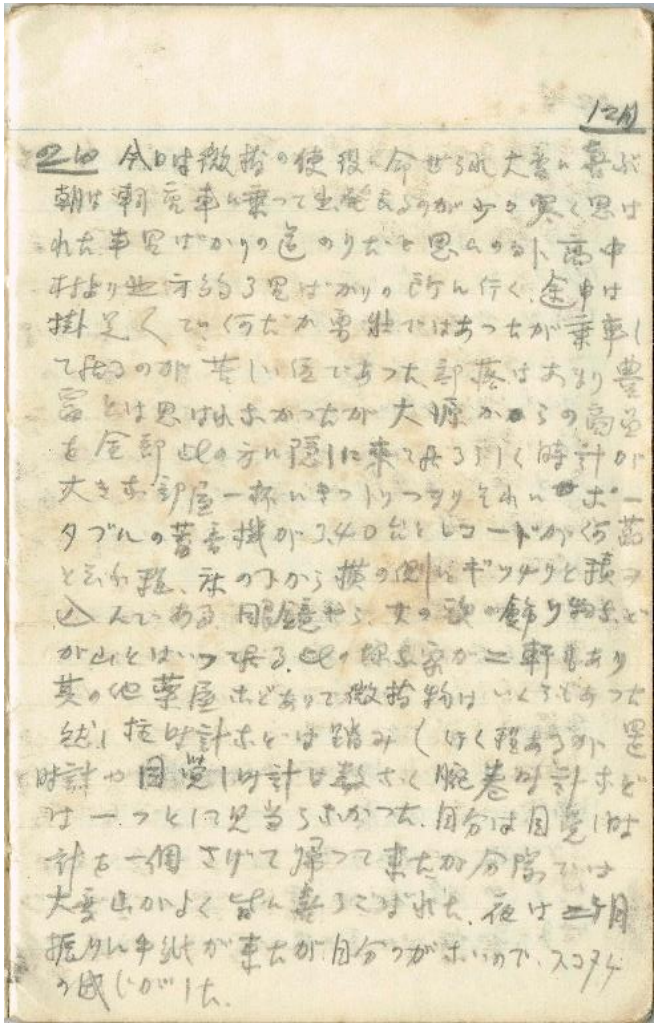
今日は上等兵になる進級の命令が出るとの事で、ひやひやして居たが、遂に何の事はなかった。

午前中は薪切りで面白く、大変愉快に仕事が出来てうれしかった。

午後は自分等、観測演習で、測遠器をいらって居るだけでチョンゴシだった。

今日程朗らかなよい日は珍しかった。

夜は入浴に行き、さっぱりと氣(気)持までよくなり、長く入って右翼した。



【1937 年】12 月

2 日、今日は徴発の使役に命ぜられ、大変に喜ぶ。

朝は輜重（しちょう）車に乗って出発するのが、少々寒く思はれた。

半里ばかりの道のりだと思ひの外、高中村より北方約 3 里ばかりの所に行く。

途中は駆足、駆足で、何だか勇壮ではあったが、乗車して居るのが苦しい位であった。

部落はあまり豊富とは思はれなかったが、太原（たいげん）からの商品を全部此の方に隠しに来て居るらしく、時計が大きな部屋一杯にぎっしりつまり、それにポータブルの蓄音機が 3・40 台とレコードが何萬（万）と云ふ程、床の下から横の側にギッチリと積み込んである。

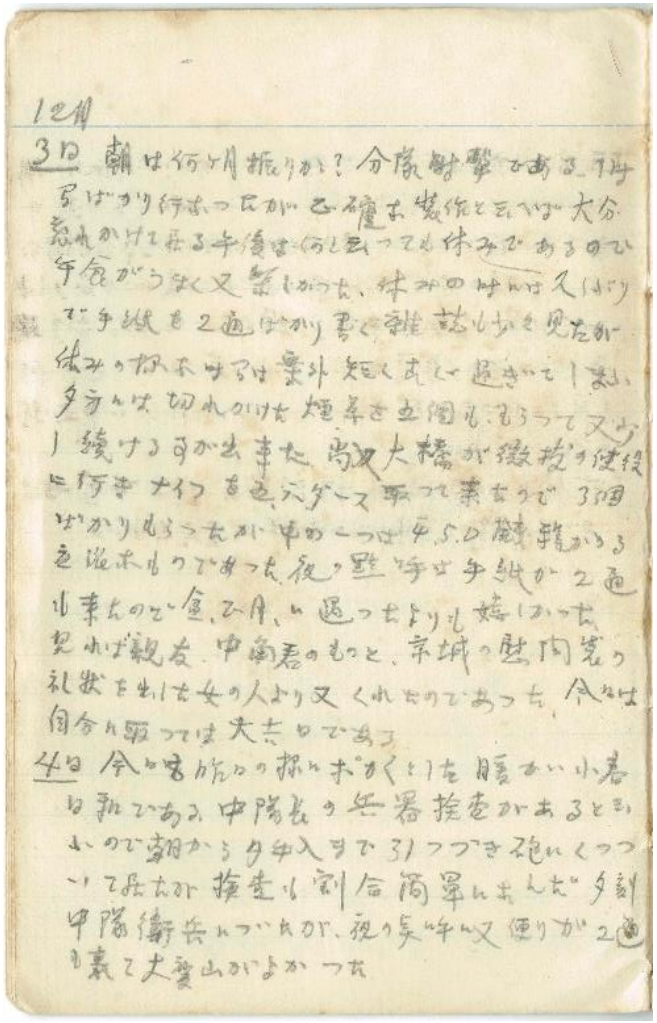
眼鏡やら、女の頭の飾り物などが、山とはいって居る。

此の様な家が 2 軒もあり、其の他、薬屋などありて、徴拾物はいくらもあった。

然し、柱時計などは踏み踏み行く程あるが、置時計や目覚し時計は数なく、腕巻時計などは 1 つとして見当らなかった。

自分は目覚し時計を 1 個さげて帰って来たが、分隊では大変山がよく、皆に喜ろこばれた。

夜は ~~2~~ヶ月振りに手紙が来たが、自分のがないので、スコヌケの感じがした。



【1937 年】12 月

3 日、朝は何ヶ月振りか？分隊射撃である。

1 時間ばかり行なったが、正確な操作と云へば、大分忘れかけて居る。

午後は何と云っても休みであるので、午食がうまく、また楽しかった。

休みの時には、久しぶりで手紙を 2 通ばかり書く。

雑誌も少々見たが、休みの様な時間は案外短く、すぐ過ぎてしまふ。

夕方には、切れかけた煙草を 5 個ももらって、又少し續(続)ける事が出来た。

尚、大橋が徴発の使役に行き、ナイフを 5・6 ダース取って来たので、3 個ばかりもらったが、中の一つは 4・50 銭程かゝる立派なものであった。

夜の點(点)呼は手紙が 2 通も来たので、盆・正月に遇(あ)ったよりも嬉しかった。

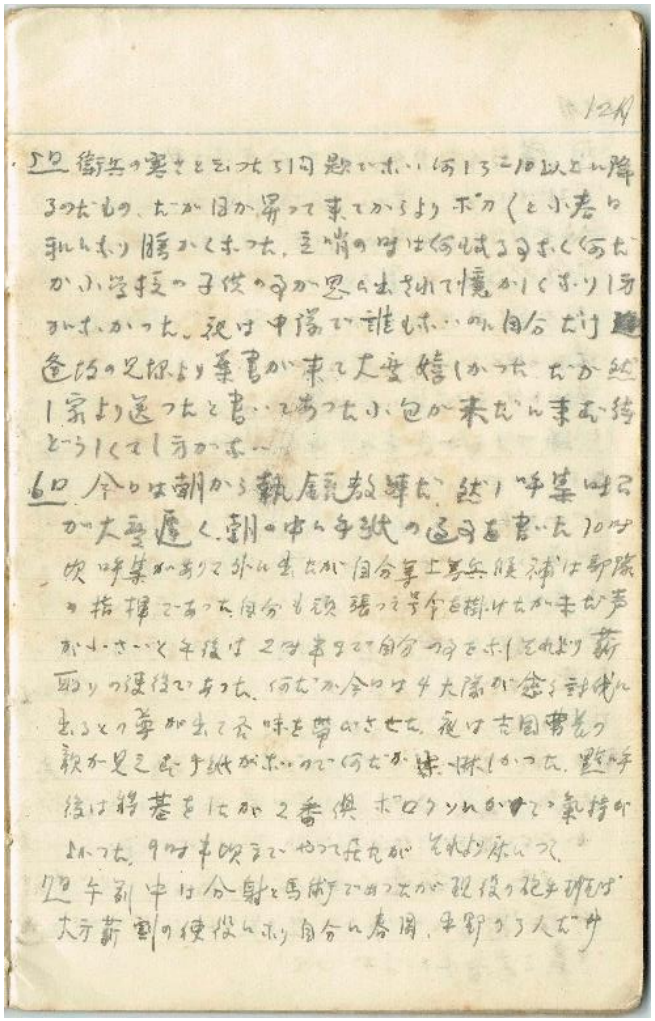
見れば親友、中角君のものと、京城の慰問袋【Aの日記の 1937 年 9 月 5 日】の礼状を出した女の人より又くれたのであった。

今日は自分に取っては大吉日である。

4 日、今日も昨日の様に、ポカポカとした暖かい小春日和である。

中隊長の兵器検査があると云ふので、朝から夕手入まで引つづき砲にくっついて居たが、検査も割合簡單にすんだ。

夕刻、中隊衛兵についたが、夜の点呼に又便りが 2 通も来て、大変山がよかった。



【1937 年】12 月

5 日、衛兵の寒さと云ったら、問題でない。

何しろ－10【℃】以上に下るのだもの。

だが、日が昇って来てからより、ポカポカと小春日和になり、暖かくなった。

立哨の時は、何もする事なく、何だか小学校の子供【教え子達】の事が思ひ出されて、懐かしくなり、し方がなかった。

夜は、中隊で誰もないのに、自分だけ【故郷の四條畷の】逢坂の兄様より葉書が来て、大変嬉しかった。

だが然し、家より送ったと書いてあった小包が未だに来ず、待どうしくてし方がない。

6 日、今日は朝から執銃教練だ。

然し、呼集時間が大変遅く、朝の中に手紙の返事を書いた。

10 時頃、呼集がありて外に出たが、自分等、上等兵候補は部隊指揮であった。

自分も頑張って号令を掛けたが、未だ声が小さいと。

午後は 2 時半まで自分の事をなし、それより薪取りの使役であった。

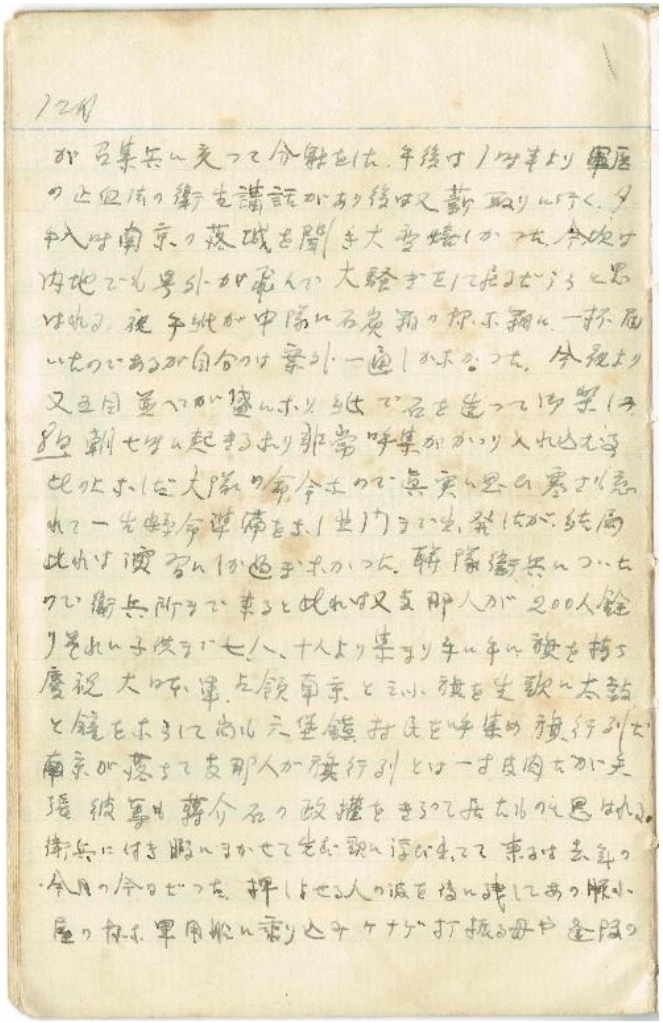
何だか今日は、四大隊が愈々討伐に出るとの噂が出て、否味を帯びさせた。

夜は吉岡曹長の顔が見えず、手紙がないので、何だか淋しかった。

點呼後は将棋をしたが、2 番倶、ボロクソにか【っ】て、氣持がよかった。

9 時半頃までやって居たが、それより床につく。

7 日、午前中は分射と馬術であったが、現役の砲手班は大方、薪割の使役になり、自分に春岡、平野の 3 人だけ



が召集兵に交って分射をした。

午後は 1 時半より軍医の止血法の衛生講話があり、後は又、薪取りに行く。

夕手入時、南京の落城を聞き、大変嬉しかった。

今頃は内地でも号外が飛んで、大騒ぎをして居るだらうと思はれる。

（参考）1937 年 11 月 20 日に支那事変に関して大本営が設置され、軍の最高統帥者たる天皇の命令は、それまでの「臨参命」から「大陸命」に変わっていたが、1937 年 12 月 1 日に大陸命第 8 号として、「中支那方面軍司令官ハ海軍ト協同シテ敵國(国)首都 南京ヲ攻略スベシ」との命令が出された（すでに現地では 11 月 18 日以降、南京に向けて進撃中だった）。日記にある 12 月 7 日の時点は、まだ日本軍が南京城を包囲した段階であり、中国に対する開城勧告の回答期限だった 7 月 10 日に攻撃を開始、実際に占領したのは 13 日であり、17 日には入城式典が行われた。

［アジア歴史資料センターC14060903700 大陸命綴（支那事変）巻 02（防衛省）の画像 17 枚目および防衛省戦史叢書第 86 巻 「支那事変陸軍作戦<1>」416～438 頁（画像 219 枚目～230 枚目）］

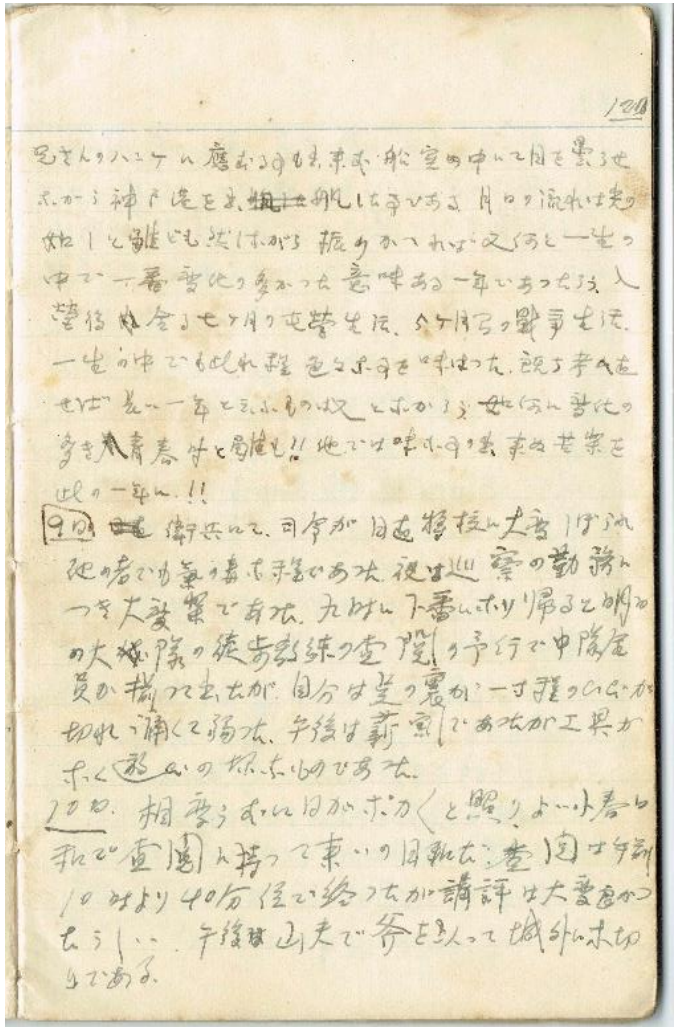
夜、手紙が中隊に石炭箱の様な箱に、一杯届いたのであるが、自分のは案外、1 通しかなかった。今夜より又、五目並べが盛になり、紙で石を造って御楽しみ。

8 日、朝 7 時に起きるなり非常呼集がかゝり、入れ込む事、此の上なしだ。

大隊の命令なので眞(真)実に思ひ、寒さも忘れて一生懸命準備をなし、北門まで出発したが、結局、此れは演習にしか過ぎなかった。

聯(連)隊衛兵についたので、衛兵所まで来ると、此れは又、支那人が 200 人餘(余)り、それに子供まで 7・80 人より集まり、手に手に旗を持ち、慶祝大日本軍占領南京と云う小旗を先頭に、太鼓と鐘をならして、尚も六堡鎮村民を呼集め、旗行列だ。

南京が落ちて支那人が旗行列とは、一寸皮肉だが、矢張、彼等も蒋介石(しょうかいせき)の政權(権)をきらって居たものと思はれる。【原文の末尾 3 行の判読文は次頁に廻す】



【1937 年】12 月

【冒頭３行は前頁の原文末尾の判読文】

衛兵に付き、暇にまかせて先ず頭に浮び出て来るは、去年の今月の今日だった。

押しよせる人の波を後に残して、あの豚小屋の様な軍用船に乗り込み、ケナゲ【に】打振る母や、逢阪の兄さんのハンケ【チ】に應ずる事も出来ず、船室の中にて目を曇らせながら、神戸港を出航した事である。

月日の流れは光の如しと雖ども、然しながら振りかへれば又、何と一生の中で一番変化の多かった、意味ある１年であったろう。

入營後、全る７ヶ月の屯營生活、５ヶ月間の戰爭生活、一生の中でも此れ程、色々な事を味はった、即ち考へ直せば長い１年と云ふものは又となかろう。

如何に変化の多き青春時【代】と雖も!!

他では味ふ事の出来ぬ苦楽を此の１年に!!

9 日、衛兵にて司令が日直將校に大変しぼられ、他の者でも氣の毒な程であった。

夜は巡察の勤務につき、大変楽であった。

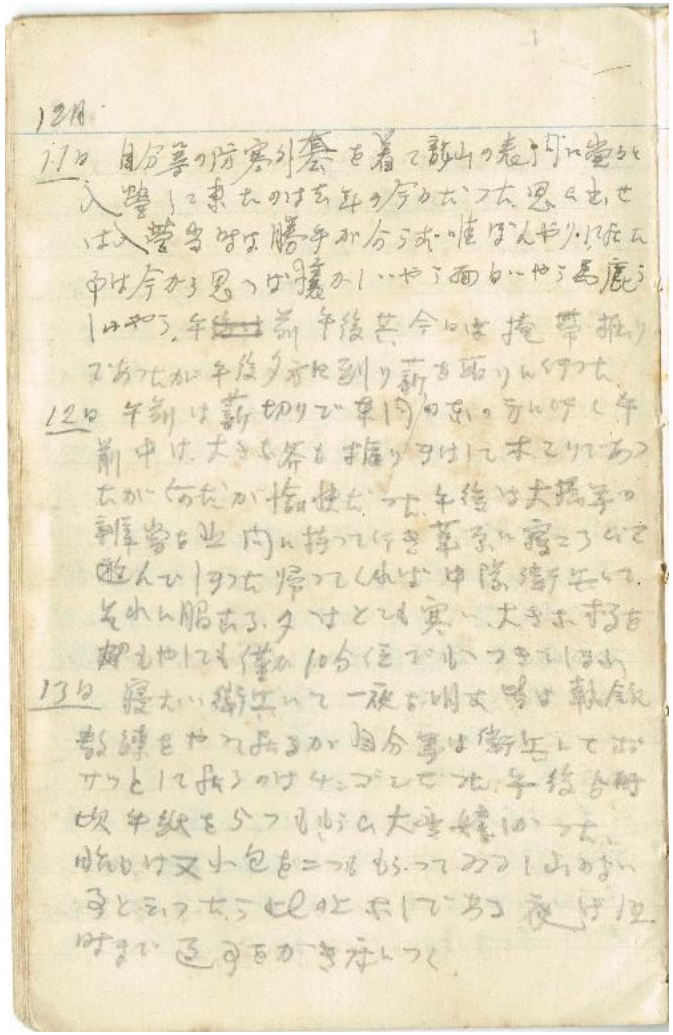
9 時に下番になり帰ると、明日の大隊の徒歩教練の査閲の予行で、中隊全員が揃って出たが、自分は足の裏が一寸【≒3ｃｍ】程のひびが切れ、痛くて弱った。

午後は薪割であったが、工具がなく、遊びの様なものであった。

10 日、相変らず日がポカポカと照り、よい小春日和で査閲に持って来いの日和だ。

査閲は午前 10 時より 40 分位で終ったが、講評は大変良かったらしい。

午後は山夫で、斧を以って城外に木切りである。



【1937 年】12 月

11 日、自分等の、防寒外套を着て、【兵営がある朝鮮の】龍山の表門に堂々と入營(営)して来たのは、去年の今日だった。

思ひ出せば、入營(営)当時は勝手が分らず、唯ぼんやりして居た事は、今から思へば懐かしいやら、面白いやら、馬鹿らしいやら。

午前・午後共、今日は掩帯(えんたい)堀りであったが、午後、夕方に到り、薪を取りに行った。

12 日、午前は薪切りで、東門の東の方に行く。

午前中は、大きな斧も振りまはして木こりであったが、何だか愉快だった。

午後は大橋等の辨當(弁当)を北門に持って行き、草原に寝ころびて遊んでしまった。

帰ってくれば中隊衛兵とて、それに服する。

夕はとても寒い。大きな薪をもやしても、僅か 10 分位でもへつきてしまふ。

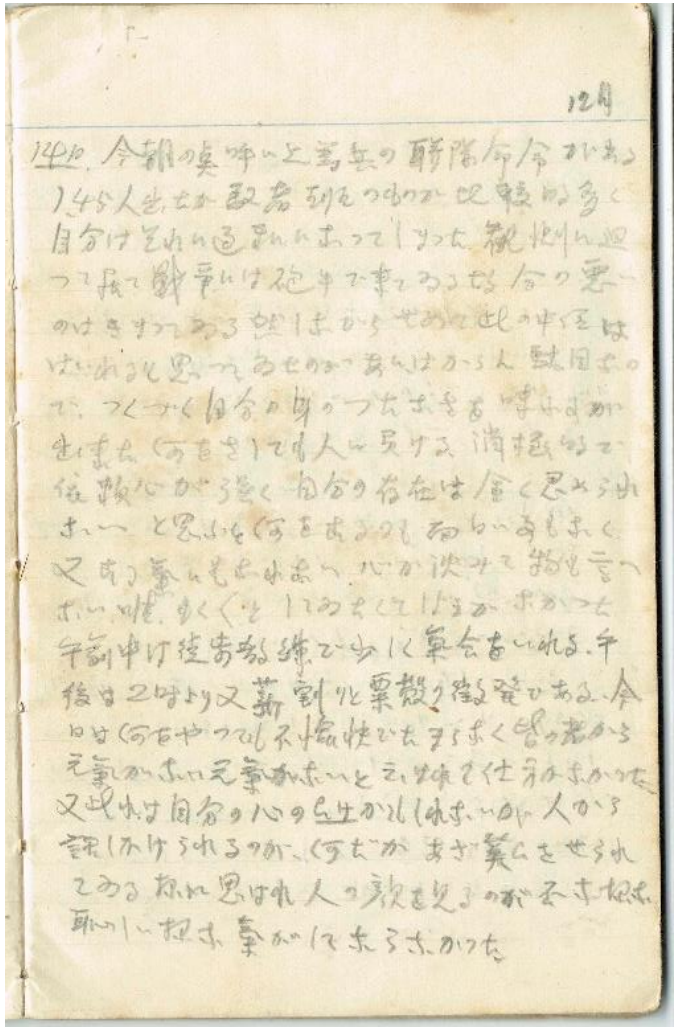
13 日、眠むい衛兵にて一夜を明す。

皆は執銃教練をやって居るが、自分等は衛兵にてボサッとして居るのはチョンゴシだった。

午後 5 時頃、手紙を 5 つももらひ、大変嬉しかった。

昨日は又小包を 2 つももらってゐ(い)るし、山のよい事と云ったら、此の上なしである。

夜は 12 時まで返事をかき、床につく。



【1937 年】12 月

14 日、今朝の点呼に、【1 等兵から】上等兵【への昇進】の聯隊命令が出る。

【第 10 中隊から？昇進者が】14・5 人出たが、馭者班のものが比較的多く、自分はそれに〇〇になってしまった【入らなかった】。

【楽な】観測に廻って居て、戦争には砲手で来てゐる故、分の悪いのはきまってゐる。

然しながら、せめて此の中位ははいれると思ってゐたのが、あにはからん、駄目なので、つくづく自分の身のつたなさを味ふ事が出来た。

何をさしても人に負ける、消極的で依頼心が強く、自分の存在は全く認められないと思ふと、何をするのも面白い事もなく、又、する氣にもなれない。

心が沈みて物も言へない。

唯、もくもくとしてゐたくて、しようがなかった。

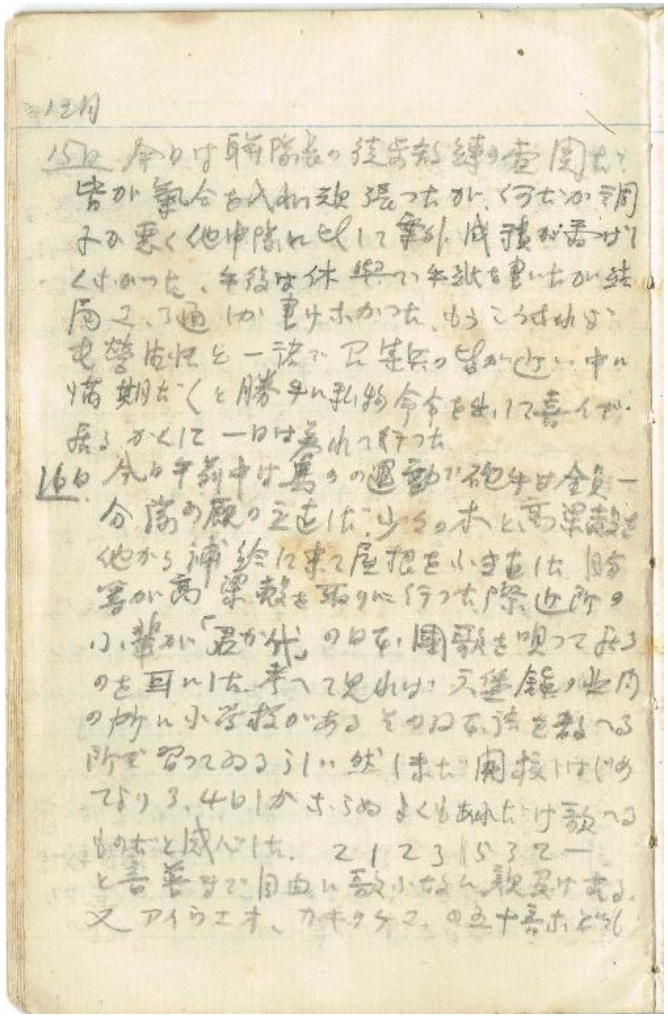
午前中は徒歩教練で、少しく氣合をいれる。

午後は 2 時より又、薪割りと粟穀【アワの実】の徴発である。

今日は何をやっても不愉快でたまらなく、皆の者から元氣がない、元氣がないと云はれて仕方がなかった。

又、此れは自分の心のひけかもしれないが、人から話しかけられるのが、何だかあざ笑ひをせられてゐる様に思はれ、人の顔を見るのが否な様な、恥ずかしい様な氣がしてならなかった。

【「Aの日記」3 頁で注記したように、平時の野砲 1 個中隊の定数が上等兵 20 名、1・2 等兵 122 名だったが、日中戦争中は召集兵が入るほか、現役兵も現役期間が延長されたので、上等兵の割合が高まったと思われる。兵籍簿によれば、中尾敏郎が上等兵に上がったのは 1 年半後の 1939 年 6 月 1 日である】



【1937 年】12 月

15 日、今日は聯隊長の徒歩教練の査閲だ。

皆が氣合を入れて頑張ったが、何だか調子が悪く、他中隊に比して案外成績が芳しくなかった。

午後は休與で、手紙を書いたが、結局２・３通しか書けなかった。

もうこうすれば屯營生活と一緒で、召集兵の皆が、近い中に満期だ、満期だと、勝手に私物命令を出して喜んで居る。

かくして１日は暮れていった。

【首都南京の陥落で戦勝確定＝復員が近いとの期待があったと思われる。しかし、中国側は事前に政府機能を漢口、さらには内陸の重慶に移して抗戦を続け、日中戦争は泥沼化していった】

16 日、今日、午前中は馬の運動で、砲手は全員、一分隊の厩の立直しだ。

少々の木と、高梁穀【高粱の茎・葉】を他から補給して来て、屋根をふき直した。

自分等が高粱穀を取りに行った際、近所の小輩【子供】が「君が代」の日本國歌を唄って居るのを耳にした。

考へて見れば、六堡鎮の北門の所に小学校がある。

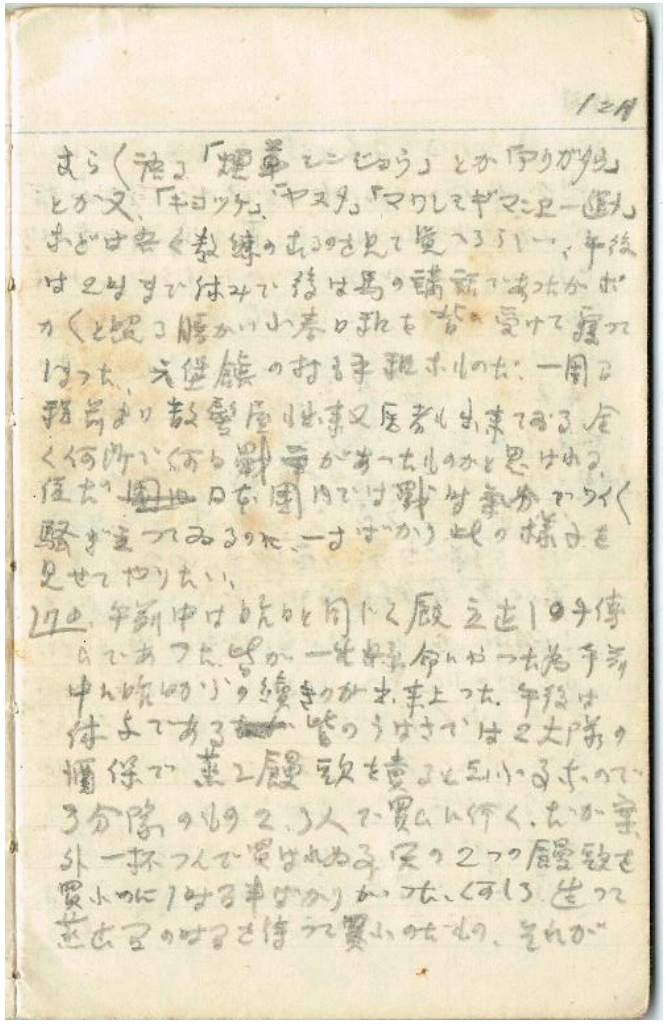
その日本語を教へる所で習ってゐるらしい。

然し未だ開校しはじめてより、３・４日しかならぬ。

よくもあれだけ歌へるものだと感心した。

２１２３、５３２－と、音符まで自由に歌ふ故に、顔負けする。

又、アイウエオ、カキクケコの五十音なども



【1937 年】12 月

すらすら語る。

「煙草シンジョウ」とか「アリガタウ」とか、又「キヨツケ」、「ヤスメ」、「マワレミギ、マンエー進メ」などは吾々教練のするのを見て覺へるらしい。

午後は 2 時まで休みで、後は馬の講話であったが、ポカポカと照る、暖かい小春日和を背に受けて、眠ってしまった。

六堡鎮の村も平和なものだ。1 週間程前より散髪屋も出来、又、医者も出来てゐる。全く、何所で何日戦争があったものかと思はれる位だ。

日本國内では、戦時氣分でワイワイ騒ぎ立ってゐるのに、一寸ばかり此の様子を見せてやりたい。

17 日、午前中は昨日と同じく、厩建直しの手傳ひであった。

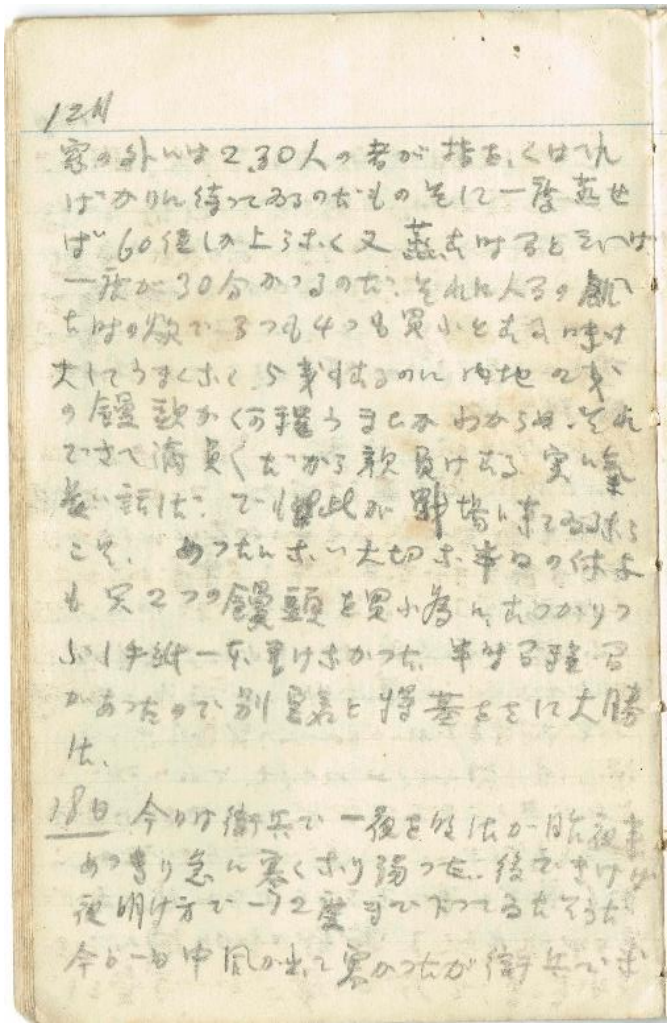
皆が一生懸命にやった為、午前中に昨日からの續きのが出来上がった。

午後は休与である。

皆のうはさでは、二大隊の酒保で蒸シ饅頭を賣ると云ふ事なので、【自分たち】三分隊のもの 2・3 人で買ひに行く。

だが、案外、一杯つんで買はれぬこと。只の 2 つの饅頭を買ふのに 1 時間半ばかりかゝった。何しろ、造って蒸す間の時間を待って買ふのだもの。

それが、



【1937 年】12 月

窓の外には 2・30 人の者が指をくはへんばかりに待ってゐるのだもの。

そして一度蒸せば 60【個】位しか上らなく、又蒸す時間と云へば、一度が 30 分かゝるのだ。

それに、人間の飢へた時の欲で、3 つも 4 つも買ふとする。

味は大してうまくなく、5 銭もするのに、内地の 2 銭の饅頭が何程うまひかわからぬ。

それでさへ満員、満員だから顔負けする。

実に氣長い話しだ。でも此が戦場に来てゐるならこそ。

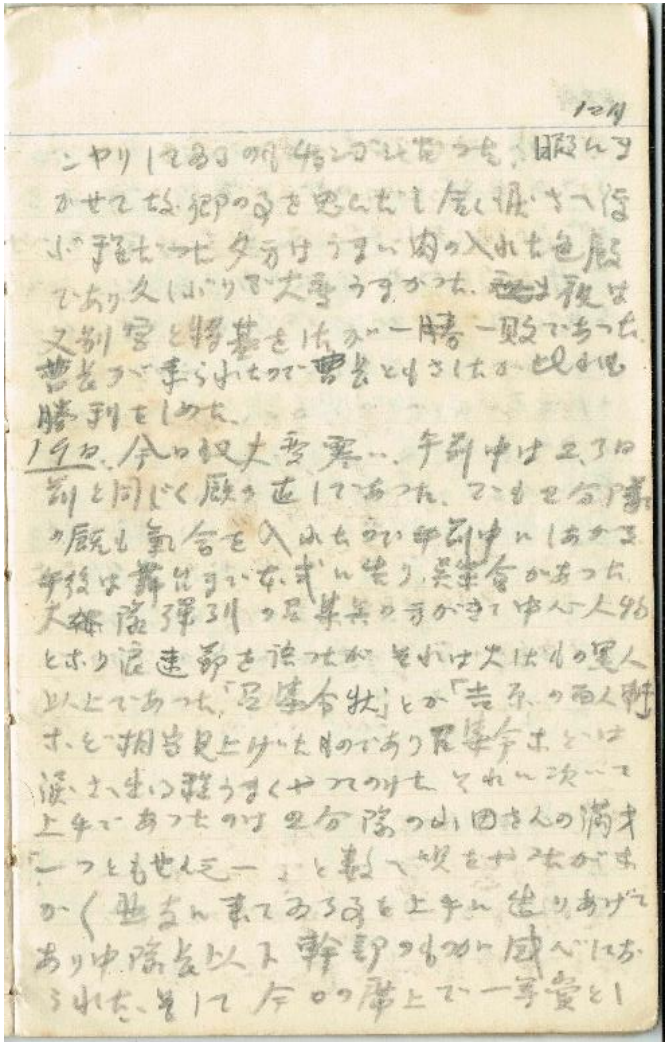
めったにない大切な半日の休与も、只 2 つの饅頭を買ふ為に、すっかりつぶし、手紙 1 本書けなかった。

半時間程、間があったので、別宮君と将棋をさして大勝した。

18 日、今日は衛兵で一夜を明したが、昨夜来、めっきり急に寒くなり弱った。

後できけば、夜明け方で、－12 度まで下がってゐたそうだ。

今日一日中、風が出て寒かったが、衛兵でボ



【1937 年】12 月

ンヤリしてゐるのもチョンゴシだった。

暇にまかせて故郷の事を思ひだし、全く涙さえ浮ぶ程だった。

夕方は、うまい肉の入れた色飯であり、久しぶりで大変うまかった。

夜は又、別宮と將棋をしたが、1 勝 1 敗であった。

曹長が来られたので、曹長ともさしたが、此れも勝利をしめた。

19 日、今日も又大変寒い。

午前中は、2・3 日前と同じく厩の直しであった。

でも二分隊の厩も氣合を入れたので、午前中にしあがる。

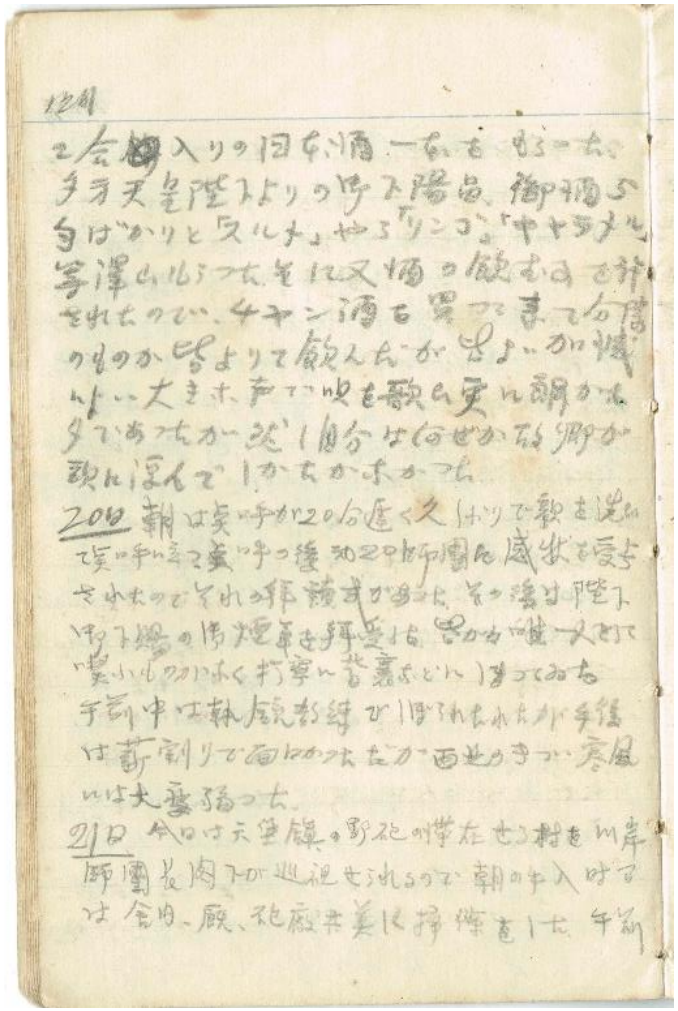
午後は舞台まで本式に造り、娯樂会があった。

大隊段列【砲兵大隊に付属する砲弾の輸送部隊】の召集兵の方がきて、中心人物となり、浪速節を語ったが、それは大したもの、玄人以上であった。

「召集令状」とか「吉原の百人斬」など相当見上げたものであり、召集令【状】などは涙さへ出る程、うまくやってのけた。

それに次いで上手であったのは、二分隊の山田さんの漫才、「一つともせんえー」と数へ唄をやったが、なかなか北支に来てゐる事を上手に造りあげてあり、中隊長以下、幹部のものが感心しておられた。

そして今日の席上で一等賞とし



2 合入りの日本酒 1 本をもらった。

夕方、天皇陛下よりの御下賜品、御酒 5 勺【≒90ｃｃ】ばかりを、「スルメ」やら「リンゴ」、「キャラメル」等、澤山（たくさん）もらった。

そして又、酒の飲む事を許されたので、チャン酒【中国の酒】を買って来て、分隊のものが皆よりて飲んだが、皆よい加減によい、大きな声で唄を歌ひ、実に朗かな夕であったが、然し自分は、何ぜか故郷が頭に浮んでしかたがなかった。

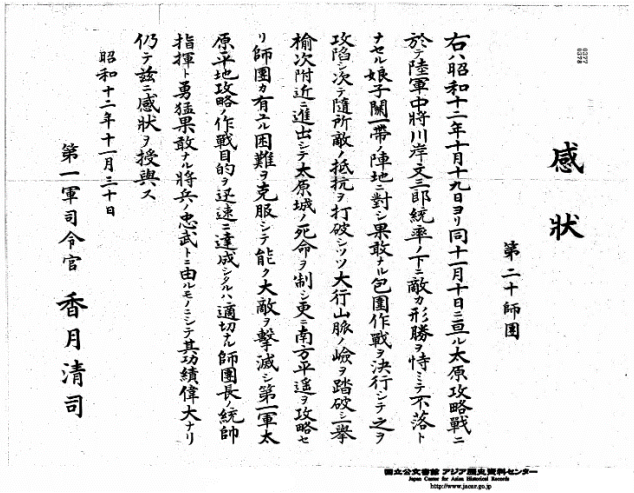
20 日、朝は点呼が 20 分遅く、久しぶりで顔を洗ひて点呼に立つ。

点呼の後、第二十師團（団）に感状【おそらく右図のもの】を授与されたので、それの拝讀（読）式があった。

その後は、陛下御下賜の御煙草を拝受した。

皆が皆、唯一人として喫ふものがなく、丁寧に背嚢（はいのう）などにしまってゐ（い）た。

午前中は執銃教練でしぼられたが、午後は薪割りで面白かった。だが、西北のきつい寒風には大変弱った。



感状

第二十師團

右ハ昭和十二年十月十九日ヨリ同十一月十日豆ル太原攻略戰ニ於テ陸軍中將川岸文三郎統率ノ下敵カ形勝ヲ恃ミテ不落トナセル娘子關一帶ノ陣地對シ果敢ナル包圍作戰ヲ決行シテ之ヲ攻陷シ次テ隨所敵ノ抵抗ヲ打破シツツ大行山脈ノ嶮ヲ踏破シ舉榆次附近ニ進出シテ太原城ノ死命ヲ制シ更ニ南方平遥ヲ攻略セリ師團カ有スル困難ヲ克服シテ能ク大敵ヲ撃滅シ第一軍太原平地攻略ノ作戰目的ヲ迅速ニ達成シタルハ適切ナル師團長統帥指揮ト勇猛果敢ナル將兵ノ忠武トニ由ルモノニシテ其功績偉大ナリ仍テ茲ニ感状ヲ授與ス

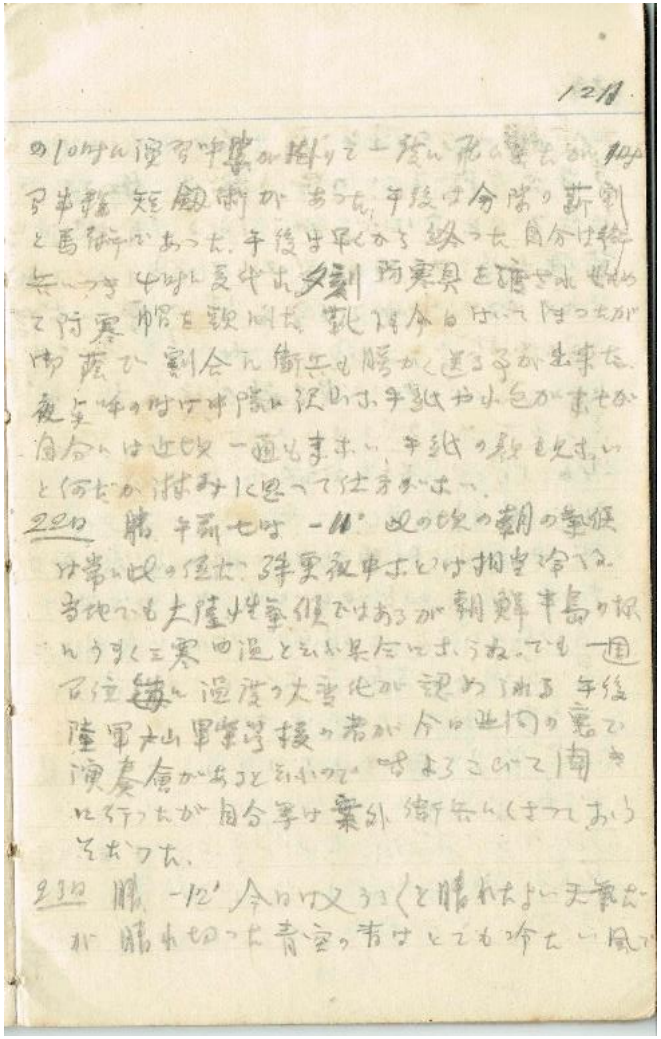
昭和十二年十一月三十日

第一軍司令官　香月清司

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

［アジア歴史資料センターC11111520100
支那事変 第 20 師団感状（防衛省）］

21 日、今日は六堡鎮の野砲の滞在せる村を、川岸師團（団）長閣下が巡視せられるので、朝の手入時間は舎内、厩、砲廠共、美しく掃除をした。午前



の 10 時に演習呼集が掛りて、一度に飛び出たが、1 時間半程、短剣術があった。

午後は分隊の薪割と馬術であった。

午後は【師団長巡視が？】早くから終った。

自分は衛兵につき、4 時に交代す。

夕刻、防寒具を渡され、初めて防寒帽を頭にした。

靴下も今日はいてしまったが、御蔭で割合に衛兵も暖かく送る事が出来た。

夜点呼の時は、中隊に沢山な手紙や小包が来たが、自分には近頃 1 通も来ない。

手紙の顔を見ないと、何だか淋みしく思へて仕方がない。

22 日、晴、午前 7 時、－11°、此の頃の朝の氣候は常に此の位だ。

殊更、夜中などは相当冷へる。

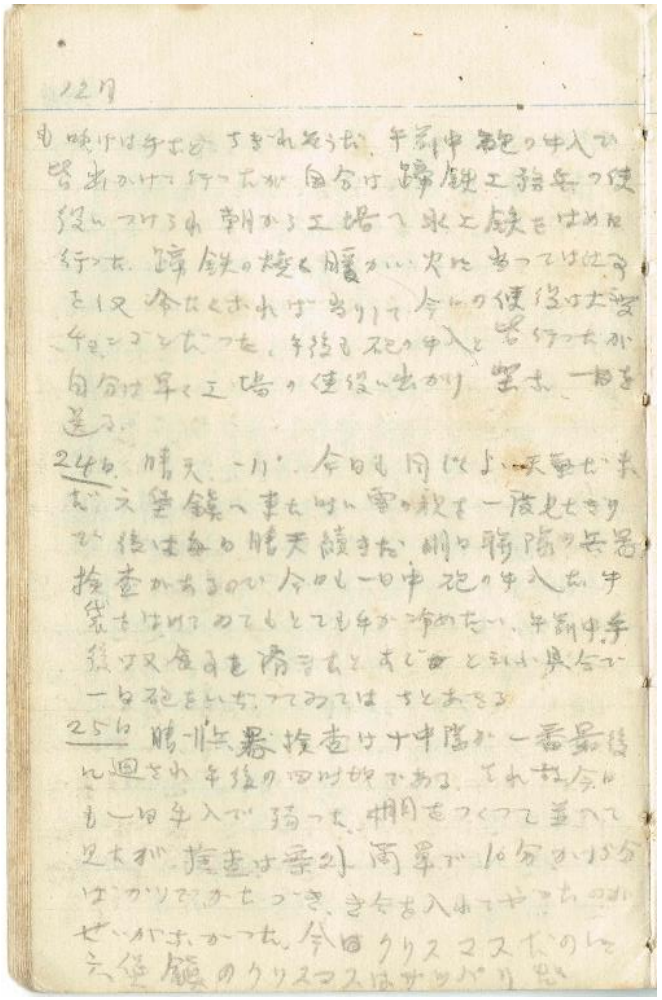
当地でも大陸性気候ではあるが、朝鮮半島の様に、うまく三寒四温と云ふ具合にならぬ。

でも、1 週間位毎に、温度の大変化が認められる。

午後、陸軍戸山軍樂學校の者が、今日、北門の裏で演奏會があると云ふので、皆よろこびて聞きに行ったが、自分等は案外、衛兵【勤務】にくさって、お〇そだった。

23 日、晴、－12°、今日は又、うらうらと晴れたよい天氣だが、晴れ切った青空の青はとてもつめたい。

風で



【1937 年】12 月

も吹けば、手などちぎれそうだ。

午前中、砲の手入で、皆出かけて行ったが、自分は蹄鉄工務兵の使役につけられ、朝から工場へ、氷上鉄【滑り止めがついた蹄鉄】をはめに行った。

蹄鉄の焼く、暖かい火に当っては仕事をし、又冷たくなれば当りして、今日の使役は大変チョンゴシだった。午後も砲の手入と皆行ったが、自分は早く工場の使役に出かけ、樂な 1 日を送る。

24 日、晴天、－11°、今日も同じくよい天氣だ。

未だ、六堡鎮へ来た時に雪の顔を一度見たきりで、後は毎日晴天續きだ。

明日、聯隊の兵器検査があるので、今日も 1 日中、砲の手入れだ。

手袋をはめてゐても、とても手が冷めたい。

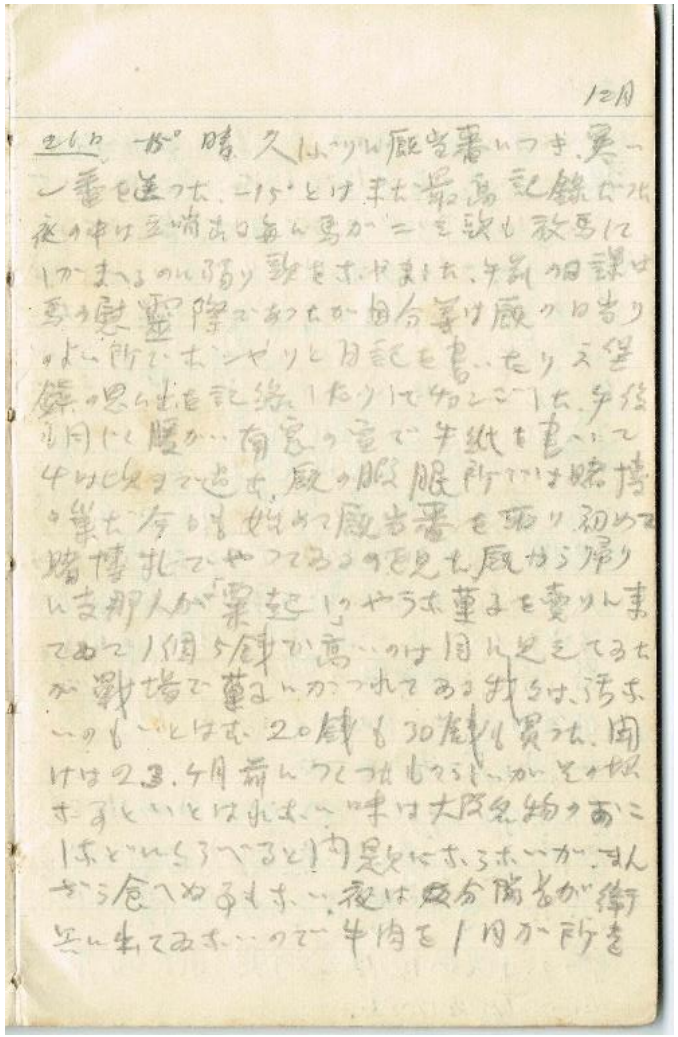
午前中、午後は又、食事を済ますとすぐ、と云ふ具合で 1 日、砲をいぢってゐては、ちとあきる。

25 日、晴、－11°、兵器検査は十中隊が一番最後に廻され、午後の 4 時頃である。

それ故、今日も 1 日、手入で弱った。

棚をつくって並べて見たが、検査は案外簡單で、10 分か 15 分ばかりでかたづき、き合を入れてやったのが、せいがなかった。

今日、クリスマスだのに六堡鎮のクリスマスはサッパリだ。



【1937 年】12 月

26 日、－15°、晴、久しぶりに厩当番につき、寒い一番を送った。

－15°とは、未だ最高記録だった。

夜の中は、立哨する毎に馬が 2・3 頭も放馬して、つかまへるのに弱り、頭をなやました。

午前の日課は馬の慰霊祭であったが、自分等は、厩の日当りのよい所でボンヤリと日記を書いたり、六堡鎮の思ひ出を記録したりして、チョンごしだ。

午後も、同じく暖かい南窓の室で、手紙を書いて 4 時頃まで過す。

厩の假(仮)眠所では賭博の巣だ。

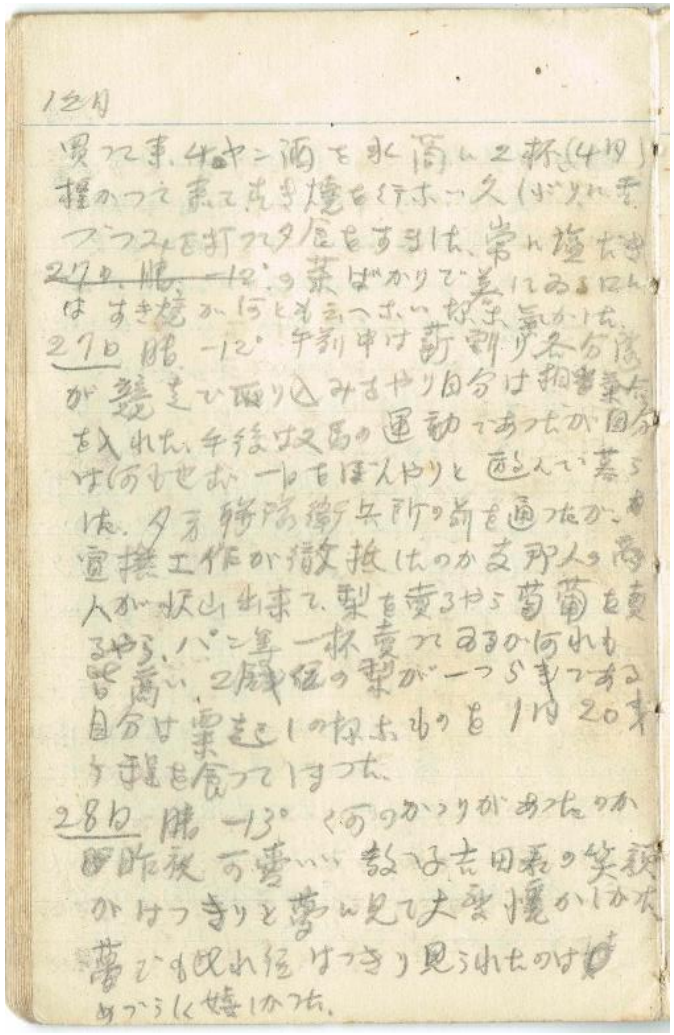
今日も始めて、厩当番を取り、初めて賭博札でやってゐ(い)るのを見た。

厩から帰りに、支那人が「粟起(あわおこ)し」のやうな菓子を賣(売)りに来てゐ(い)て、1 個 5 銭で、高いのは目に見えてゐ(い)たが、戦場で菓子にかつれ(え)てゐ(い)る我々は、汚ないのもい(厭)とはず 20 銭も 30 銭も買った。

聞けば 2・3 ヶ月前につくったものらしいが、その様な事と、い(厭)とはれない。

味は、大阪名物のおこしなどにくらべると、問題にならないが、まんざら食へぬ事もない。

夜は分隊長が衛兵に出て、ゐ(居)ないので、牛肉を 1 円が所を



【1937 年】12 月

買って来、チャン酒を水筒に 2 杯（4 円）程かって来て、すき焼を行ない、久しぶりに舌づつみを打って夕食をすました。

常に塩だきの菜（さい）ばかりで暮してゐる口（い）には、すき焼が何とも云へない様な氣（気）がした。

27 日、晴、－12°。

午前中は薪割り、各分隊が競争で取り込みをやり、自分は相当氣（気）合を入れた。

午後は又、馬の運動であったが、自分は何もせず、1 日をぼんやりと遊んで暮らした。

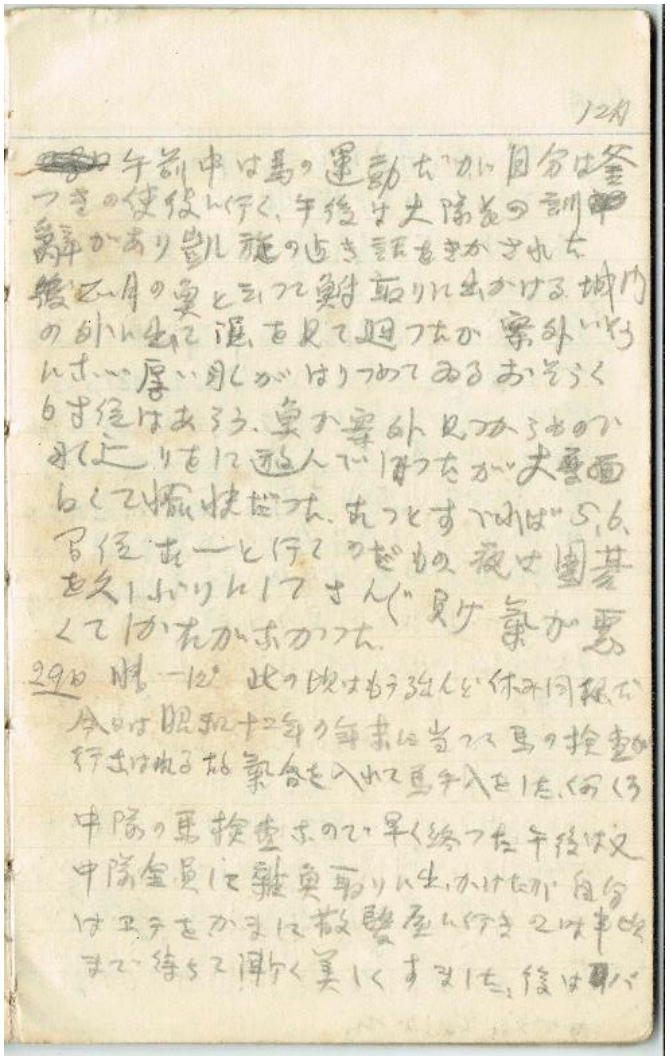
夕方、聯（連）隊衛兵所の前を通ったが、宣撫（せんぶ）工作【占領地住民に日本の政策を宣伝したり、援助するなどして、民心をひきつける工作】が徹底したのか、支那人の商人が沢山出来て、梨を賣（売）るやら、葡萄を賣（売）るやら、パン等一杯賣（売）ってゐ（い）るが、何れも皆高い。

2 銭位の梨が 1 つ 5 銭である。自分は栗起しの様なものを 1 円 20 銭ヶ程を食ってしまった。

28 日、晴、－13°。

何のかゝりがあったのか、昨夜、可愛いい教へ子、吉田君の笑顔がはっきりと夢に見て、大変懐かしかった。

夢でも、此れ位はっきり見られたのはめづらしく、嬉しかった。



【1937 年】12 月

午前中は馬の運動だが、自分は釜つきの使役に行く。

午後は大隊長の訓示があり、凱旋の近き話をきかされた。【11 月頃から、ドイツを仲介役として蒋介石政権との和平交渉が続いていたが、一般には秘密にされていた（結局 1 月 16 日に破談になった［防衛省戦史叢書第 86 巻「支那事変陸軍作戦<1>」453～479 頁 画像 237～250 枚目］）。ここでの「凱旋の近き話」というのは、C28 頁に出てくる新政権樹立工作の話だったのではないか】

正月の魚と云って、鮒取りにでかける。

城門の外に出て堀を見て廻ったが、案外いそうにない。

厚い氷がはりつめてゐ(い)る。おそらく 6 寸【≒18ｃｍ】位はあろう。

魚が案外見つからぬので、氷辷(すべ)りをして遊んでしまったが、大変面白くて愉快だった。

すっとすべれば、5・6 間位、すーと行くのだもの。

夜は圍(囲)碁を久しぶりにして、さんざん負け、氣(気)が悪くてしかたがなかった。

29 日、晴、－12°。

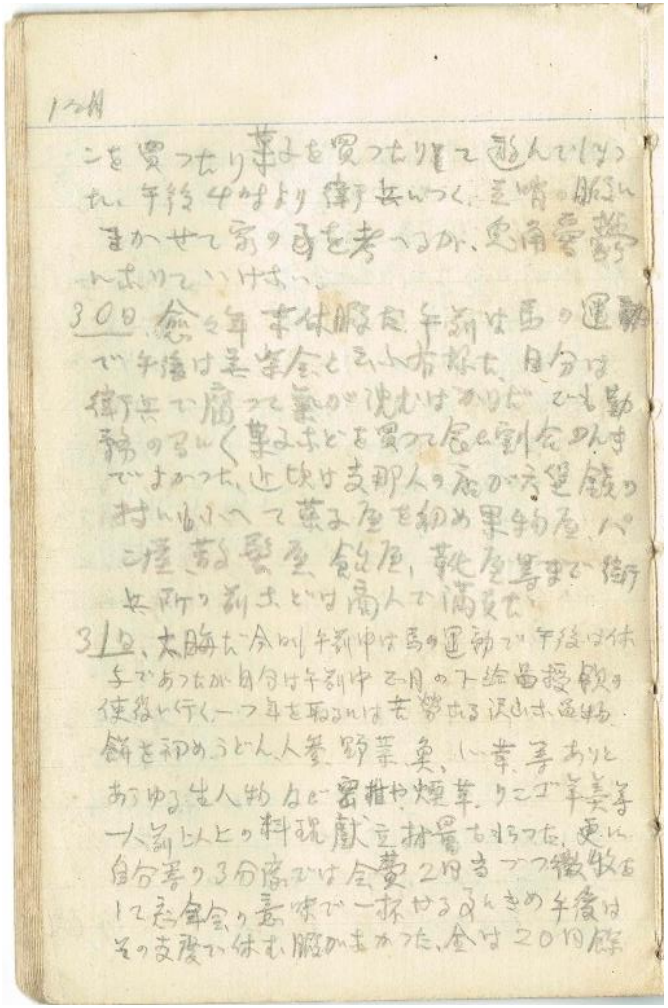
此の頃は、もう殆んど休み同様だ。

今日は昭和 12 年の年末に当って、馬の検査が行なはれる故、氣(気)合を入れて馬手入をした。

何しろ、中隊の馬検査なので、早く終った。

午後は又、中隊全員して雑魚(ざこ)取りに出かけたが、自分はエテ【得手勝手】をかまして散髪屋に行き、2 時半頃まで待ちて漸(ようや)く美しくすました。

後はパ



ンを買ったり、菓子を買ったりして遊んでしまった。

午後 4 時より衛兵につく。

立哨の暇にまかせて家の事を考へるが、兎角憂鬱になりていけない。

30 日、愈々年末休暇だ。午前は馬の運動で、午後は娯樂会と云ふ有様だ。

自分は衛兵で腐って氣が沈むばかりだ。

でも勤務の間に間に、菓子などを買って食ひ、割合のんきでよかった。

近頃は支那人の店が六堡鎮の村にもふへて、菓子屋を始め、果物屋、パン屋、散髪屋、飴屋、靴屋等まで、衛兵所の前などは商人で満員だ。

31 日、大晦だ。

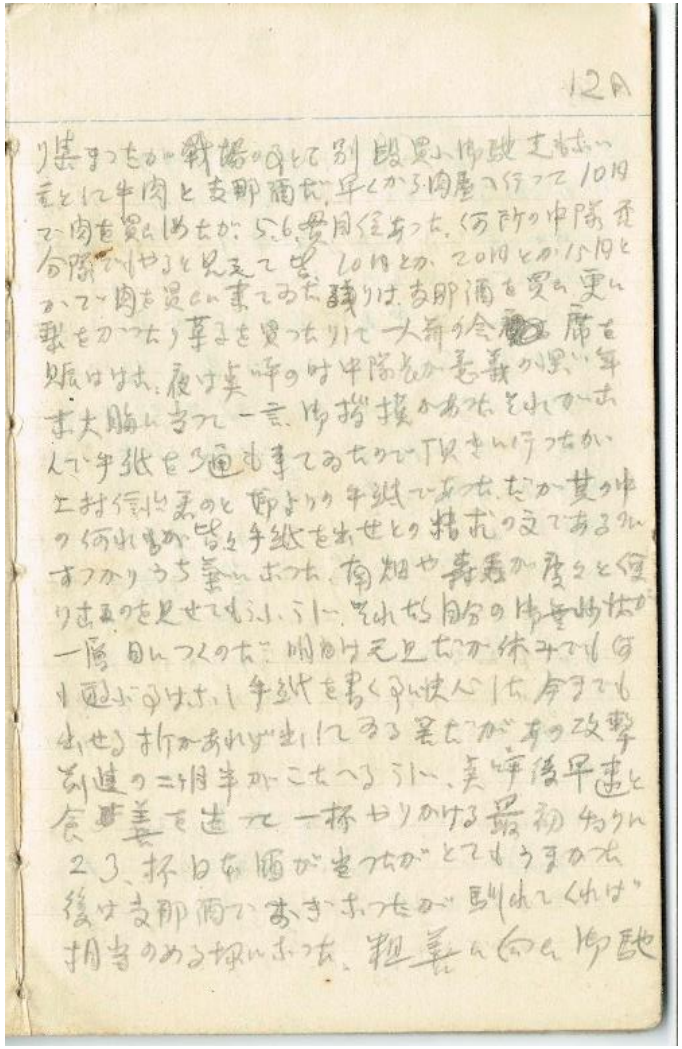
今日も午前中は馬の運動で、午後は休与であったが、自分は午前中、正月の下給品受領の使役に行く。

一つ年を取るには苦勞する。

沢山な品物、餅を始め、うどん、人参、野菜、魚、しい茸等、ありとあらゆる精進物及び、蜜柑や煙草、リンゴ、羊羹等、1 人前以上の料理献立材料をもらった。

更に自分等の三分隊では、会費 2 円当づつ徴収をして、忘年会の意味で一杯やる事にきめ、午後はその支度で休む暇がなかった。

金は 20 円餘



【1937 年】12 月

り集まったが、戦場の事とて、別段買ふ御馳走もない。

主として牛肉と支那酒だ。

早くから肉屋へ行って、10 円で肉を買ひしめたが、5・6 貫目【≒20ｋｇ】位あった。

何所の中隊、否、分隊でもやると見えて、皆、10 円とか 20 円とか 15 円とかで肉を買ひに来てゐた。

残りは支那酒を買ひ、更に梨をかったり、菓子を買ったりして、1 人前の会席を賑ははす。

夜は点呼の時、中隊長が、意義の深い年末大晦に当って、一言御挨拶があった。

それがすんで、手紙を 3 通も来てゐたので、頂きに行ったが、上村信治君【「Aの日記」2 頁の日の丸の写真に寄せ書きがある】のと、姉よりの手紙であった。

だが、其の中の何れもが皆々、手紙を出せとの請求の文であるのに、すっかりうち氣になった。

南畑や森君が、度々と便りするのを見せてもらふらしい。

それ故、自分の御無沙汰が一層目につくのだ。

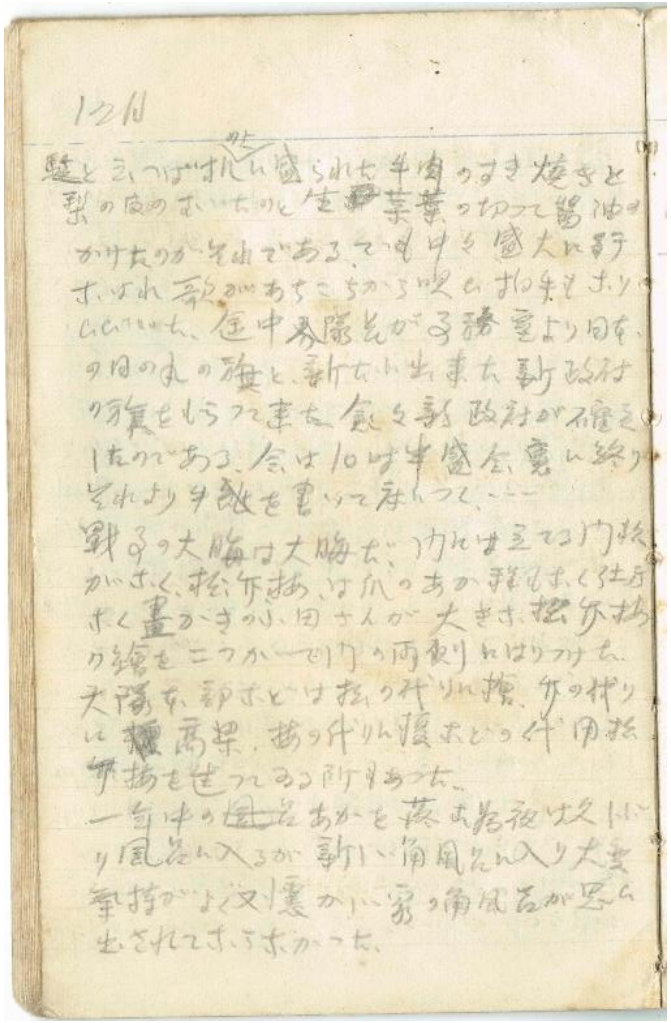
明日は元旦だが、休みでも何も遊ぶ事はなし、手紙を書く事に決心した。

今までも出せる折があれば出してゐる筈だが、あの攻撃、前進の 2 ヵ月半がこたへるらしい。

点呼後、早速と食膳を造って一杯やりかける。

最初、チョクに 2・3 杯、日本酒が当ったが、とてもうまかった。
後は支那酒でおぎなったが、馴れてくれば相当のめる様になった。

粗膳に向ひ、御馳



【1937 年】12 月

走と云へば、机の上に盛られた牛肉のすき焼きと、梨の皮のむいたのと、生菜葉（なっぱ）の切って醤油のかけたのが、それである。

でも、中々盛大に行なはれ、歌があちこちから唄ひ、拍手もなりひびいた。

途中、分隊長が事務室より日本の日の丸の旗と、新たに出来た新政府の旗をもらって来た。愈々（いよいよ）新政府が確立したのである。

（参考）日本側の和平条件を受け入れようとしない蒋介石（しょうかいせき）の中華民国政府に対抗して、南京占領翌日の 12 月 14 日、日本の肝いりで中華民国臨時政府が樹立され、北京を首都とし、五色旗を国旗とした。これは「将来、本政府が中国中央政府となることを含みとしたもので」、1938 年 1 月 16 日の近衛内閣による、「帝国政府ハ爾後（※蒋介石の）国民政府ヲ（※国交調整をなすべき）対手トセズ、帝国ト真ニ提携スルニ足ル新興支那政権ノ成立発展ヲ期待シ、是ト両国国交ヲ調整シテ、更正新支那ノ建設ニ協力セントス」との声明につながっていく。

［防衛省戦史叢書第 86 巻「支那事変陸軍作戦〈1〉」446～479 頁（画像 234～250 枚目］

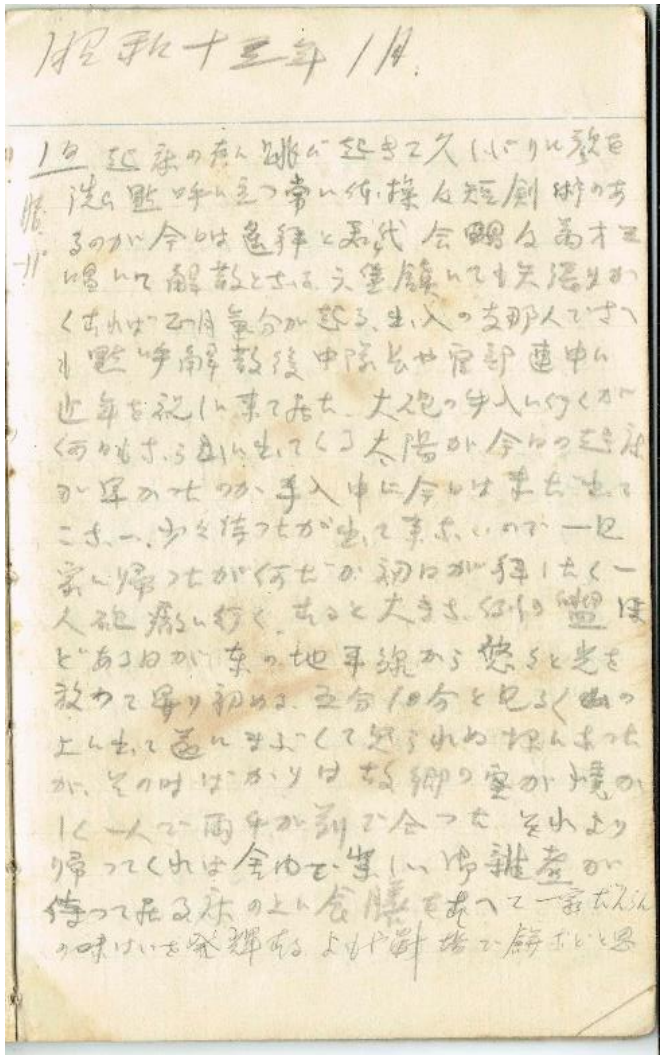
会は 10 時半、盛会裏に終り、それより手紙を書いて床につく…。

戰爭の大晦は大晦だ。

門には立てる門松がなく、松竹梅は爪のあか程もなく、仕方なく、畫（画）かきの小田さんが、大きな松竹梅の繪（絵）を 2 つかいて、門の両側にはりつけた。

大隊本部などは、松の代りに檜、竹の代りに高粱（こうりゃん）、梅の代りに榎などの代用松竹梅を造ってゐ（い）る所もあった。

1 年中のあかを落す為、夜は久しぶり風呂に入るが、新しい角風呂に入り、大変氣（気）持がよく、又、懐かしい家の角風呂が思ひ出されてならなかった。



昭和 13 年【1938 年】1 月

1 日、晴、－11°、起床の声に跳び起きて、久しぶりに顔を洗ひ、點呼に立つ。

常に体操及短剣術のあるのが、今日は遥拝と君ヶ代合唱、及萬才三唱にて解散となる。

六堡鎮にても矢張り、かくすれば正月氣分が起る。

出入の支那人でさへも、點呼解散後、中隊長や幹部連中に、新年を祝しに来て居た。

大砲の手入に行くが、何日もなら山に出てくる太陽が、今日の起床が早かったのか、手入中に今日は未だ出てこない。

少々待ったが、出て来ないので、一旦家に帰ったが、何だか初日が拝したく、一人砲廠に行く。

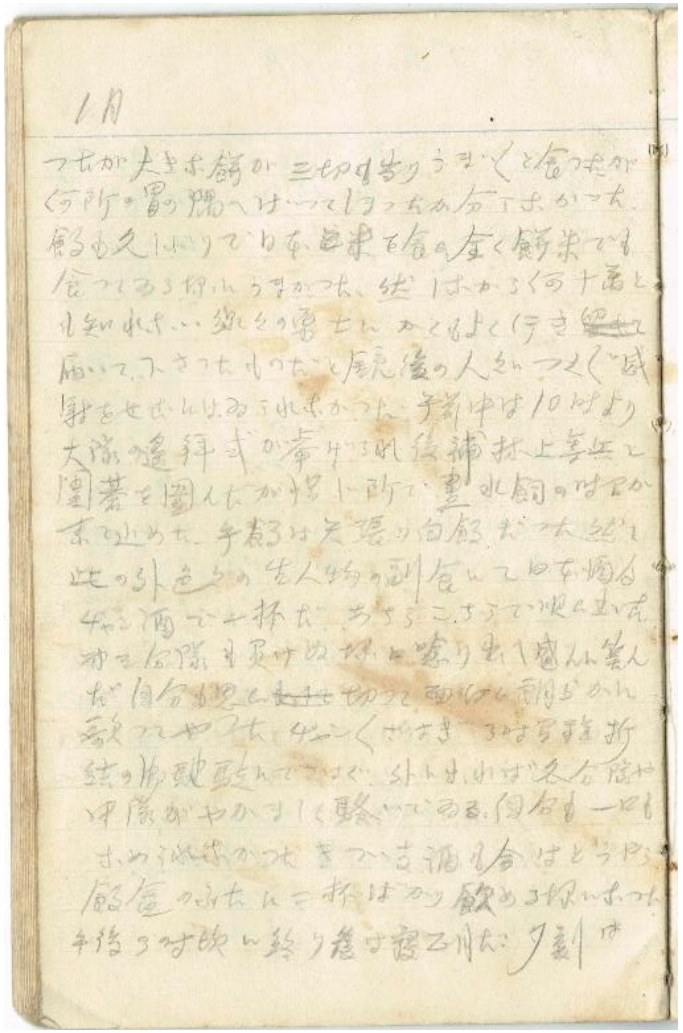
すると大きな、例の盥ほどある日が、東の地平線から悠々と光を放って昇り始める。

5 分 10 分と、見る見る山の上に出て、遂にまぶくて見られぬ様になったが、その時ばかりは故郷の空が懐かしく、一人で両手が前で合った。

それより帰ってくれば、舎内で楽しい御雑煮が待って居る。

床の上に食膳をすへて、一家だんらんの味はいを発揮する。

よもや戰場で餅などと思



ったが、大きな餅が 3 切も当り、うまいうまいと食ったが、何所の胃の隅へはいってしまったか分らなかった。

飯も久しぶりで、日本米を食ひ、全く餅米でも食ってゐ(い)る様にうまかった。

然しながら、何十萬(万)とも知れない戦線の勇士に、かくもよく行き届いて下さったものだと、銃後の人々につくづく感謝をせずにはゐ(い)られなかった。

午前中は 10 時より大隊の遥拝式が挙げられ、後、浦林上等兵と圍(囲)碁を圍んだが、惜しい所で晝水飼(昼みずかい)の時間が来て止めた。

午飯は、矢張り白飯だった。

然し、此の外、色々の精進物の副食にて、日本酒、及チャン酒で一杯だ。

あちらこちらで唄ひ出した。

第三分隊も負けぬ様に唸り出し、盛んに○んだ。

自分も思ひ切って、面白く朗らかに歌ってやった。

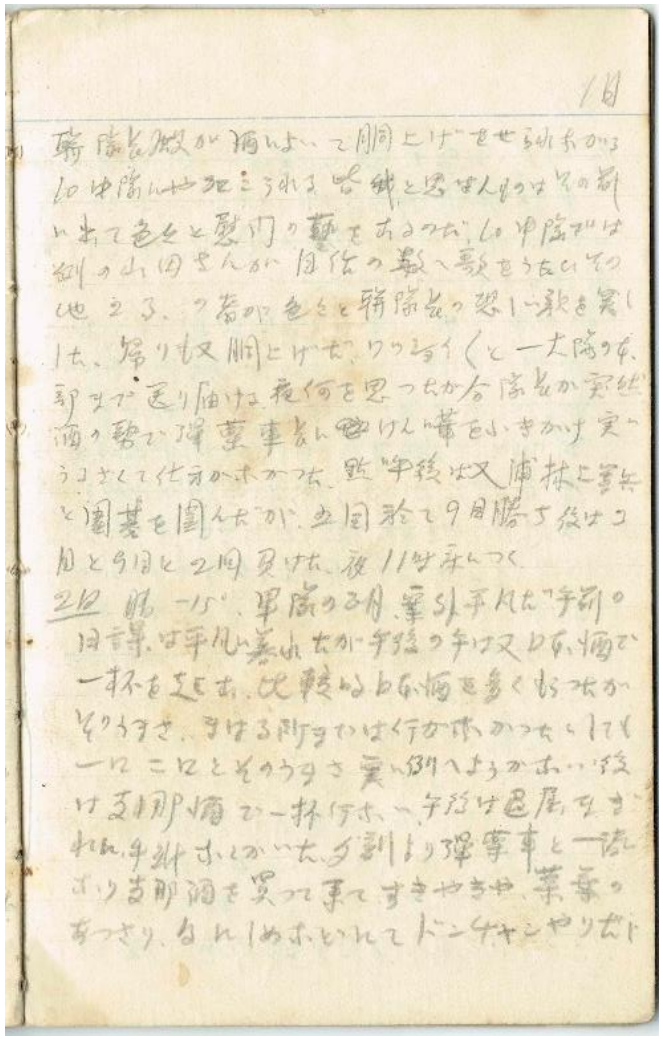
ヂャンヂャンさはぎ、3 時間程、折詰の御馳走にてさはぐ。

外に出れば、各分隊や中隊がやかましく騒いでゐ(い)る。

自分も一口もなめられなかった、きつい支(チャン)酒も、今はどうやら飯盒(はんごう)のふたに 2 杯ばかり飲める様になった。

午後 3 時頃に終り、後は寝正月だ。

夕刻は



【1938 年】1 月

聯隊長殿が、酒によいて胴上げをせられながら 10 中隊にやってこられる。

皆、我と思はんものは、その前に出て色々と慰問の藝をするのだ。

十中隊では例の山田さんが自作の数へ歌をうたひ、その他、2・3 の者が色々と聯隊長の恐しい顔を笑しした。

帰りも又胴上げだ。ワッショイワッショイと一大隊の本部まで送り届ける。

夜、何を思ったか分隊長が突然、酒の勢で彈薬車長にけん嘩をふきかけ、実にうるさくて仕方がなかった。

點呼後は又、裏林上等兵と圍碁を圍んだが、5 目置いて 9 目勝ち、後は 3 目と 9 目と 2 回負けた。

夜 11 時、床につく。

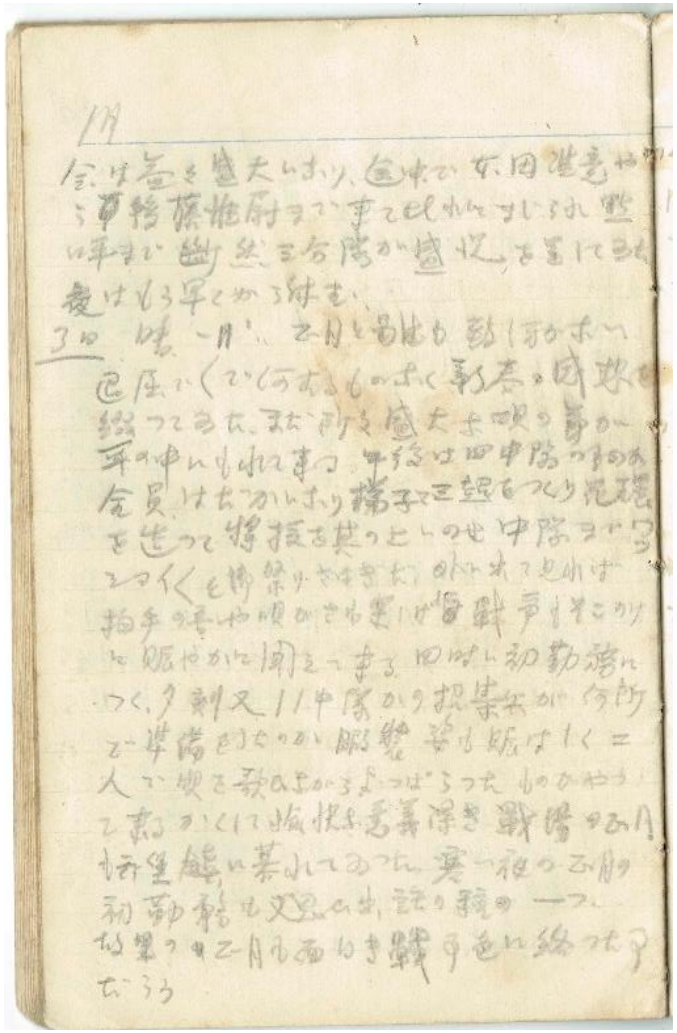
2 日、晴、－15°。

軍隊の正月、案外平凡だ。午前の日課は平凡に暮れたが、午後の午は又、日本酒で一杯を起す。

比較的日本酒を多くもらったが、そのうまさ、まはる所までは行かなかったにしても、一口、二口と、そのうまさ、実に例へようがない。

後は支那酒で一杯行ない、午後は退屈まぎれに手紙などかいた。

夕刻より【自分ら砲車の砲兵・馭者と】彈薬車【の砲兵・馭者ら】と一緒になり、支那酒を買って来て、すきやきや、菜葉のあっさり、及にしめなどにてドンチャンやりだし、



【1938 年】1 月

会は益々盛大になり、途中で本田准尉やら後藤准尉まで来て、此れにまじられ、點呼まで断然、三分隊が盛況を呈してゐた。

夜はもう早くから休む。

3 日、晴、－11°。

正月と雖も致し方がない。退屈で退屈で、何するものなく、新春の感想を綴ってゐた。

まだ、所々、盛大な唄の節が耳の中にもれて来る。

午後は四中隊のものが全員はだかになり、梯子で神輿をつくり、花環を造って將校を其の上にのせ、【司令部から？】中隊までワッショイワッショイと御祭りさはぎだ。

外に出て見れば、拍手の音や唄が、さも楽しげに、戰爭もそこのけに賑やかに聞えて来る。

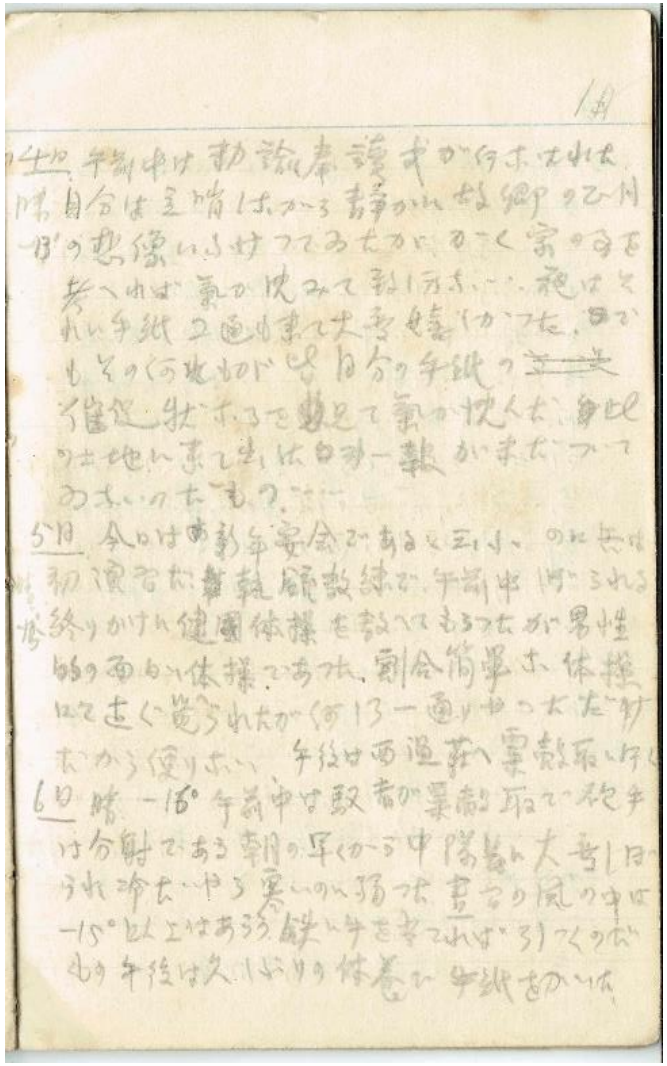
4 時に初勤務につく。

夕刻又、十一中隊かの召集兵が、何所で準備をしたのか、假装姿も賑はしく 2 人で唄を歌ひながら、よっぱらったものがやって来る。

かくして、愉快な意義深き戰場の正月も六堡鎮に暮れてゐった。

寒い夜の正月の初勤務も又、思ひ出話の種の一つ。

故郷の正月も、面白き戰爭色に終った事だらう。



【1938 年】1 月

4 日、晴、－13°。

午前中は、勅諭【陸海軍人に賜はりたる勅論［アジア歴史資料センターC14110452400 検閲典範令（防衛省）］】奉讀式が行なはれた。

自分は、立哨しながら、静かに故郷の正月一日の想像にふけってゐたが、かく家の事を考へれば、氣が沈みて致し方ない。

夜はそれに手紙 2 通も来て、大変嬉しかった。

でもその何れもが皆、自分の手紙の催促状なるを見て、氣が沈んだ。

此の土地に来て出した第一報が、未だついてゐないのだもの…。

5 日、晴、－15°、今日は新年宴会であると云ふのに、兵は初演習だ。

執銃教練で午前中しぼられる。

終りかけに建国体操【1937 年に作られた建国神話に因んだ体操［アジア歴史資料センターA06031020300「週報 第 41 号」画像 11 枚目］】を教へてもらったが、男性的の面白い体操であった。割合簡單な体操にて、直ぐ覚へられたが、何しろ一通りやっただけだから頼りない。

午後は西温荘へ粟穀取に行く。【12 月 14 日の日記に出てきた粟穀の徴発の事だと思われる。1 月 22 日の「粟穀取」の記述を見ると、穀物以外も徴発している。1 月 26 日には「石炭取り」も出てくる】

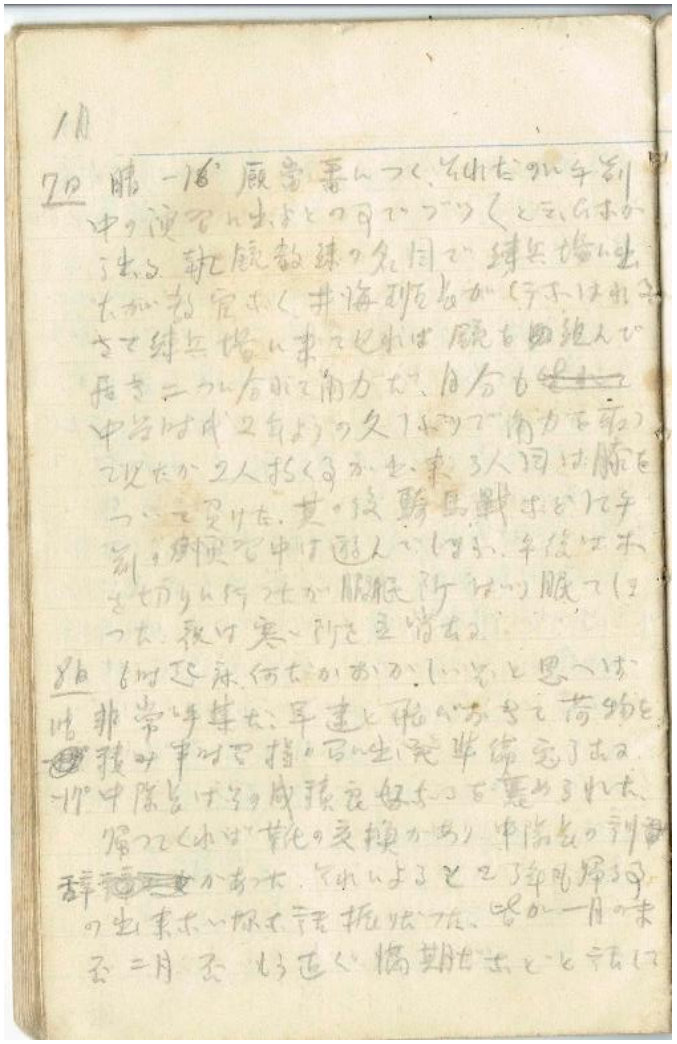
6 日、晴、－16°、午前中は馭者が粟穀取で、砲手は分射である。

朝の早くから中隊長に大変しぼられ、冷たいやら寒いのに弱った。

晝間の風の中は－15°以上はあらう。

鉄に手を当てればひっつくのだもの。

午後は久しぶりの休養で、手紙を書いた。



【1938 年】1 月

7 日、晴、－16°、厩当番につく。

それだのに、午前中の演習に出よとの事で、ブツブツと云ひながら出る。

執銃教練の名目で練兵場に出たが、教官なく、井海班長が行はれる。

さて、練兵場に来て見れば、銃を組んでおき【銃どうしを銃口を上にして組み合わせて三角錐状に立てておく（叉銃）】、二つに分かれて角力だ。

自分も中学時代、2 年より久しぶりで角力を取って見たが、2 人抜く事が出来、3 人目は膝をついて負けた。

其の後、騎馬戦などして午前の演習中は遊んでしまふ。

午後は木を切りに行ったが、假眠所【に】はいり寝てしまった。

夜は寒い所を立哨する。

8 日、晴、－17°、6 時起床。

何だかおかしいぞと思へば非常呼集だ。

早速と飛びおきて荷物を積み、半時間程の間に出発準備完了する。

中隊長は、その成績良好なるを褒められた。【つまり抜き打ちの出動訓練だった。「日中戦争の随想」第 18 項を参照】

帰ってくれば靴の交換があり、中隊長の訓示があった。

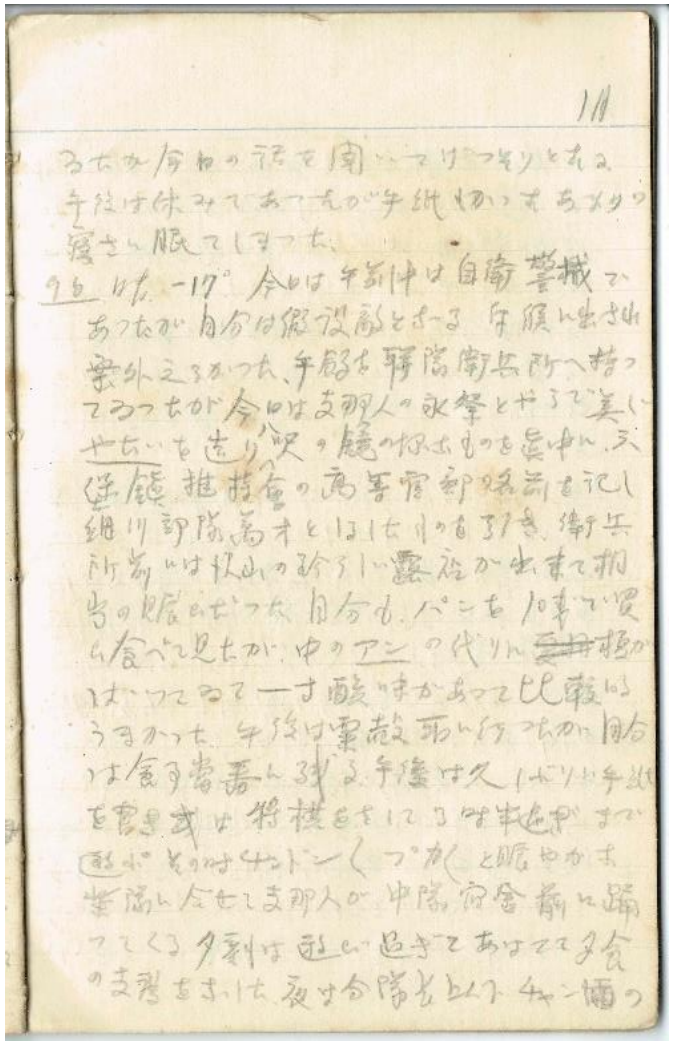
それによると 2、3 年も帰る事の出来ない様な話振りだった。

皆が 1 月の末、否、2 月、否、もう直ぐ満期だなどと話して

【以下は、原文の次頁冒頭部分の判読文】

ゐたが、今日の話を聞いてげっそりする。

午後は休みであったが、手紙もかゝず、あまりの眠さに寝てしまった。

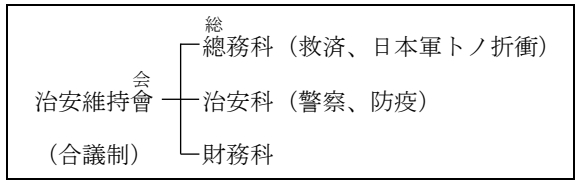


【原文の冒頭３行の判読文は前頁に記載】　【1938 年】１月

９日、晴、－17°、今日は午前中は自衛警戒であったが、自分は假設敵となる。斥候に出され、案外えらかった。

午飯を聯隊衛兵所へ持ってゐったが、今日は支那人の永祭とやらで、美しいやたいを造り、八咫の鏡【日本の三種の神器の一つ】の様なものを眞中に、六堡鎮維持會の高等幹部の名前を記し、細川部隊【＝第 26 連隊】萬才としるしたものを引き、衛兵所前には沢山の珍しい露店が出来て、相当の賑ひだった。

（参考）治安維持会は満洲国ですでに実績があったが、日中戦争がはじまってからは、占領地で次々に組織されていた。北支那方面軍内で 1937 年 10 月 16 日付で配布された「軍隊ノ實施スル治安維持指導等ノ參考」と題された文書によると、「治安維持會ハ縣政府（郷村公所）ノ潰滅シタル場合、残存セル一般住民中ヨリ、古老、實業家、公安局員（警察官）、其他ノ名望家ヲ以テ結成シ、暫定的ニ縣城（郷村）内ノ治安維持ニ當ラシムルモノニシテ、維持會員ハ奉仕的ニ無給ニテ業務ニ従事スルモノトス。…治安維持會ノ編成ハ…通常、縣城、及之ニ準ズル大ナル部落ニ於ケル一例ヲ示セバ左ノ如シ」

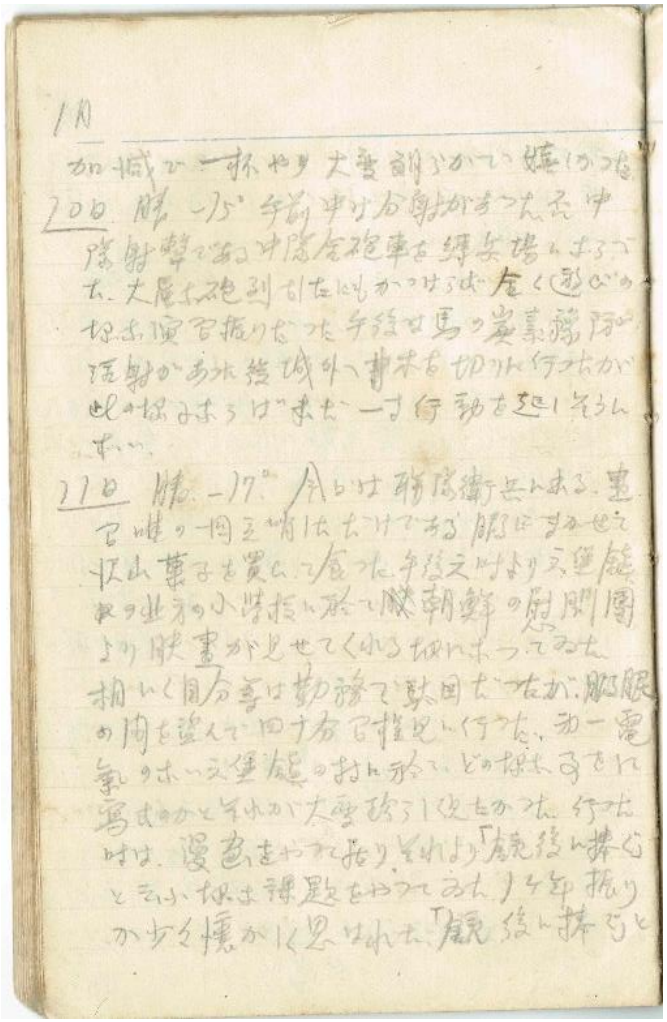


［アジア歴史資料センターC04120082200 支受大日記（防衛省）画像 8～10 枚目］

自分もパンを 10 銭で買ひ、食べて見たが、中のアンの代りに榎【果肉が食用になる】がはいってゐて、一寸酸味があって比較的うまかった。

午後は粟穀取に行ったが、自分は食事當番に残る。午後は久しぶりに手紙を書き、或は將棋をさして３時半過ぎまで遊ぶ。その時、チンドン、チンドン、プカプカと賑やかな樂隊に合せて、支那人が中隊宿舎前に踊ってくる。

夕刻は遊び過ぎて、あはてて夕食の支度をなした。夜は分隊長以下、チャン酒の



【1938 年】1 月

加減で一杯やり、大変朗らかで嬉しかった。

10 日、晴、－15°、午前中は分射があった、否、中隊射撃である。

中隊全砲車を練兵場にならべた、大層な放列をしたにもかゝはらず、全く遊びの様な演習振りだった。

午後は馬の炭疽【伝染病】豫防注射があった後、城外へ木を切りに行ったが、此の様子ならば未だ一寸行動を起しそうにない。

11 日、晴、－17°、今日は聯隊衛兵に出る。

晝間、唯の 1 回立哨しただけである。暇にまかせて、沢山菓子を買ひて食った。

午後 6 時より六堡鎮の北方の小學校に於て、朝鮮の慰問團より、映畫が見せてくれる様になってゐた。

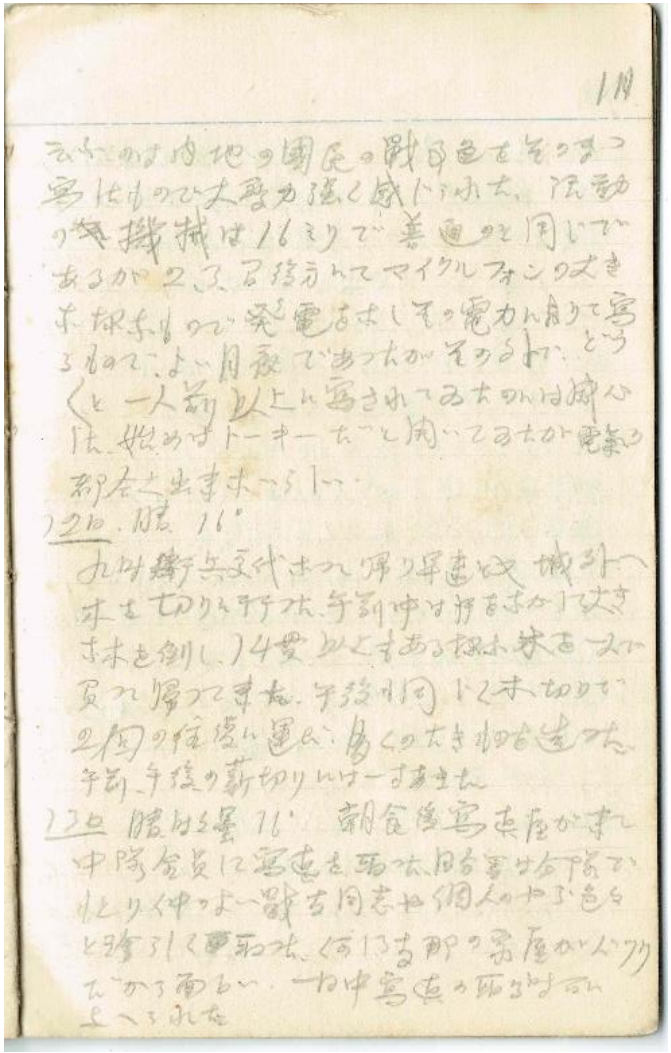
あいにく、自分等は勤務で駄目だったが、假眠の間を盗んで 40 分間程見に行った。

第一、電氣のない六堡鎮の村に於て、どの様な事をして寫すのかと、それが大変珍らしく、見たかった。

行った時は、漫畫をやって居り、それより「銃後に捧ぐ」と云う様な課題をやってゐた。

1 ヶ年振りか、少々懐かしく思はれた。

「銃後に捧ぐ」と



【1938 年】1 月

云ふのは、内地の國民の戰爭色をそのまゝ寫したもので、大変力強く感じられた。

活動の機械は 16 ミリで、普通のと同じであるが、2・3 間【≒4～5m】後方にてマイクロフォンの大きな様なもので発電をなし、その電力によりて寫るもので、よい月夜であったが、その外でどうどうと一人前以上に寫されてゐたのには感心した。

始めはトーキーだと聞いてゐたが、電氣の都合上出来ないらしい。

12 日、晴、【－】16°。

9 時、衛兵交代なって帰り、早速と又、城外へ木を切りに行った。

午前中は汗をながして大きな木を倒し、14 貫【≒53ｋｇ】以上もある様な木を一人で負って帰って来た。

午後も同じく木切りで、2 回の往復に運び、多くのたきものを造った。

午前、午後の薪切りには一寸あきた。

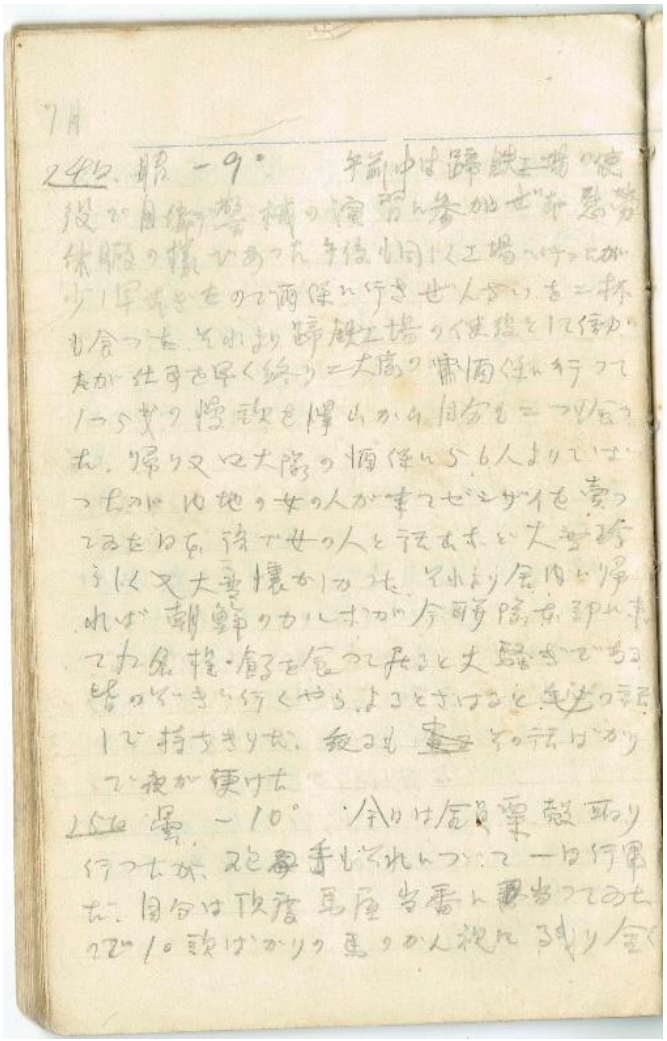
13 日、晴時々曇、【－】16°。

朝食後、寫真屋が来て、中隊全員して寫真を撮った。

自分等は分隊でもとり、仲のよい戰友同士や個人のやら、色々と○らしく撮った。

何しろ、支那の家屋がバックだから面白い。

1 日中、寫真の取る時間に与へられた。



【1938 年】1 月

14 日、晴、－9°。

午前中は蹄鉄工場の使役で、自衛警戒の演習に参加せず、慰勞休暇の様であった。

午後も同じく工場へ行ったが、少し早すぎたので、酒保に行き、ぜんざいを 2 杯も食った。

それより蹄鉄工場の使役として働いたが、仕事を早く終り、二大隊の酒保に行って 1 つ 5 銭の饅頭を澤山かひ、自分も 2 つも食った。

帰り、又四大隊の酒保に 5・6 人より、でばったが、内地の女の人が来て、ゼンザイを賣ってゐた。

日本語で女の人と話すなど、大変珍らしく、又、大変懐かしかった。

それより舎内に帰れば、朝鮮のカルボ【娼婦】が、今、聯隊本部に来て、9 名程、飯を食って居ると大騒ぎである。

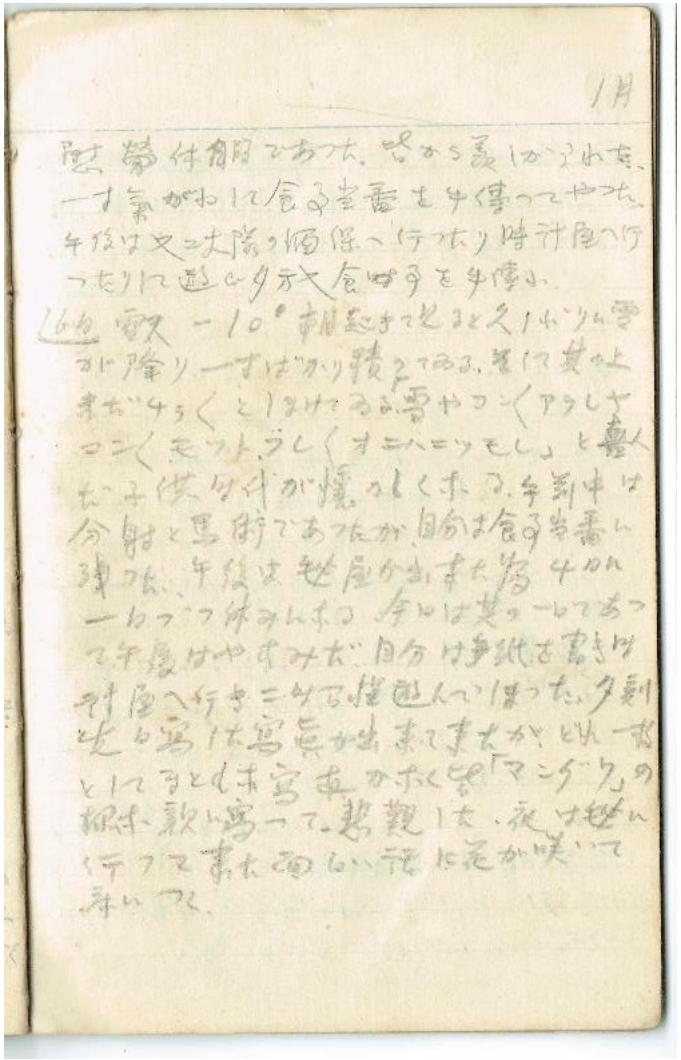
皆、のぞきに行くやら、よるとさはると秘【尻の異体字？女陰・娼婦の隠語（ピー）か？】の話しで持ちきりだ。

夜るもその話ばかりで夜が更けた。

15 日、曇、－10°。

今日は全員、粟穀取り【に】行ったが、砲手もそれについて 1 日行軍だ。

自分は丁度、厩当番に当たってゐたので、10 頭ばかりの馬のかん視に残り、全く



【1938 年】1 月

慰勞休暇であった。

皆から羨しがられた。

一寸氣がねして食事当番を手傳ってやった。

午後は又、二大隊の酒保へ行ったり、時計屋へ行ったりして遊び、夕方、又、食事を手傳ふ。

16 日、雪天、－10°。

朝、起きて見ると、久しぶりに雪が降り、1 寸【≒3ｃｍ】ばかり積ってゐる。

そして其の上、まだチラチラとしまけてゐる。

「雪やコンコン、アラレヤコンコン、モットフレ、モットフレ、オニハニツモレ」

と喜んだ子供時代が懐かしくなる。

午前中は分射と馬術であったが、自分は食事当番に残った。

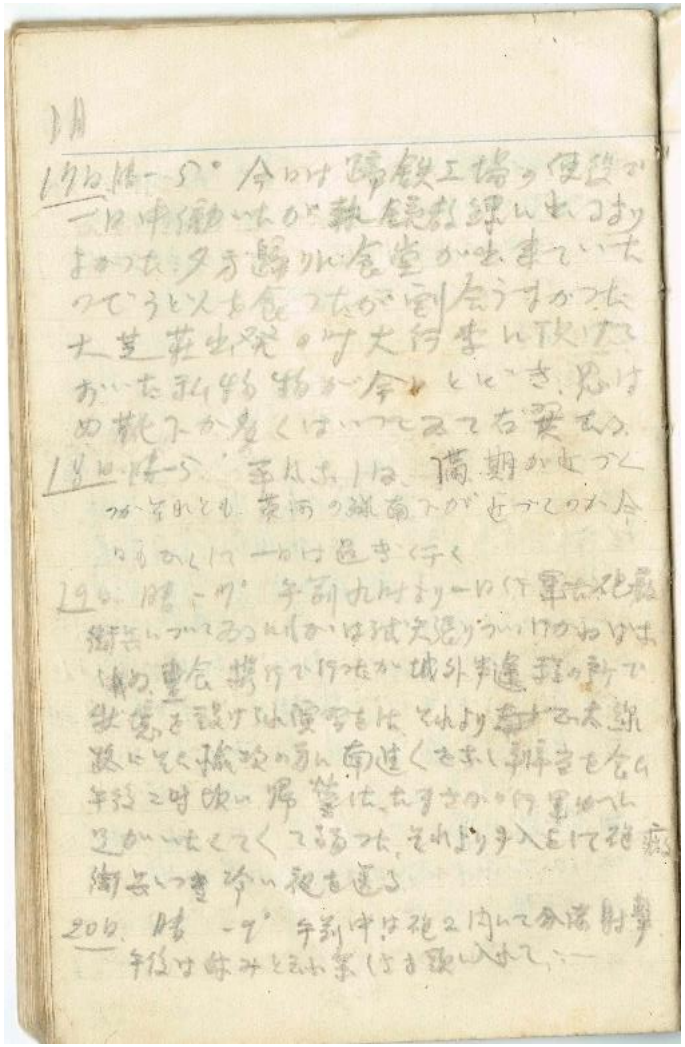
午後は秘屋が出来た為、4 日に 1 日づつ休みになる。

今日は其の 1 日であって、午後はやすみだ。

自分は手紙を書き、時計屋へ行き、2 時間程遊んでしまった。

夕刻、先日寫した寫眞が出来て来たが、どれ 1 枚としてまともな寫眞がなく、皆「マングウ」の様な顔に寫って悲観した。

夜は秘に行って来た面白い話に花が咲いて床につく。



【1938 年】1 月

17 日、晴、－5°。

今日は蹄鉄工場の使役で 1 日中働いたが、執銃教練に出るよりよかった。

夕方、帰(かへ)りに食堂が出来ていたので、うどんを食ったが、割合うまかった。

大芝荘出発の時【Aの日記の 1937 年 9 月 15 日に、大芝荘を通った時の回想の記述がある】、大行李(だいこうり)【部隊の輸送隊のうち、緊急性のない物資を集めて部隊の後から運ぶもの】に預けておいた私物物が今とどき、思はぬ靴下が多くはいっていゐ(い)て右翼する。【軍隊用語で右翼とは「ベター」の意味】

18 日、晴、－5°、平凡な 1 日。

満期が近づくのか、それとも黄河の線【までの】南下が近づくのか、今日もかくして 1 日は過ぎ行く。

19 日、晴、－7°。

午前 9 時より、1 日行軍だ。

砲廠衛兵についてゐ(い)るにもかゝはらず、矢張りついて行かねばならぬ。

晝(ひる)食携行で行ったが、城外半〇程の所で【仮想の戦闘】状境を設けられ、演習をした。

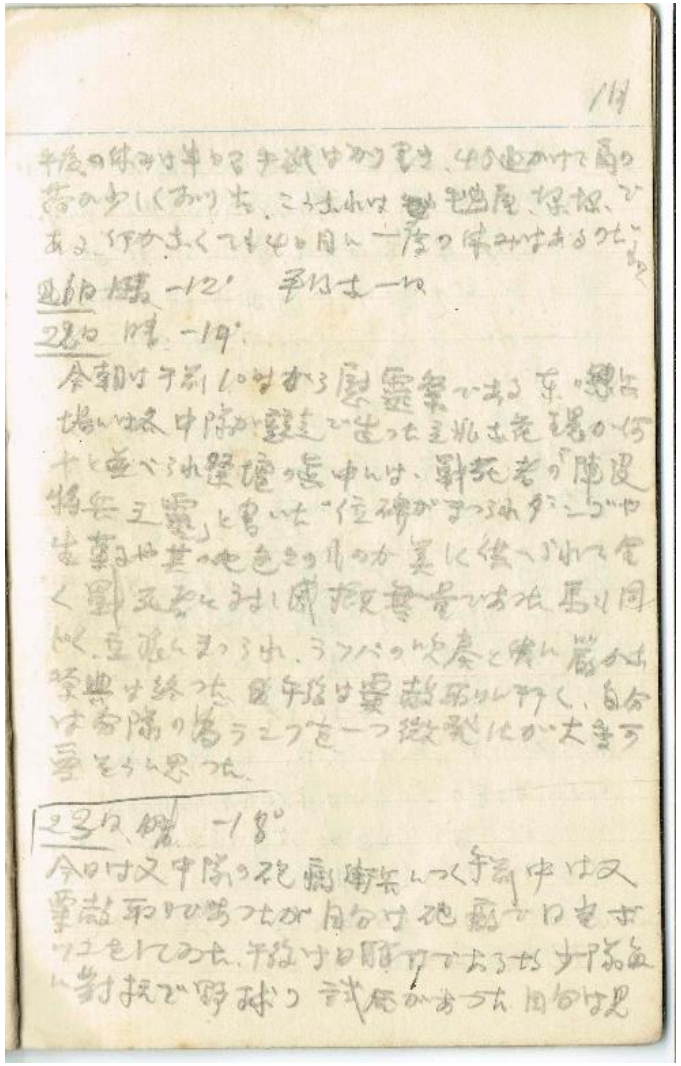
それより正太(せいたい)線路【石家荘(せきかそう)～太原(たいげん)間の鉄道】にそひ、楡次(ゆじ)の方に南進、南進をなし、弁当を食ひ、午後 2 時頃に帰營(営)した。

たまさかの行軍ゆへに、足がいたくていたくて弱った。

それより手入をして、砲廠衛兵につき、冷い夜を送る。

20 日、晴、－9°。

午前中は砲 2 門にて分隊射撃、午後は休みと云ふ楽しさを頭に入れて…。



【1938 年】1 月

午後の休みは半日間、手紙ばかり書き、4・5 通かけて、肩の荷が少しくおりた。

こうなれば秘屋様 様である。

【秘屋に】行かなくても 4 日に一度の休みはあるのだもの。

21 日、晴、－12°、平凡な 1 日。

22 日、晴、－11°。

今朝は午前 10 時から慰霊祭である。

東の練兵場には、各中隊が競争で造った立派な花環が何十と並べられ、祭壇の眞中には、戦死者の「陣歿將兵之霊」と書いた位牌がまつられ、ダンゴや生菓子や其の他、色々のものが美しく供へられて、全く戦死者に対し、感慨無量であった。

【戦死した】馬も同じく、立派にまつられ、ラッパの吹奏と共に厳かな祭典は終った。

午後は粟 穀取りに行く。

自分は分隊の為、ランプを 1 つ徴発したが、大変可哀そうに思った。

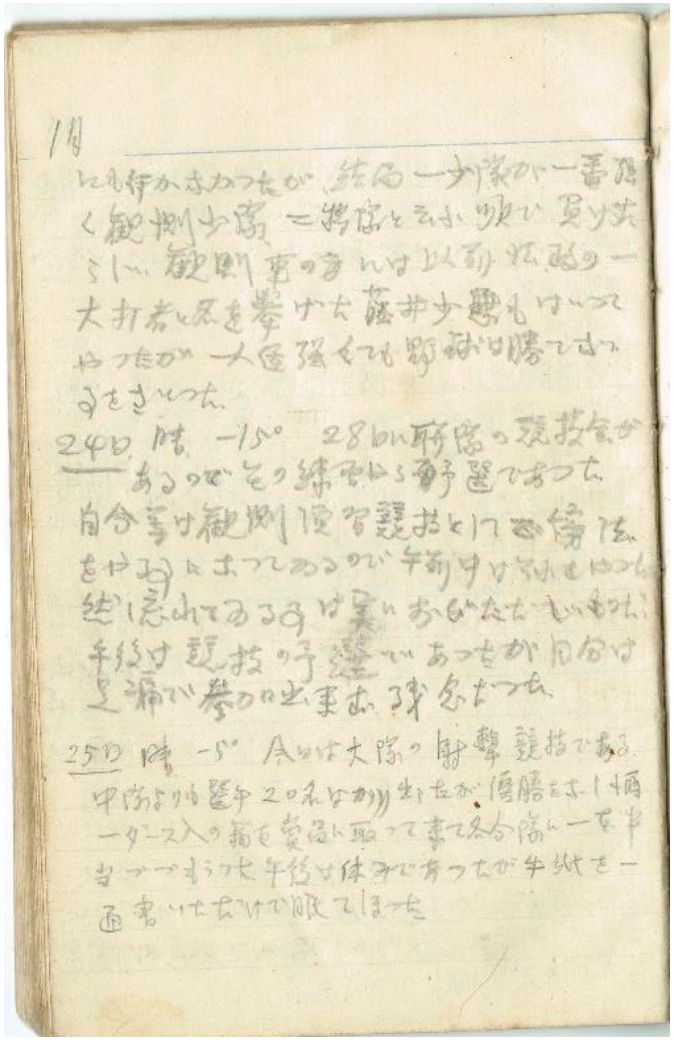
23 日、晴、－18°。

今日は又、中隊の砲廠衛兵につく。

午前中は又、粟穀取りであったが、自分は砲廠で日向ボッコをしてゐた。

午後は日曜日である故、小隊毎に對抗で野球の試合があった。

自分は見



【1938 年】1 月

にも行かなかったが、結局一小隊が一番強く、観測小隊、二小?隊といふ順で、負けたらしい。

観測車の方には、以前、法政の一大打者と名を挙げた藤井少尉もはいってやったが、1 人位強くても野球は勝てない事をさとった。

24 日、晴、－15°

28 日に聯隊の競技会があるので、その練習やら予選であった。

自分等は観測演習競技として、正〇法をやる事になってゐるので、午前中はそれをやった。

然し忘れてゐる事は、実におびただしいものだ。

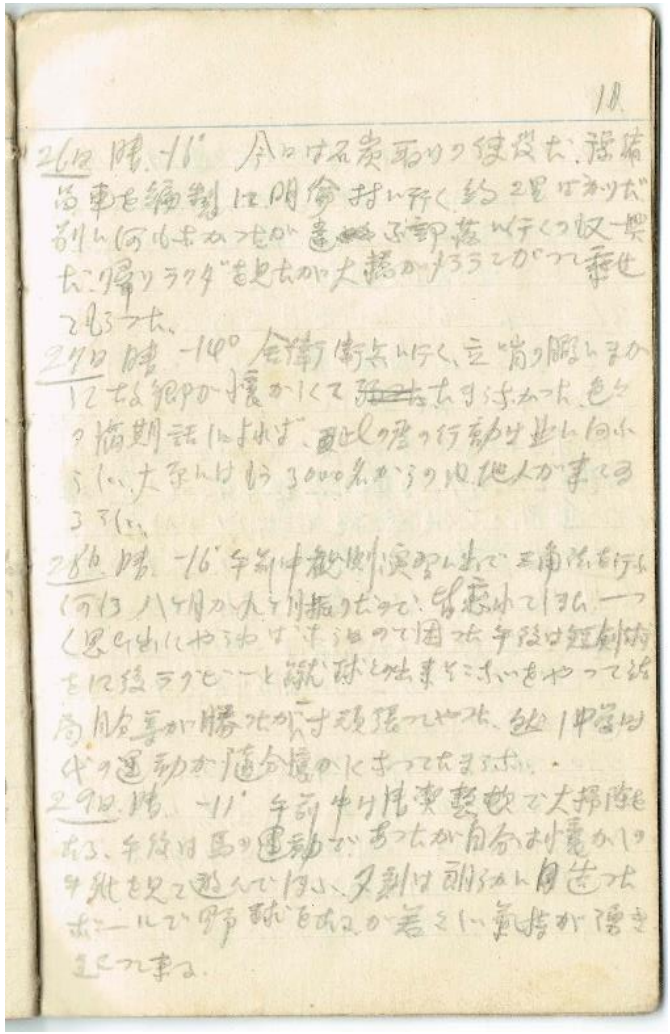
午後は競技の予選であったが、自分は足痛で参加出来ず残念だった。

25 日、晴、－5°。

今日は大隊の射撃競技である。

中隊よりも選手 20 名ばかり出たが、優勝をなし、酒 1 ダース入の箱を賞品に取って来て、各分隊に 1 本半当づつもらった。

午後は休みであったが、手紙を 1 通書いただけで眠ってしまった。



【1938 年】1 月

26 日、晴、－16°、今日は石炭取りの使役だ。

予豫備品車を編成して明倫村に行く。

約 2 里【≒8ｋｍ】ばかりだ。

別に何もなかったが、違ふ部落に行くのも又、一興だ。

帰り、ラクダを見たが、大橋がメララン【珍し？】がって乗せてもらった。

27 日、晴、－14°、舎衛衛兵に行く。

立哨の暇にまかして、故郷が懐かしくてたまらなかった。

色々の満期話しによれば、此の度の行動は北に向ふらしい。【占領地から引上げを期待したのか？実際には逆に南へ進むことになる】

太原（たいげん）にはもう 3000 名からの内地人がきてゐ（い）るらしい。

28 日、晴、－16°、午前中、観測演習に出で、三角法を行ふ。

何しろ 8 ヶ月か 9 ヵ月ぶりだので、皆忘れてしまひ、一つ一つ思ひ出してやらねばならぬので困った。

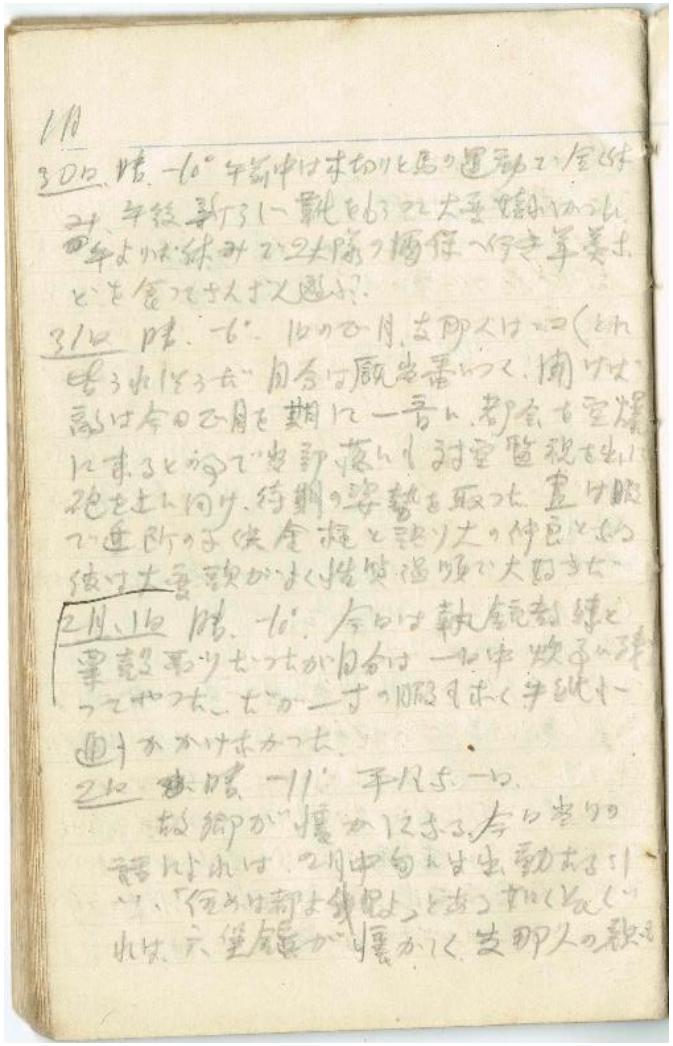
午後は短剣術をして、後、ラグビーと蹴球（しゅうきゅう）【フットボール】との出来そこないをやって、結局自分等が勝ったが、一寸（ちょっと）頑張ってやった。

然し中学時代の運動が、随分懐かしくなってたまらない。

29 日、晴、－11°、午前中は清潔整頓で大掃除をする。

午後は馬の運動であったが、自分は懐かしの手紙を見て遊んでしまふ。

夕刻は朗らかに、造ったボールで野球をするが、若々しい氣（気）持が湧き起って来る。



【1938 年】1 月

30 日、晴、－10°。

午前中は木切りと馬の運動で全く休み、午後、新らしい靴をもらって大変嬉れしかった。午(ひる)よりは休みで二大隊の酒保へ行き、羊羹などを食ってさんざん遊ぶ。

31 日、晴、－6°、旧の正月、支那人はニコニコとして皆うれしそうだ。

自分は厩当番につく。

聞けば敵は今日、正月を期して一斉に都会を空爆に来るとの事で、当部落にも対空監視を出して砲を上に向け、待期の姿勢を取った。

晝(ひる)は暇で、近所の子供、全柱と語り、大の仲良しなる。

彼は大変頭がよく、性質温順で大好きだ。

2 月 1 日、晴、－10°。

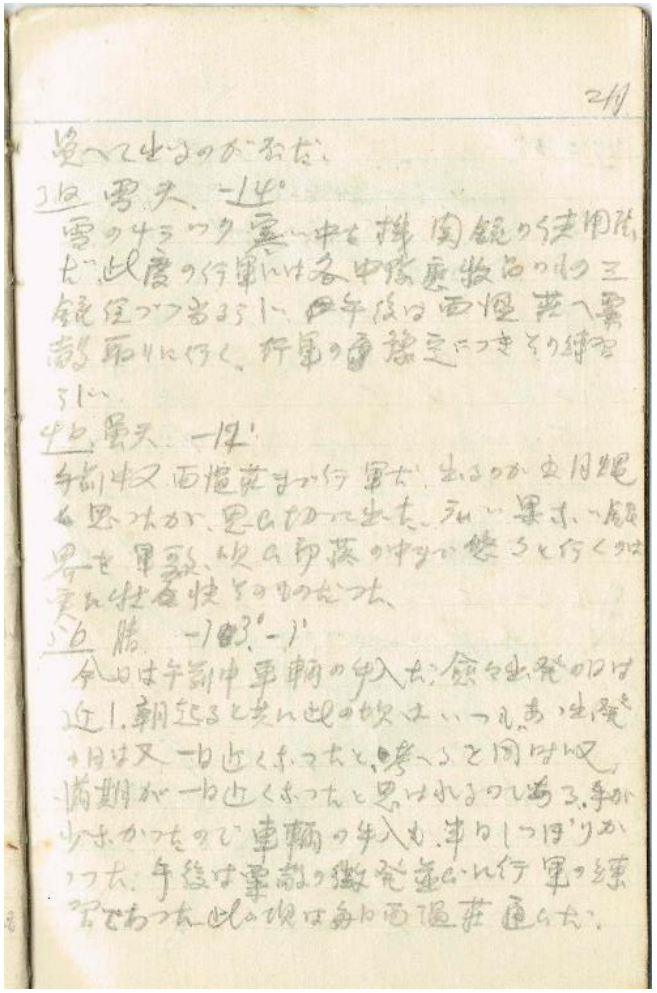
今日は執銃教練と粟穀(ぞっこく)取りだったが、自分は 1 日中、炊事に残ってやった。

だが一寸の暇もなく、手紙も 1 通しかかけなかった。

2 日、晴、－11°、平凡な 1 日、故郷が懐かしくなる。

今日辺りの話によれば、2 月中旬には出動するらしい。

「住めば都よ、我里よ」【播州木挽唄】とある如く、長くいれば六堡鎮が懐かしく、支那人の顔も



覺(覺)へて、出るのが否(イヤ)だ。

3 日、雪天、－14°、雪のチラツク寒い中を、機関銃の使用法だ。

此度の行軍には、各中隊【に、中国軍の】應(応)収品のもの 3 銃位づつ当るらしい。

午後は西温荘へ粟穀(ぞっこく)取りに行く。行軍の豫(予)定につき、その練習らしい。

4 日、曇天、－12°、午前中、又西温荘まで行軍だ。

出るのが五月蠅(うるさ)く思ったが、思ひ切って出た。

広い果ない○界を、軍歌【を】唄ひ、部落の中まで悠々と行くのは、実に壮快そのものだった。

5 日、晴、－13°　－1°

今日は午前中、車輌の手入れだ。

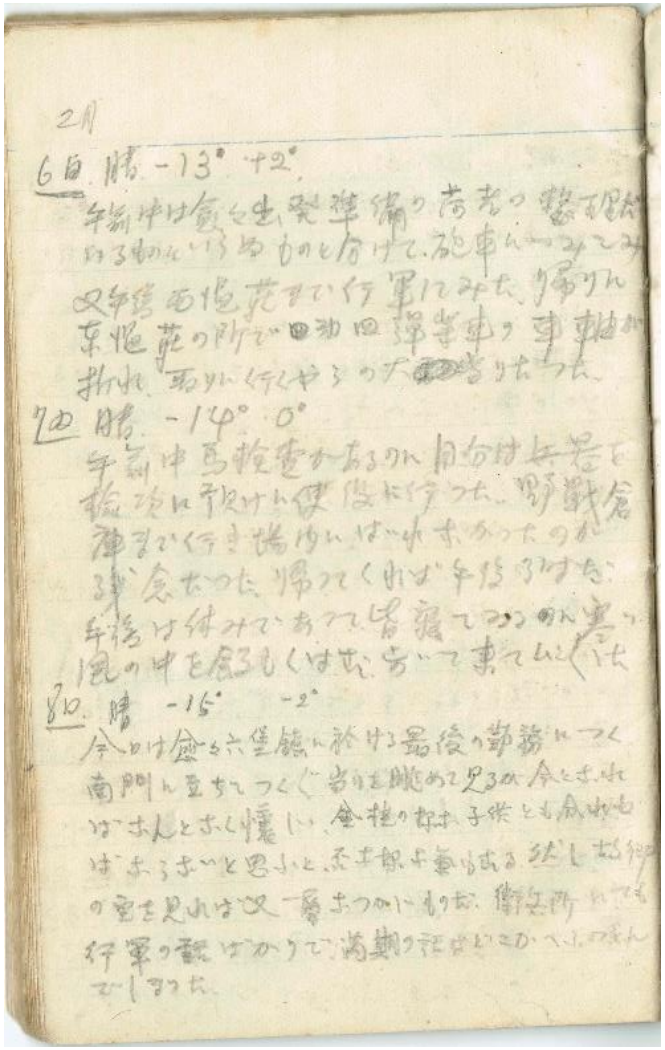
愈々(いよいよ)出発の日は近し。

朝起ると共に、此の頃はいつも、あゝ出発の日は又 1 日近くなったと考へると同時に、又、満期が 1 日近くなったと思はれるのである。

手が少なかったので、車輌の手入も、半日しっぽりかゝった。

午後は粟穀の徴発、並びに行軍の練習であった。

此の頃は、毎日西温荘通ひだ。



【1938 年】２月

6 日、晴、－13°　＋2°

午前中は、愈々（いよいよ）出発準備の荷物の整理だ。

いるものと、いらぬものと分けて、砲車につみこみ、又、午後、西温荘まで行軍してみた。

帰りに東温荘の所で第四弾薬車の車軸が折れ、取りに行くやらの大当りだった。

7 日、晴、－14°、0°。

午前中、馬検査があるのに、自分は兵器を楡次（ゆじ）に預けに使役に行った。

野戰倉庫まで行き、場内に、はいれなかったのが残念だった。

帰ってくれば、午後 3 時だ。

午後は休みであって、皆寝てゐ（い）るのに、【自分は】寒い風の中を飯もくはず歩いて来て、ムシ【ャ】ムシ【ャ】した。

8 日、晴、－15°、－2°。

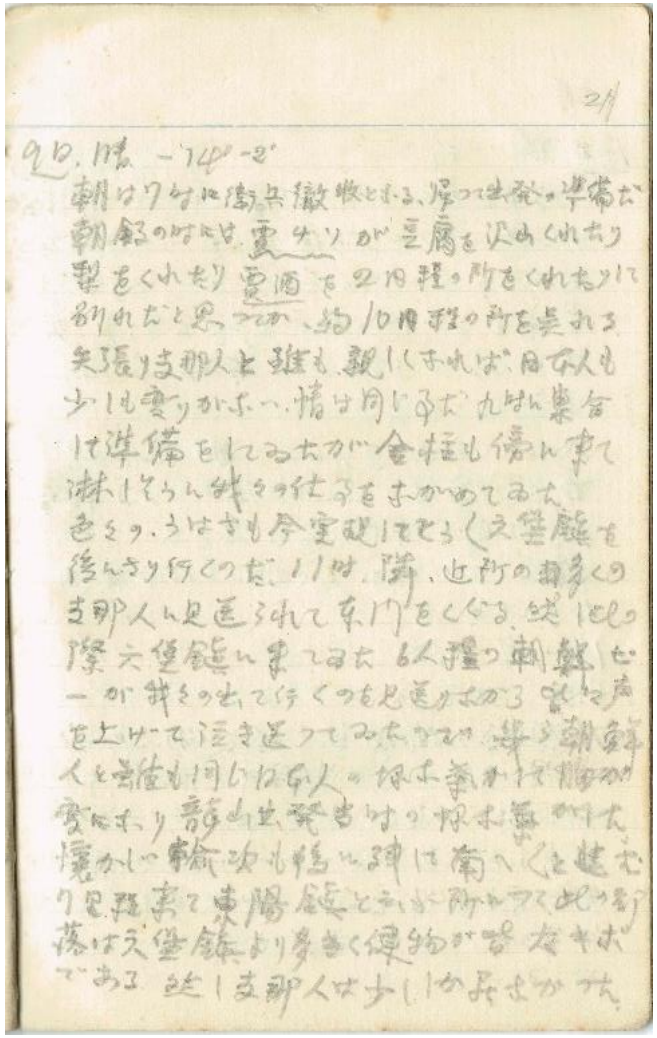
今日は愈々、六堡鎮に於ける最後の勤務につく。

南門に立ちて、つくづく辺りを眺めて見るが、今となれば、なんとなく懐しい。

全柱の様な子供とも別れねばならないと思ふと、否（イヤ）な様な氣（気）もする。

然し、故郷の空を見れば、又一層なつかしいものだ。

衛兵所にても行軍の話ばかりで、満期の話はどこかへふっとんでしまった。



【1938 年】2 月

9 日、晴、－14°、－2°

朝は 7 時に衛兵撤収となる。帰って出発の準備だ。

朝飯の時には、賈チンが豆腐を沢山くれたり、梨をくれたり、賈酒を 2 円程の所をくれたりして、別れだと思ってか、約 10 円ほどの所を呉れる。

矢張り、支那人と雖（いえど）も親しくなれば、日本人も少しも変りがない。情は同じ事だ。

9 時に集合して準備をしてゐたが、全柱も傍に来て、淋しそうに我々の仕事をながめてゐた。色々のうはさも今実現して、とうとう六堡鎮を後にさり行くのだ。

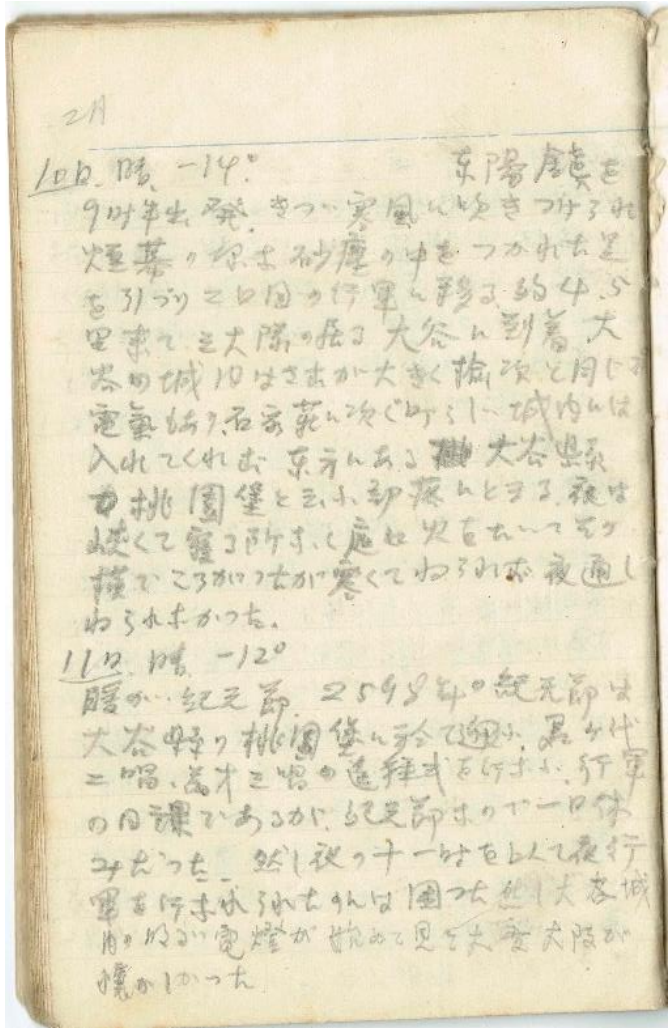
11 時、隣、近所の多くの支那人に見送られて東門をくぐる。然し、此の際、六堡鎮に来てゐた 6 人程の朝鮮ピー【朝鮮人慰安婦】が、我々の出て行くのを見送りながら、皆々声を上げて泣き送ってゐたので、幾ら朝鮮人と雖も同じ日本人の様な氣（気）がして、胸が変になり、【営舎のあった朝鮮の】龍山（りゅうざん）出発当時の様な氣（気）がした。

懐かしい楡次（ゆじ）も後に残して南へ南へと進む。

7 里【≒28ｋｍ】程来て、東陽鎮と云ふ所につく。此の部落は六堡鎮より大きく、建物が皆、大キボである。然し、支那人は少ししか居なかった。

（参考）1937 年 12 月 20 日の「山西省給水調査」報告書によると、「東陽鎮…街ハ正太鉄（鉄）路東陽鎮驛（駅）ノ西方 500米（m）ニ在り、同線ニ沿テ走ル自動車道ニ近ク交通便ナリ。戸数（数）300、人口 1,000、農ヲ主トシ、一部商業ニ従事ス」

［アジア歴史資料センターC04120728800 陸支受大日記（密）（防衛省）の画像 21～22 枚目］



（参考：兵歴簿の関係個所抜粋）

【履歴】　昭和 13 年 2 月 11 日ヨリ 2 月 25 日迄　霊石附近の戦斗ニ参加

【1938 年】2 月

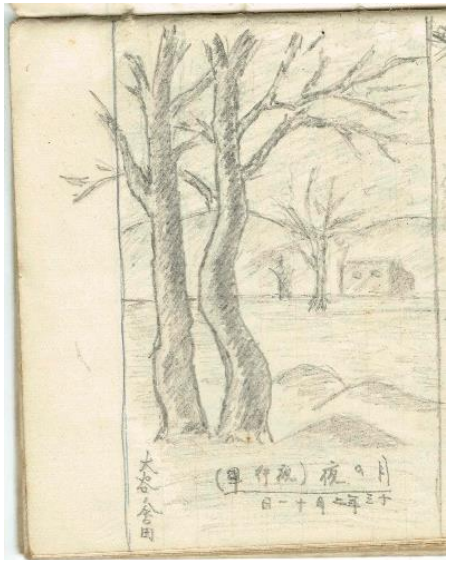
10 日、晴、－14°。東陽鎮を 9 時半出発、きつい寒風に吹きつけられ、煙幕の様な砂塵の中を、つかれた足を引づり、2 日目の行軍に移る。

約 4・5 里【≒16～20ｋｍ】来て、三大隊の居る大谷【おそらく「太谷（たいこく）」が正しいので、以下「太谷」に置き換える。次頁の地図を参照。1937 年 12 月 23 日の「山西省給水調査」報告書によると、「太谷…正太線太谷支線ノ終點（点）ニシテ、又同蒲線ノ驛（駅）アリ、榆次（ゆじ）ノ南方 36 粁（ｋｍ）ニ在リ、自動車路ハ榆次・太原（たいげん）ニ通ジ地方物資ノ集散地ナリ。城内戸數（数）2,500、人口 16,000、城外戸數（数）600、人口 3,000、商人多ク、農之ニ次ク。米國（国）人経營（営）ノ病院アリ、農科大學（学）ノ所在地トス」とのこと［アジア歴史資料センターC04120728800 陸支受大日記（防衛省）の画像 47 枚目］】に到着。

太谷の城内はさすが大きく、榆次と同じ程、電氣（気）もあり、石家莊（せきかそう）に次ぐ町らしい。城内には入れてくれず、東方にある太谷縣桃園堡と云ふ小部落にとまる。

夜は狭くて寝る所なく、庭に火をたいて、その横でころがったが、寒くてねられず、夜通しねられなかった。

【遺品の手帳のスケッチ】



11 日、晴、－12°、暖かい紀元節【初代天皇（神武天皇）の即位日とされていた】。

【皇紀】2598 年の紀元節は太谷縣の桃園堡に於て迎ふ。君ヶ代 2 唱、萬（万）才 3 唱の遥拝式を行なふ。行軍の日課であるが、紀元節なので 1 日休みだった。然し夜の 11 時を以って、夜行軍を行なれられたのには困った。然し太谷城内の明るい電燈が始めて見て、大変大阪が懐かしかった。

（参考）これまで日本軍は、山西省方面においては、太原（たいげん）や楡次（ゆじ）など北部のみを占領していたが、南京攻略後の 1937 年 12 月 18 日に右の大陸命が出され、黄河左岸地域の一部たる山西省南部も進攻対象となった。その翌日、第 1 軍参謀らが北支那方面軍司令部にて、この命令を伝達を受けた際、北支那方面軍の岡部直三郎参謀長は次のように述べた。

「(1) 南京陥落セシモ蒋介石（しょうかいせき）ハ屈服シ相（そう）ニ見エズ。

(2) 之ガ戦意ヲ徹底的ニ挫折セシムル為、北支ノ一角、黄河以北ニ敵ノ勢力地帯ヲ存スベカラズ。

(3) 北方政権（※12 月 14 日発足の中華民国臨時政府）樹立サレシ今日、黄河以北ニ其勢力ノ及バザル處（処）ヲ存スルコトモ亦、不合理ナリ。」

その上で、山西省南部への前進再開の時機や方法について、第 1 軍において研究するよう要望があった。

［アジア歴史資料センターC11110963900 第 1 軍機密作戦日誌（防衛省）画像 1～6 枚目］

政府は 12 月 24 日に閣議決定した「事變（変）対處（処）要綱（甲）」の中で「北支新政権ニ包含セラルベキ地域ハ軍事行動進展ノ程度ニ依ルベキモ、略（ほぼ）、河北、山東、山西ノ 3 省及察哈爾（チャハル）省の一部トス」とした。［アジア歴史資料センターC12120097500 支那事変関係重要記録（防衛省）画像 11～12 枚目］

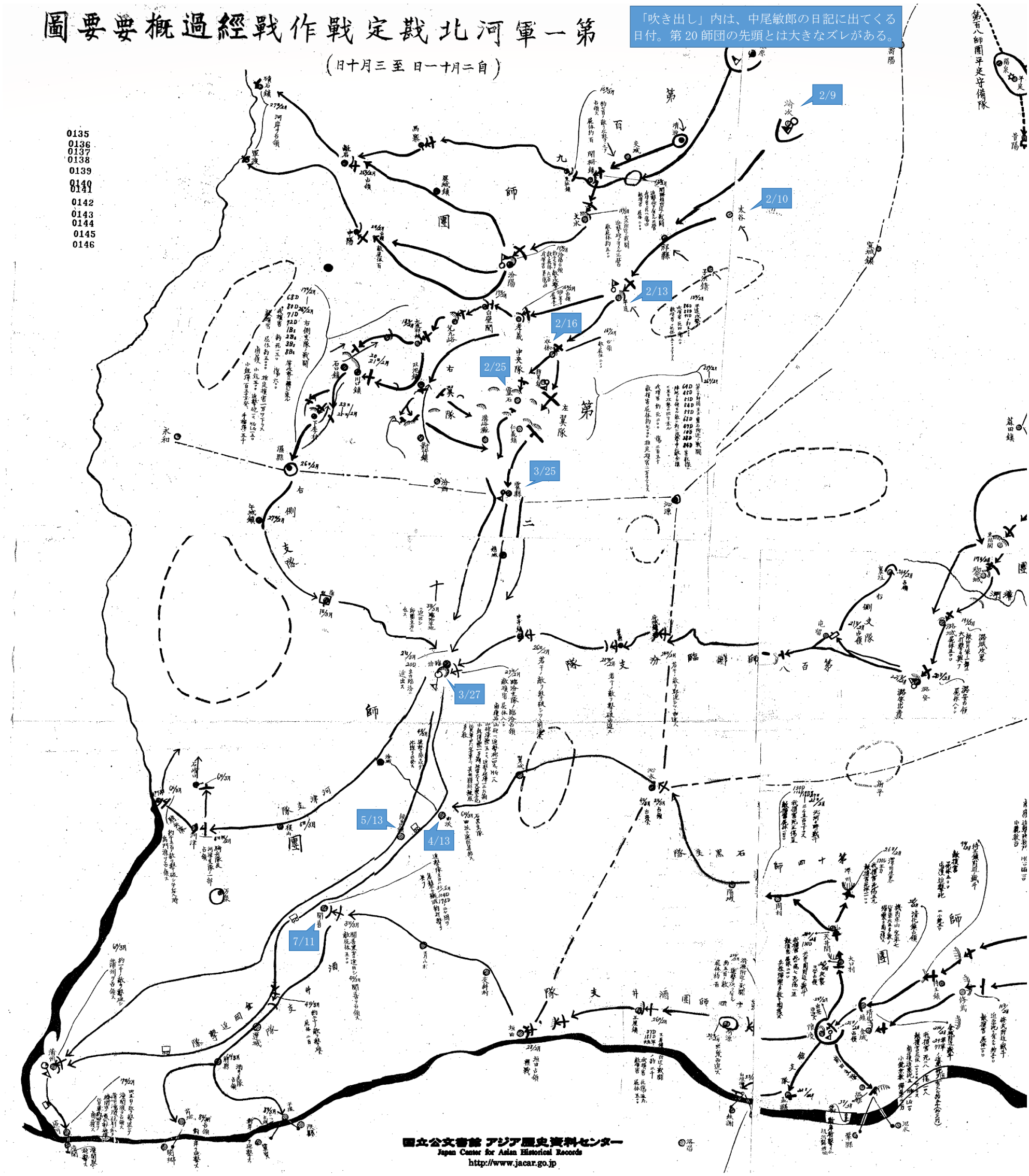
こうした経過の後、1938 年 2 月 11 日（紀元節）～3 月 10 日（陸軍記念日）の間、第 20 師団は第 1 軍の他の師団と共同して山西省南部、黄河左岸まで進攻作戦を行った。

大陸命 第 34 号

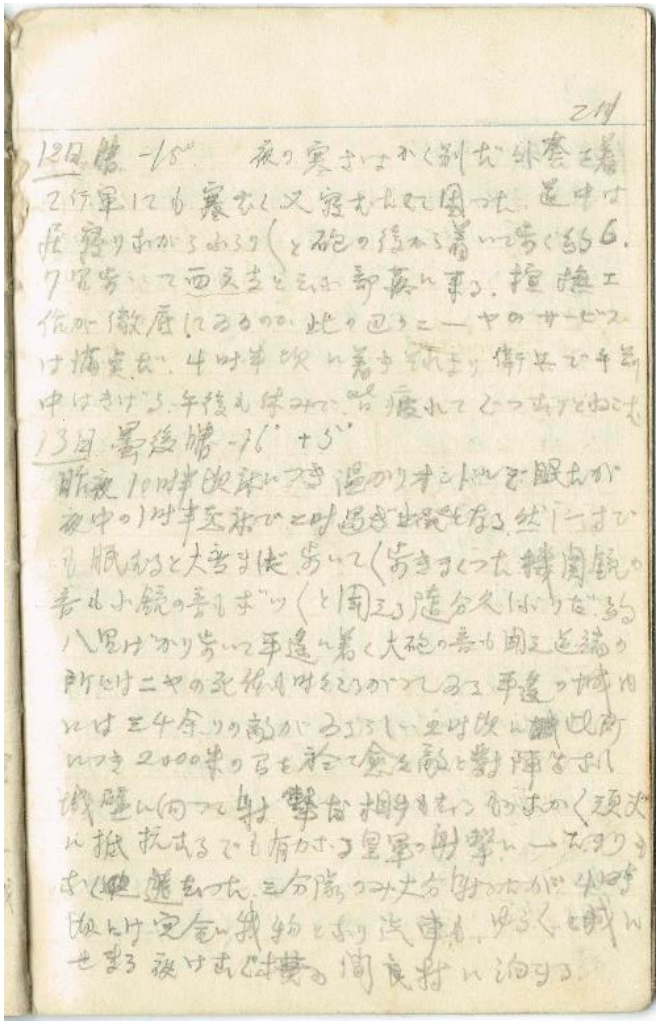
1．大本営ハ情勢ノ推移ニ伴ヒ、膠済（こうさい）沿線及済南（さいなん）ヨリ上流黄河左岸ニ亙（わた）ル地域ヲ截定（かんてい）（※戦って平定すること）スルノ企図ヲ有ス。

2．北支那方面軍司令官ハ前項ノ線ニ向ヒ、逐次作戦ヲ推進スルト共ニ、占領地域ノ確保安定ニ任ズベシ。

［アジア歴史資料センターC14060903800 大陸命綴（支那事変）巻 02（防衛省）の画像 17 枚目］



［アジア歴史資料センターC11110983200 第 1 軍作戦経過の概要（防衛省）画像 3～14 枚目より編集］



【1938 年】2 月

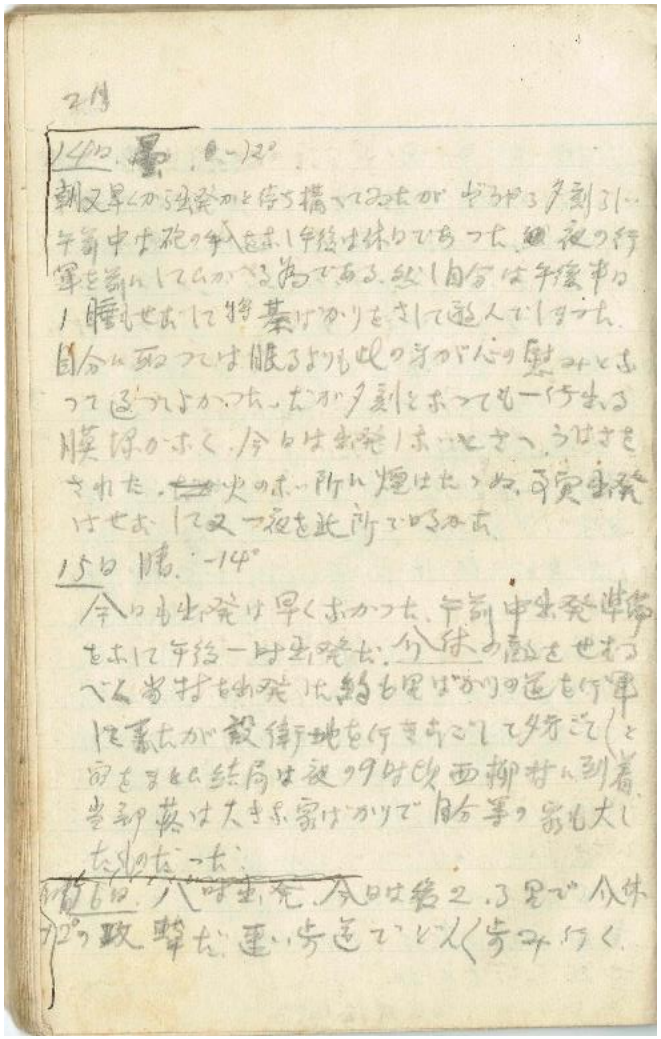
12 日、晴、－15°、夜の寒さはかく別だ。外套を着て行軍しても、寒むく、又、眠むたくて困った。道中は居眠りながら、ふらりふらりと砲の後から付いて歩く。約 6・7 里【≒24～28ｋｍ】歩いて西文支と云ふ部落に来る。宣撫工作が徹底してゐるのか、此の辺りニーヤのサービスは満点だ。4 時半頃に着き、それより衛兵で午前中はきばる。午後も休みで、皆疲れてぐっすりとねこむ。

13 日、曇後晴、－16°、＋5°。昨夜 10 時半頃床につき、温かいオンドルで寝たが、夜中の 1 時半起床で、2 時過ぎ出発となる。然し、一寸でも眠むると大変ましだ。歩いて歩いて、歩きまくった。機関銃の音も小銃の音もボツボツと聞える。随分久しぶりだ。約 8 里【≒31ｋｍ】ばかり歩いて平遙に着く。【1938 年 2 月 14 日の「山西省給水調査」報告書によると、「平遙…戸数4,800、人口 20,000 人、住民ノ大部分ハ商業ニ従事シ、穀類、煙草、綿花等ノ集散地ナリ」[アジア歴史資料センターC04120728900 陸支受大日記(防衛省)の画像 27 枚目]】大砲の音も聞え、道端の所にはニ【ー】ヤの死体も時々ころがってゐる。平遙の城内には 3 千余りの敵がゐるらしい。2 時頃に此所につき、2000米の間を於て、愈々敵と対陣をなし、城壁に向って射撃だ。

相手もさるもの、なかなか頑丈に抵抗する。でも、有力なる皇軍の射撃に一たまりもなく逃去った。【自分達】三分隊のみ大分射ったが、4 時頃には完全に我物となり、汽車もゆうゆうと城にせまる。夜はすぐ横の間良村に泊まる。

（参考）第 1 軍機密作戦日誌に記されている第 20 師団の報告では、「先遣隊及騎兵部隊ハ 13 日午前 8 時ヨリ…平遙城附近ノ敵ヲ包囲攻撃シ、午前 10 時大閏村ノ敵 3 千ヲ撃破、次テ城壁ニ拠リ頑強ニ抵抗スル敵約 2 千…ヲ撃破シ、午後 3 時 15 分、城壁を占領、午後 5 時過、城内の掃蕩ヲ終ル。敵ハ 84 師主力、85・71 師ノ各一部ニシテ、其約 2 千ハ 13 日早朝、南方ニ退却シ、其他ハ夕刻城外ニ退却中ヲ捕捉殲滅セルヲ以テ、其損害 1500 ヲ下ラズ、我戦死 4、負傷 20」

［アジア歴史資料センターC11110965800 第 1 軍機密作戦日誌(防衛省)］画像 18～19 枚目］



【1938 年】2 月

14 日、曇、－12°

朝又早くから出発かと待ち構へてゐたが、どうやら夕刻らしい。午前中は砲の手入をなし、午後は休日であった。夜の行軍を前にして、ひかへる為である。

然し、自分は午後半日、一睡もせずして、将棋ばかりをさして遊んでしまった。

自分に取っては、眠るよりも此の方が心の慰みとなって、却ってよかった。

だが、夕刻となっても一向【に】出る模様がなく、今日は出発しないとさへ、うはさをされた。

火のない所に煙はたゝぬ。事実、出発はせずして又、一夜を此所で明かす。

15 日、晴、－14°。今日も出発は早くなかった。午前中、出発準備をなして午後 1 時出発だ。介休の敵をせむるべく、当村を出発した。

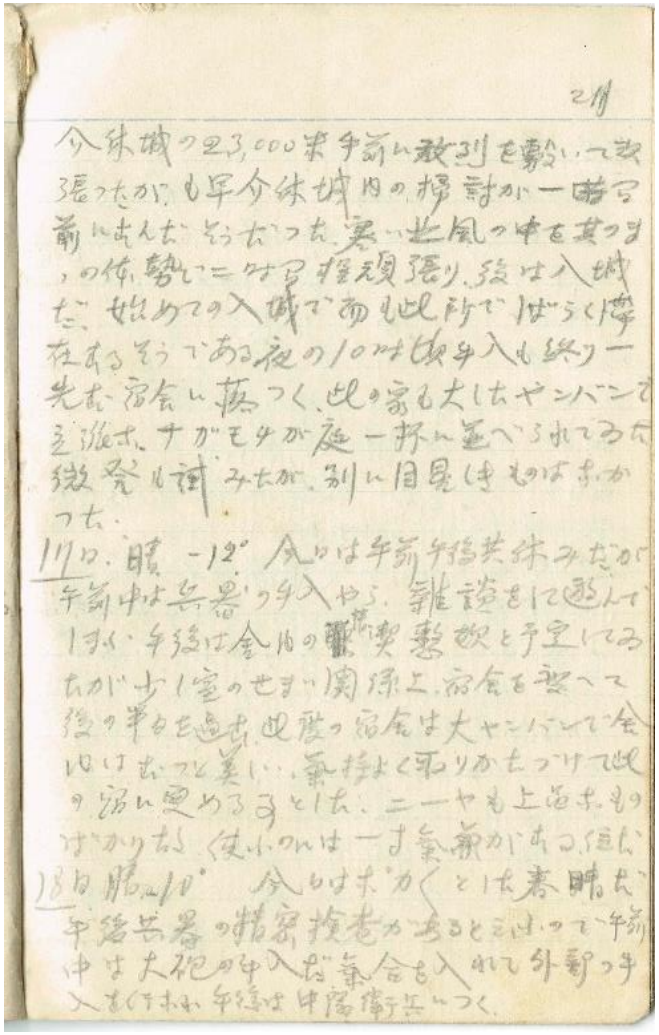
約 6 里【≒24ｋｍ】ばかりの道を行軍して来たが、設営地を行きすごして、夕方、ごてごてと宿をまどひ、結局は夜の 9 時頃、西柳村に到着。

当部落は大きな家ばかりで、自分等の家も大したものだった。

16 日、晴、－12°、8 時出発、今日は後 2・3 里【≒8～12ｋｍ】で介休の攻撃だ。早い歩趨で、どんどん歩み行く。

（参考）1938 年 2 月 17 日の「山西省給水調査」報告書によると、「介休…太原平地ノ南端ニ位シ…戸数3,300、人口 16,500 人、住民ハ多く商業ニ従事ス」

［アジア歴史資料センターC04120728900 陸支受大日記（防衛省）の画像 42～43 枚目］



【1938 年】2 月

介休城の 2・3000米手前に放列を敷いて頑張ったが、も早、介休城内の掃蕩が 1 時間前にすんだそうだった。

寒い北風の中を、其のまゝの態勢で 2 時間程頑張り、後は入城だ。

初めての入城で、而も此所でしばらく滞在するそうである。

夜の 10 時頃、手入も終り、一先ず宿舎に落つく。

此の家も大したヤンバン【(朝鮮の) 上流階級】で、立派なナガモチが庭一杯に並べられてゐた。

徴発も試みたが、別に目星しきものはなかった。

17 日、晴、－12°。

今日は午前・午後共休みだが、午前中は兵器の手入やら、雑談をして遊んでしまふ。

午後は、舎内の清潔整頓と予定してゐたが、少し室のせまい関係上、宿舎を変へて、後の半日を過す。

此度の宿舎は大ヤンバンで、舎内はずっと美しい。

氣持よく取りかたづけて此の宿に定める事とした。

ニーヤも上品なものばかり故、【労役に】使ふのには一寸氣兼がする位だ。

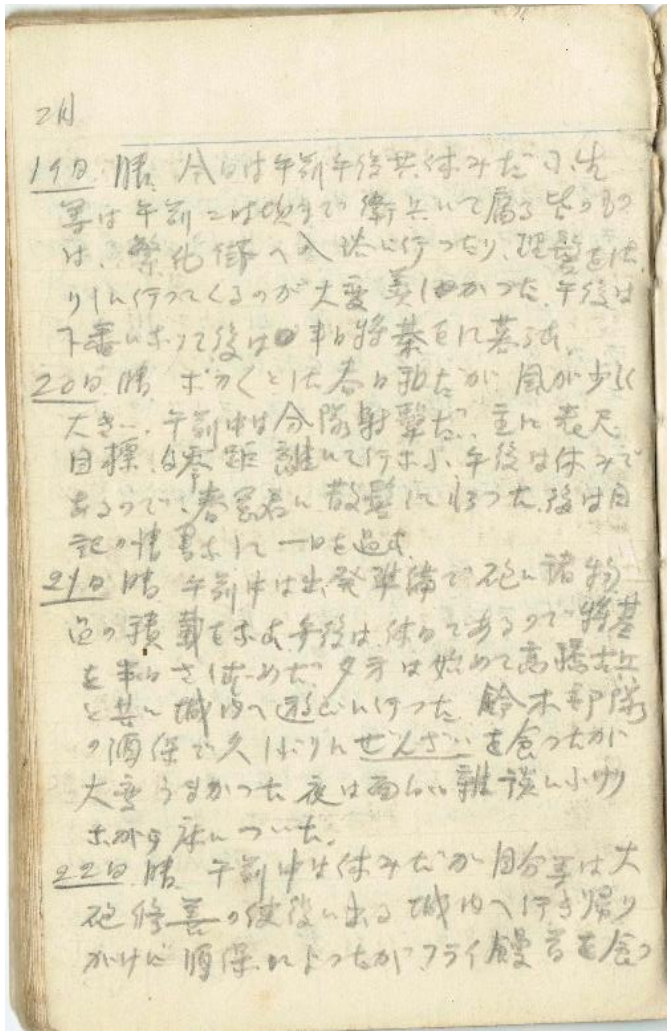
18 日、晴、－10°。

今日はポカポカとした春晴だ。

午後、兵器の精密検査があると云ふので、午前中は大砲の手入れだ。

氣合を入れて外部の手入れを行なふ。

午後は中隊衛兵につく。



【1938 年】2 月

19 日、晴、今日は午前、午後共休みだ。

小生等は午前 2 時頃まで衛兵にて腐る。

皆のものは繁華街へ入浴に行ったり、理髪をしたりしに行ってくるのが大変羨しかった。

午後は下番になりて、後は半日、将棋をして暮らす。

20 日、晴、ポカポカとした春日和だが、風が少しく大きい。

午前中は分隊射撃だ。

主に表尺【目標までの距離に応じて砲の仰角を決める照準目盛り】目標、及零距離にて行ふ。

午後は休みであるので、春岡君に散髪してもらった。

後は日記の清書【を】なして 1 日を過す。

21 日、晴、午前中は出発準備で、砲に諸物品の積載をなす。

午後は休日であるので、将棋を半日さしずめだ。

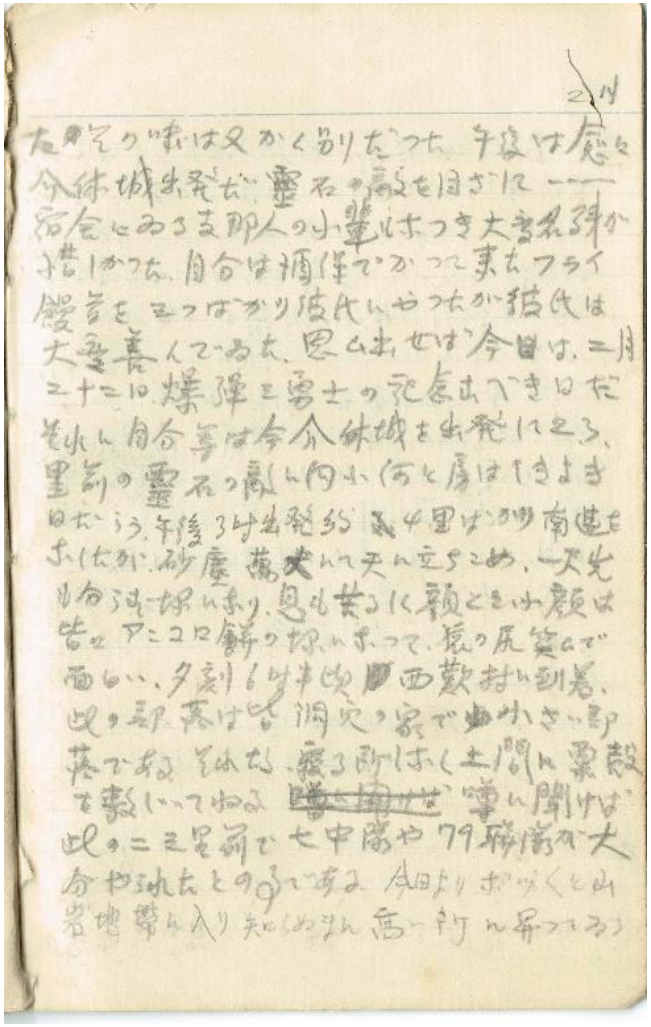
夕方は、初めて髙橋古兵と共に城内へ遊びに行った。

鈴木部隊の酒保で久しぶりにぜんざいを食ったが、大変うまかった。

夜は面白い雑談にふけりながら床についた。

22 日、晴、午前中は休みだが、自分等は大砲修繕の使役に出る。

城内へ行き帰りがけに酒保によったが、フライ饅頭を食っ



た。その味は又かく別だった。

午後は、愈々介休城出発だ。

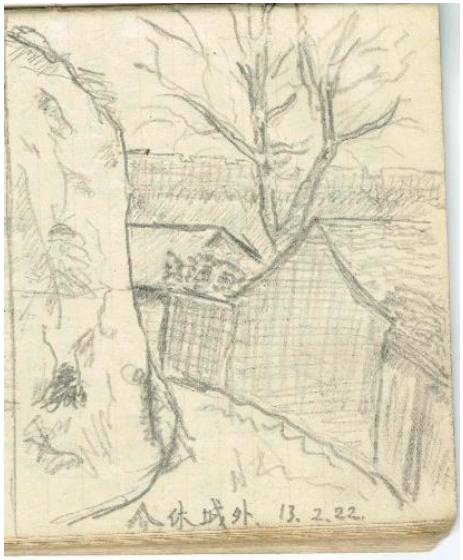
靈石の敵を目指して…。

宿舎にゐる支那人の小輩もなつき、大変名残が惜しかった。

自分は、酒保でかって来たフライ饅頭を３つばかり彼氏にやったが、彼氏は大変喜んでゐた。

思ひ出せば、今日は２月 22 日、爆弾三勇士【第一次上海事変中、1932 年２月 22 日に３人の兵士が敵の鉄条網を突破して自爆したとされる美談】の、記念すべき日だ。それに自分等は今、介休城を出発して２・３里【≒8～12ｋｍ】の前の靈石の敵に向ふ。何と相応しきよき日だらう。

【遺品の手帳のスケッチ】



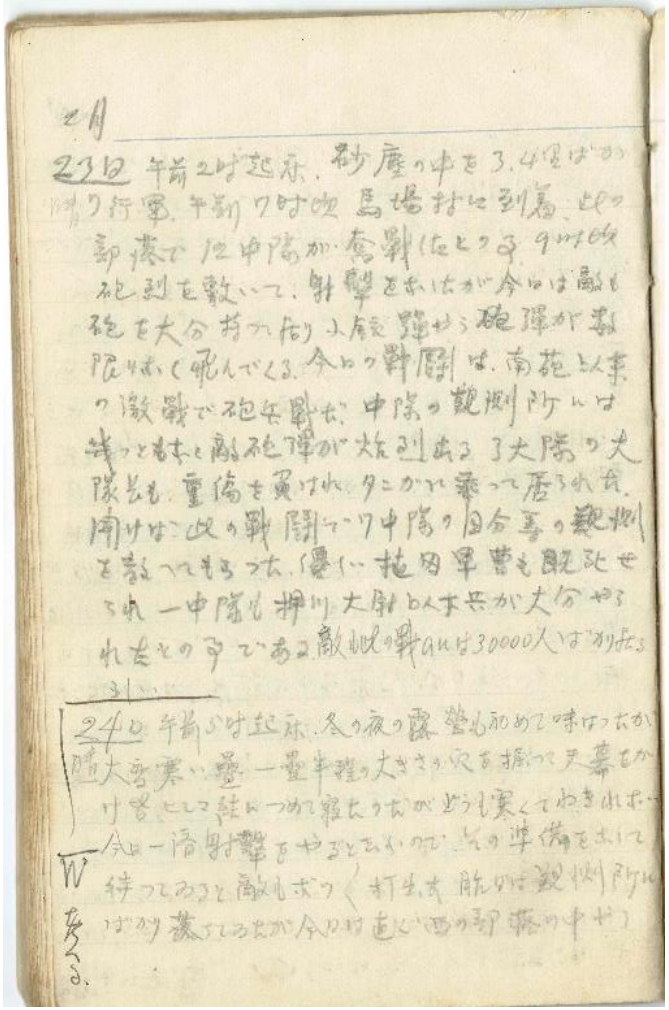
午後３時出発、約４里【≒16ｋｍ】ばかり南進をなしたが、砂塵萬丈にて天に立ちこめ、１尺【≒30ｃｍ】先も分らず様になり、息も苦るしく、顔と云ふ顔は皆々アンコロ餅の様になって、猿の尻笑ひ【猿が自分の尻も赤いのを知らず、他の猿の赤い尻を笑う比喩】で面白い。

夕刻６時半頃、西歎村に到着、此の部落は皆、洞穴の家で、小さい部落である。

それ故、寝る所はなく、土間に粟殻を敷いてねる。

噂に聞けば、此の ２・３ 里前で七中隊や七十九聯隊が大分やられたとの事である。

今日よりボツボツと山岳地帯に入り、知らぬまに高い所に昇ってゐる。



【1938 年】2 月

23 日、午前 2 時起床。

砂塵の中を 3・4 里【≒12～16ｋｍ】ばかり行軍、午前 7 時頃、馬場村に到着。

此の部落で十二中隊が奮戦したとの事。

9 時頃砲列を敷いて射撃をなしたが、今日は敵も砲を大分持って居り、小銃弾やら砲弾が数限りなく飛んでくる。

今日の戰闘は南苑【1937 年 7 月 27 日】以来の激戰で、砲兵戰だ。

中隊の観測所には、幾つともなく敵砲弾が炸裂する。

三大隊の大隊長も重傷を負はれ、タンカに乗って居られた。

聞けば、此の戰闘で、七中隊の、自分等の観測を教へてもらった優しい植田軍曹も即死せられ、一中隊も押川大尉以下、兵が大分やられたとの事である。

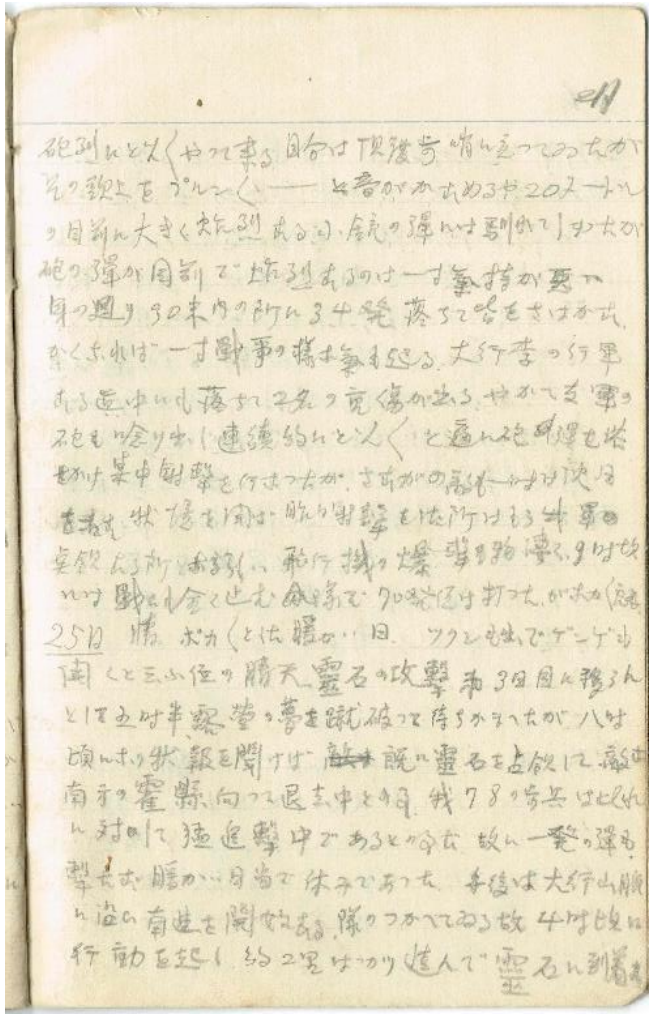
敵も、此の戰ひには 30000 人ばかり居るらしい。

24 日、晴、午前 5 時起床、冬の夜の露營(営)も初めて味はったが、大変寒い。

畳(畳)一畳(畳)半程の大きさの穴を掘って、天幕をかけ、皆ヒ〇〇結につめて寝たのだが、どうも寒くてねきれない。

今日、一斉射撃をやると云ふので、その準備をなして待って居(い)ると、敵もボツボツ打出す。

昨日は観測所にばかり落ちて居(い)たが、今日は、直ぐ西の部落の中やら



【1938 年】2 月

砲列にどんどんやって来る。

自分は丁度、歩哨に立ってゐたが、その頭上をプルン、プルンと音がかすめるや、20 メートルの目前に大きく炸裂する。

小銃の弾には馴れてしまったが、砲の弾が目前で炸裂するのは一寸氣持が悪い。

身の廻り 30米内の所に 3・4 発落ちて、皆をさはがす。かくなれば、一寸戰事の様な氣も起る。

大行李の行軍する眞中にも落ちて、2 名の重傷が出る。

やがて友軍の砲も唸り出し、連續的にどんどんと敵に砲弾を浴せかけ、集中射撃を行なったが、さすがの敵も一時は沈黙をなす。

状態を聞【け】ば、昨日射撃をした所は、もう我軍の点飲【占領？】する所となるらしい。飛行機の爆撃も物凄く、9 時頃には戰ひも全く止む。

分隊で 70 発位は打ったが、なかなか良好。

25 日、晴。ポカポカとした暖かい日。ツクシも出でゲンゲも開くと云ふ位の晴天。

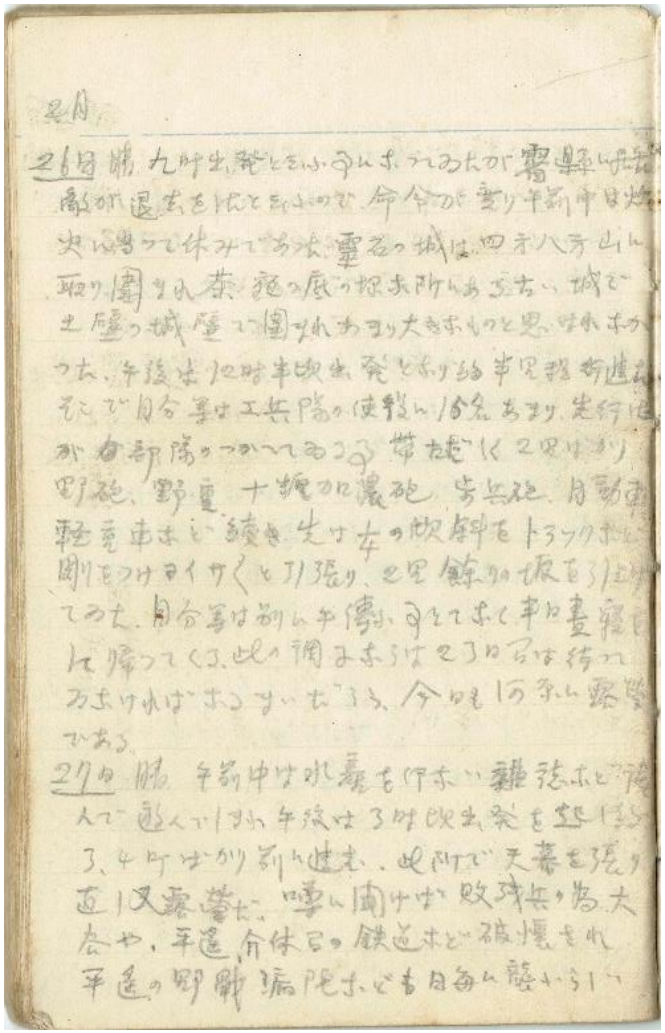
靈石の攻撃第 3 日目に移らんとして、5 時半、露營の夢を蹴破って待ちかまえたが、8 時頃になり状態を聞けば、既に靈石を占領して、敵は南方の霍縣【に】向って退去中との事。

我【第 20 師団の第】七八【連隊】の歩兵は、此れに対して猛追撃中であるとの事だ。

故に 1 発の弾も撃たず、暖かい日当で、休みであった。

午後は、大行山脈に沿ひ、南進を開始する。

隊のつかへてゐる故、4 時頃に行動を起し、約 2 里【≒8ｋｍ】ばかり進んで靈石に到着す。



（参考：兵歴簿の関係個所抜粋）

【履歴】　　昭和 13 年 2 月 26 日ヨリ 3 月 10 日迄　黄河追撃戦ニ参加

【1938 年】2 月

26 日、晴、9 時出発と云ふ事になってゐたが、霍縣に居た敵が退去をしたと云ふので、命令が変り、午前中は焚火に当って休みであった。

靈石の城は四方八方山に取り圍まれ、茶碗の底の様な所にある古い城で、土壁の城壁で圍まれ、あまり大きなものと思はれなかった。

【1938 年 2 月 25 日の「山西省給水調査」報告書によると、「靈石… 介休ノ南方 20 ｋｍ 粁、同蒲線上ニアル縣城ニシテ、戸數300、人口 1,500、住民ハ大部分、附近農産物等ノ取扱商人ナリ。土地ハ東西ニ迫レル山岳ニ挟マレ汾河ニ近シ」［アジア歴史資料センターC04120729000 陸支受大日記(防衛省) の画像 31 枚目］】

午後は 12 時半頃出発となり、約半里【≒2ｋｍ】程行進する。

そこで自分等は、工兵隊が使役に 15 名あまり先行したが、部隊のつかへてゐる事、おびただしく、2 里【≒8ｋｍ】ばかり野砲、野重【野戦重砲】、十糎加農砲、歩兵砲、自動車、輜重車など續き、先は 1/4 の傾斜をトラックなど綱をつけ、ヨイサヨイサと引張り、2 里餘りの坂を引上げてゐた。

自分等は別に手傳ふ事とてなく、半日晝寝をして帰ってくる。

此の調子ならば、2・3 日間は待ってゐなければなるまいだろう。

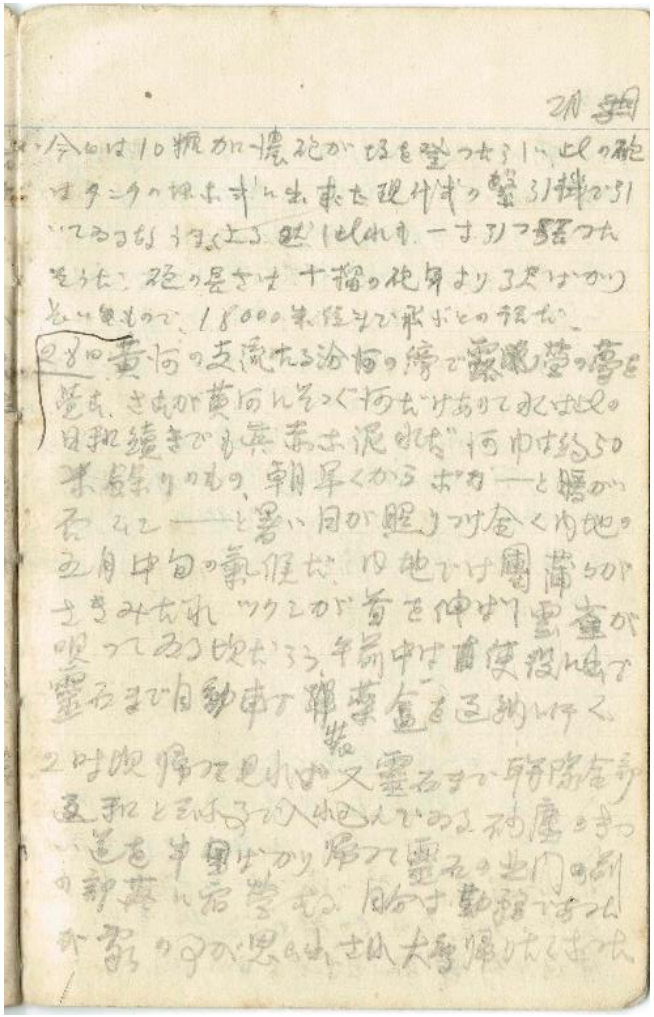
今日も河原に露營である。

27 日、晴。午前中は水〇を行い、雑誌など讀んで遊んでしまふ。

午後は 3 時頃出発を起し、約 3・4 町【≒3～400m】ばかり前に進む。

此処で天幕を張り直し、又露營だ。

噂に聞けば敗残兵の為、太谷や平遙、介休間の鉄道など破壊され、平遙の野戦病院なども日毎に襲ふらしい。



【1938 年】２月

今日は、十糎加農砲（ｃｍカノン）が坂を登ったらしい。

此の砲は、【馬ではなく】タンク【装甲車】の様な式に出来た現代式の繋引機で引いてゐる故、うまく上る。然し、此れも一寸（ちょっと）【砲兵が？】引っ張ったそうだ。

砲の長さは、十榴（じゅうりゅう）の砲身より３尺【≒90ｃｍ】ばかり長いもので、18000米（ｍ）位まで飛ぶとの話だ。

（参考）加農砲は榴弾砲に比べて遠距離の目標を狙うための砲で、上記の記述で、砲身長から言えば「14 年式十糎加農砲」、最大射程から言えば「九二式十糎加農砲」が該当する。
1937 年 8 月 27 日に第 20 師団に加わった野戦重砲第 3 連隊が持っていたのかも知れない。
・14 年式十糎加農砲の諸元 … 口径：105ｍｍ、砲身長：3,590ｍｍ、方向射界：±15°、弾丸量：約 15.76ｋｇ、初速：尖 640ｍ/ｓ、最大射程 15,300ｍ、備考「5 トン牽引車機動」
・九二式十糎加農砲の諸元 … 口径：105ｍｍ、砲身長：4,725ｍｍ、方向射界：±18°、弾丸量：約 15.76ｋｇ、初速：尖 764.7ｍ/ｓ、最大射程 18,200ｍ、備考「5 トン牽引車機動」
［防衛省戦史叢書「陸海軍年表 付 兵語・用語の解説」の付録第 4「陸海軍主要兵器諸元」画像 221 枚目］

28 日、黄河の支流たる汾河（ふんが）の傍で、露営（ろえい）の夢を覺す。

さすが黄河にそゝぐ河だけありて、水は此の日和續（つづ）きで眞（まこと）赤な泥水だ。

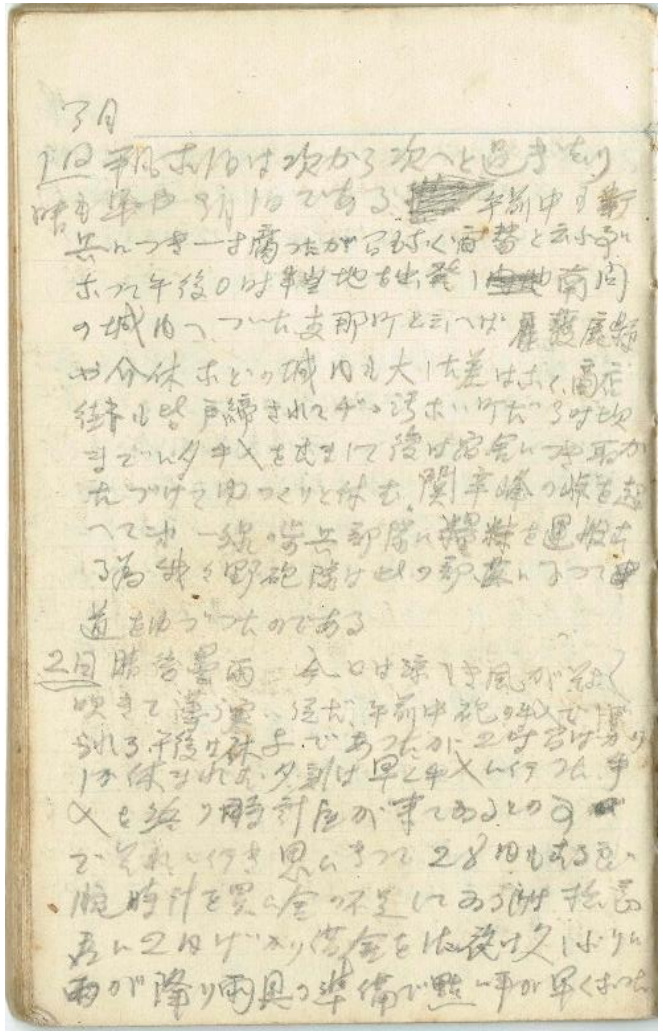
河巾は約 50米（ｍ）餘（よ）りのもの。朝早くからポカポカと暖かい、否、ムシムシと暑い日が照りつけ、全く内地の５月中旬の氣（き）候だ。内地ではタンポポがさきみだれ、ツクシが首を伸ばし、雲雀が唄ってゐる頃だろう。

午前中は使役に出で、靈石（れいせき）まで自動車で装薬盒（そうやくごう）【砲の発射薬を入れる容器】を返納に行く。

2 時頃帰って見れば、又靈石まで聯隊（れんたい）全部〇和と云ふ事で入れ込んでゐる。

砂塵のきつい道を半里ばかり帰って、靈石の北門前の部落に宿営する。

自分は勤務であったが、家の事が思ひ出され、大変帰りたくなった。



【1938 年】3 月

1 日、晴、平凡な 1 日は次から次へと過ぎ去り、も早 3 月 1 日である。

午前中も衛兵につき、一寸(ちょっと)腐ったが、間もなく宿替と云ふ事になって、午後 0 時半、当地を出発し南門の城内へついた。支那町と云へば獲鹿縣(かくろく県)【1937 年 10 月 12 日に通過】や介休(かいきゅう)【2 月 16 日に通過】などの城内も大した差はなく、商店街も皆、戸締されてヂヽ汚ない町だ。

3 時頃まで夕手入をすまして後は、宿舎につき、取かたづけてゆっくりと休む。

関辛峰の峠を越へて、第一線の歩兵部隊に糧秣(りょうまつ)を運搬する為、我々野砲隊は此の部落に下って【輜重部隊に？】道をゆづったのである。

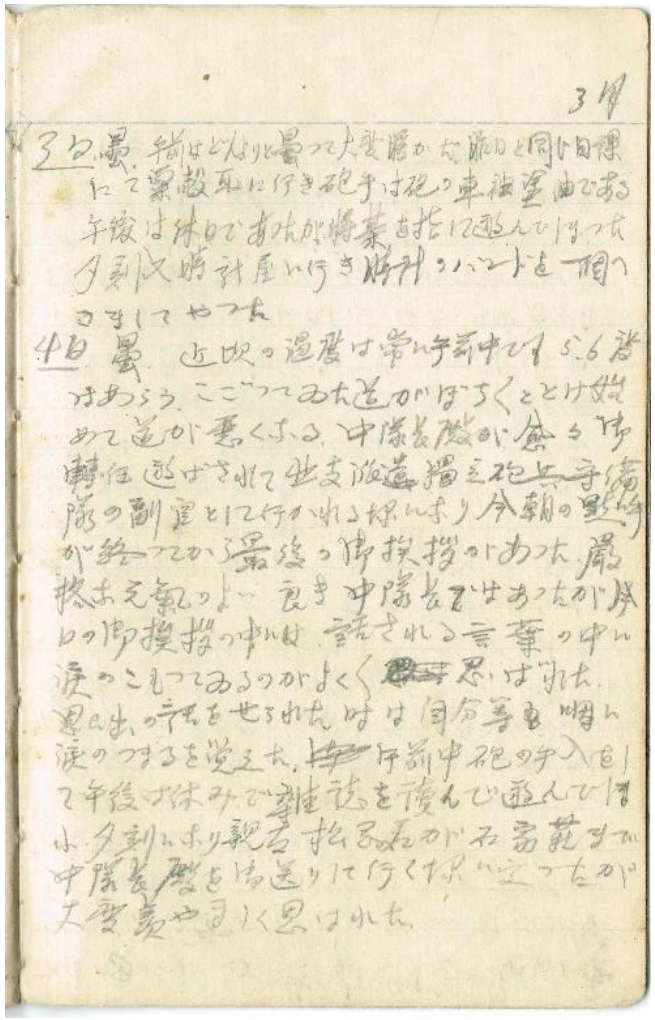
2 日、晴後曇雨、今日は涼しき風がそよそよ吹きて薄ら寒い位だ。

午前中、砲の手入で搾られる。

午後は休与であったが、2 時間ばかりしか休まれず、夕刻は早く手入に行った。

手入を終り時計屋が来てゐ(い)るとの事で、それに行き、思ひきって 28 円もする良い腕時計を買ひ、金の不足してゐ(い)る所は、松岡君に 2 円ばかり借金をした。

夜は久しぶりに雨が降り、雨具の準備で點(点)呼が早くなった。



【1938 年】3 月

3 日、曇。

午前はどんよりと曇って、大変暖かだ。

昨日と同じ日課にて、粟殻取に行き、砲手は砲の車軸塗油である。

午後は休日であったが、将棋を指して遊んでしまった。

夕刻、又時計屋に行き、時計のバンドを 1 個、ヘコましてやった。

4 日、曇。

近頃の温度は、常に午前中でも 5・6 度はあらう。

こごってゐた道がぼちぼちととけ始めて、道が悪くなる。

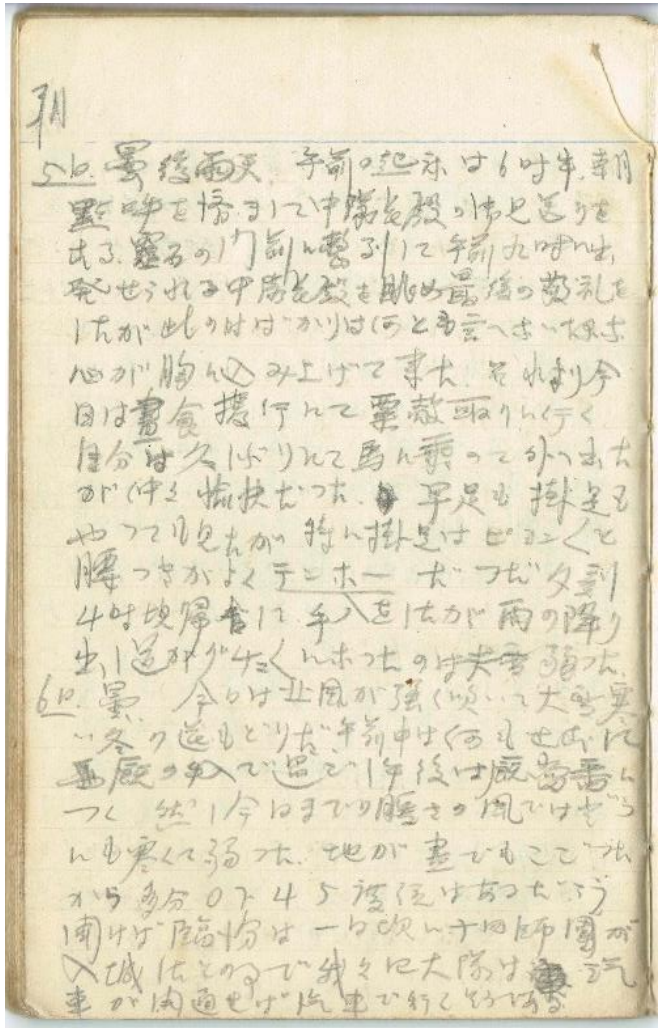
中隊長殿【「(参考) 日中戦争時代の野砲兵第 26 連隊に関する資料」の 11 頁の表では村木 浩大尉となっている】が愈々、御轉任遊ばされて、北支派遣獨立砲兵守備隊の副官として行かれる様になり、今朝の點呼が終ってから最後の御挨拶があった。

嚴格な、元氣のよい、良き中隊長ではあったが、今日の御挨拶の中には、話される言葉の中に、涙のこもってゐるのがよくよく偲ばれた。

思ひ出の話をせられた時は、自分等も咽に涙のつまるを覚えた。

午前中、砲の手入をして、午後は休みで、雑誌を讀んで遊んでしまふ。

夕刻になり、親友松岡君が石家荘まで中隊長殿を御送りして行く様に定ったが、大変羨やましく思はれた。



【1938 年】3 月

5 日、曇後雨天、午前の起床は 6 時半、朝点呼を済まして中隊長殿の御見送りをする。

霊石の門前に整列して午前 9 時に出発せられる中隊長殿を眺め、最後の敬礼をしたが、此の時ばかりは、何とも言へない様な心が胸に込み上げて来た。

それより今日は、晝食携行にて粟殻取りに行く。

自分は久しぶりにて馬に乗って外へ出たが、中〻愉快だった。

速足も掛足もやっても見たが、特に掛足はピョンピョンと腰つきがよく、テンホーだった。

夕刻 4 時頃、帰舎して手入をしたが、雨の降り出し、道がグチュグチュになったのは大変弱った。

6 日、曇、今日は北風が強く吹いて大変寒い。冬の逆もどりだ。

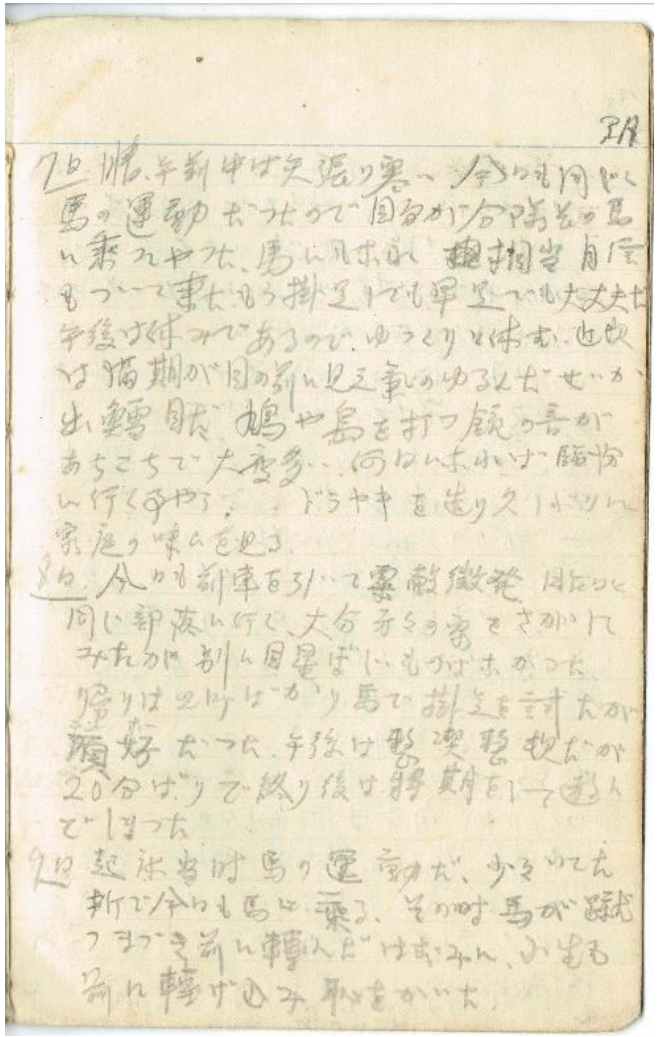
午前中は何もせずして厩の手入で過ごし、午後は厩當番につく。

然し、今日までの暖さの風ではどうにも寒くて弱った。

地が晝でもこごったから、多分零下 4・5 度位はあるだろう。

聞けば、臨汾は 1 日頃に十四師團が入城したとの事で、我々四大隊は、汽車が開通せば汽車で行くそうである。

【C 49 頁の地図（臨汾は中央付近）では、第 108 師団が 2/27 に占領しているので、その後に第 14 師団が入ったのか？】



【1938 年】3 月

7 日、晴、午前中は矢張り寒い。

今日も同じく馬の運動だったので、自分が【転任された】分隊長の馬に乗ってやった。

馬にもなれ、相当自信もついて来た。もう掛足でも速足でも大丈夫だ。

午後は休みであるので、ゆっくりと休む。

近頃は満期が目の前に見え、氣(気)のゆるんだせいか、出鱈目(でたらめ)だ。

鳩や鳥を打つ銃の音があちこちで大変多い。

何日になれば臨汾(りんふん)に行く事やら。

ドラヤキを造り、久しぶりに家庭の味ひを見る。

8 日、今日も前車【砲牽引用の 2 輪荷車。Ａの日記Ａ12 頁の図を参照】を引いて粟殻(ぞっこく)徴発。

昨日と同じ部落に行く。

大分方々の家をさがしてみたが、別に目星ぼしいものはなかった。

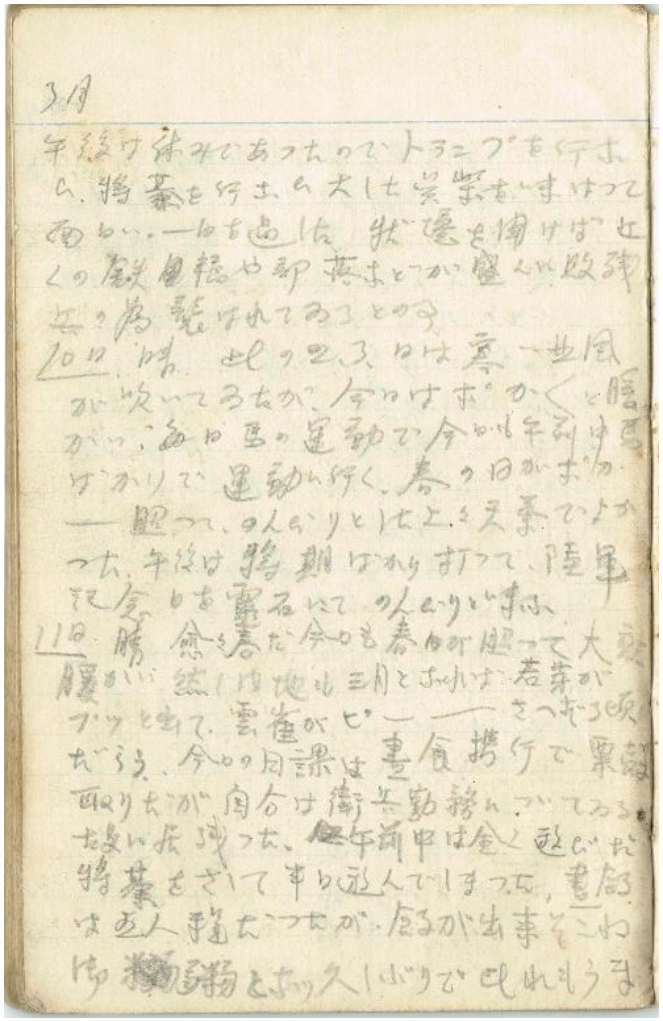
帰りは 2 町ばかり馬で掛足を試たが、頂好(テンホー)だった。

午後は清潔整頓だが、20 分ば【か】りで終り、後は將棋をして遊んでしまった。

9 日、起床当時、馬の運動だ。

少々、凍(い)てた所で今日も馬に乗る。

その時、馬が蹴つまづき、前に轉(転)んだはずみに、小生も前に轉(転)げ込み、恥をかいた。



（参考：兵歴簿の関係個所抜粋）

【履歴】　昭和 13 年 3 月 11 日ヨリ 6 月 25 日迄　占領地肅清戦ニ参加

【1938 年】3 月

午後は休みであったのでトランプを行なひ、將棋を行なひ、大した娯楽を味はって面白い 1 日を過した。

状態を聞けば、近くの鉄橋や部落などが、盛んに敗残兵の為、襲はれてゐるとの事。

10 日、晴、此の 2・3 日は寒い北風が吹いてゐたが、今日はポカポカと暖かい。

毎日、馬の運動で、今日も午前中、馬ばかりで運動に行く。

春の日がポカポカ照って、のんびりとした上々天氣でよかった。

午後は將棋ばかり打って、陸軍記念日を靈石にてのんびりと味ふ。

（参考）中尾敏郎らの第 26 連隊の第 10 中隊は 3 月 1 日以降、霊石に守備のために残っているようであるが、第 20 師団の先頭は遥かに南西に進んでおり、目標とする黄河河畔には陸軍記念日の前日、3 月 9 日に到達する事ができた。2 月 11 日からの河北截定戦において、第 1 軍全体で戦死 657 人、戦傷 3,168 人、敵遺棄死体 42,322 人（うち第 20 師団は戦死 362 人、戦傷 1,621 人、敵遺棄死体 15,285 人）と報告されている。

［アジア歴史資料センターC11110983100、第 1 軍作戦経過の概要（防衛省）の画像 41～42 枚目］

11 日、晴、愈々春だ。今日も春日が照って、大変暖かい。

然し、内地も 3 月となれば若芽がプッと出て、雲雀がピーピーさへずる頃だらう。

今日の日課は、晝食携行で粟穀取りだが、自分は衛兵勤務についてゐる故に居残った。

午前中は全く遊びだ。將棋をさして半日遊んでしまった。

晝飯は 5 人程だったが、飯が出来そこね、御粥となり、久しぶりで此れもうま

（参考）1938 年 2 月 11 日から始まった第 1 軍の河北 戡 定 戦が予定通り完了した 3 月 10 日、その後の方針につき、大陸命第 75 号として「北支那方面軍司令官ハ、膠 済 沿線及 済 南 ヨリ上流、黄河左岸ニ 亙 ル現占據地域ノ確保安定ニ任ズル(※以下省略)」との命令が下された。

［アジア歴史資料センターC14060904000 大陸命綴(支那事変)(防衛省)画像 19 枚目］

その大陸命に基づき、第 1 軍は傘下の各師団に右記の命令を発した。

その際、命令の趣旨について、「今ヤ、黄河ノ各渡河点ヲ抑ヘテ包囲ヲ完成シ、相当ノ残敵ハ我 嚢 中 ノ鼠トナレリ。故ニ、軍ハ此嚢中ノ鼠ヲ料理シテ、以テ既占領地域ヲ確保セントスルニ在リ。」と説明されている。

また、占領地の治安維持等について、次の補足説明がなされた。

一、共産軍及共産党員ニ対シテハ…徹底的 剿 滅 (※根だやし)ヲ期セラレ度、… 一面共産ニ対スル嚴タル態度ヲ示スト共ニ、一面良民ニ対スル宣傳、宣撫ト相 俟 テ、皇軍ニ対スル信頼ノ念ヲ起サシメ、 例 、今軍ノ駐屯セザル地域ニ於テモ、再ビ共産軍ノ 跳 梁 ヲ許サザル如クセラレタシ。

一、帰順投降工作ハ各兵団ノ作戦ニ並行シ、依然実施セラレ度。既往ノ帰順民軍、目下工作ヲ進メツツアル帰順軍隊、 並 将来豫想スル帰順軍隊、當分ノ配置ハ概要別紙要図(※右図)ノ如ク豫定シアリ。右以外ノ帰順民團の土匪(※土着の匪賊)等ノ處置ニ關シテハ、各部隊ハ適宜、其誠意ヲ認ムベキ手段ヲ講ジ、努メテ武器ヲ回収シテ帰郷セシメ、或ハ已ムヲ得ザルモノハ無抵抗ヲ誓ハシメ地域ヲ指定シテ位置セシメ、其情況ヲ軍ニ報告セラレ度…。

一、各縣治安維持會ノ設置、並地方警備組織ノ恢 復 ニ關シ、各兵團ハ大イニ指導ト援助ヲ與ヘラレ度。」

［アジア歴史資料センターC11110967500 第 1 軍機密作戦日誌(防衛省) 画像 1～30 枚目］

（参考）一軍作命甲第 206號　第一軍命令　　3 月 10 日午前 9 時　於 彰 徳 戦戰闘指令所

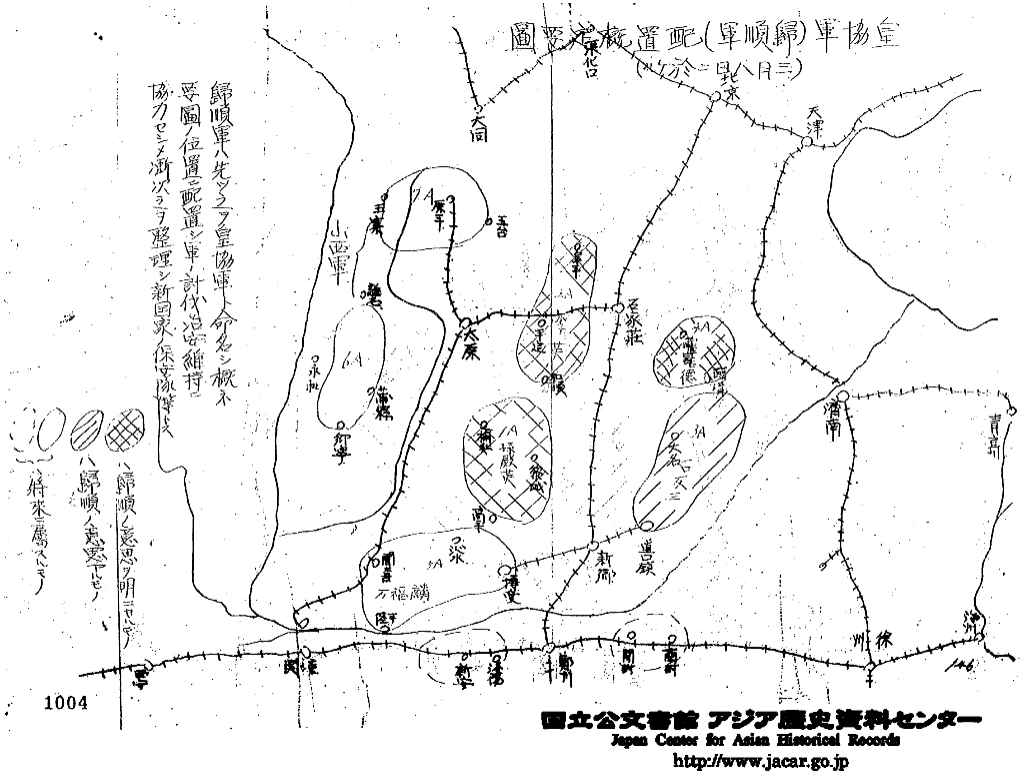
1．各兵團ノ勇戰ニ依リ、敵ハ多大ノ損害ヲ蒙リ、其大部ハ黄河以遠ニ遁走セリ。
山西省内、太 原・潞安両平地中間山地、潞安平地北方山地内、五台附近、 並 山西・陝 西省境附近ニハ、尚相當ノ共産軍及敗残部隊アリテ軍ノ後方 擾 亂ヲ企圖シアルモノノ如シ。

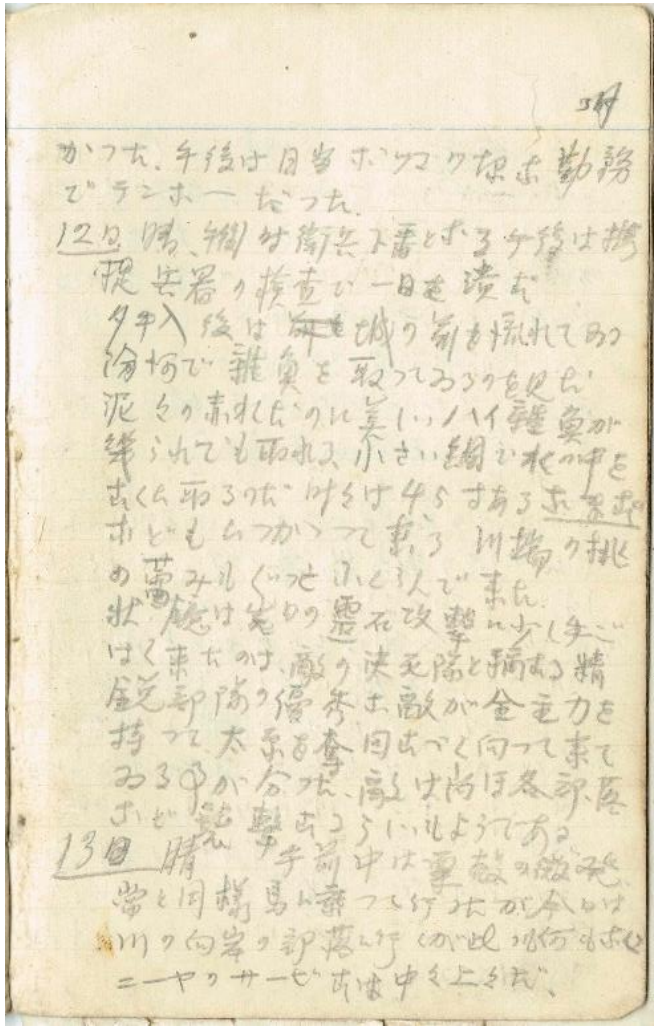
2．軍ハ既占領地域ヲ確保セントス。

3．第 20 師團ハ南部山西平地ヲ守備シ、且黄河ノ線ヲ警戒スベシ。(※４～８項 省略)

9．各師團ハ作戰地域内ノ安定ニ任ジ、且、鐵道、通信、及 兵 站 施設、 並 飛行場ヲ警備スベシ。
本次作戰後、成ル可ク速ニ別紙計畫ニ基キ、共産軍及敗残部隊ヲ掃滅スベシ。(※ 10 項 省略)

山西省内の中国軍の帰順情況図(3 月 8 日現在)　※「皇協軍」は日本軍に帰順して協力する中国人部隊





【1938 年】3 月

かった。

午後は、日当ボッコの様な勤務でテンホーだった。

12 日、晴。

午後 1 時、衛兵下番となる。

午後は携帯兵器の検査で 1 日を潰す。

夕手入後は、城の前も流れてゐる汾河で雑魚を取ってゐるのを見た。

泥々の赤水だのに、美しいハイ【オイカワの関西での呼び名】雑魚が幾られでも取れる。

小さい網で水の中をすくひ取るのだ。

時々は 4・5 寸【≒120～150㎝】ある、なまずなどもひっかゝって来る。

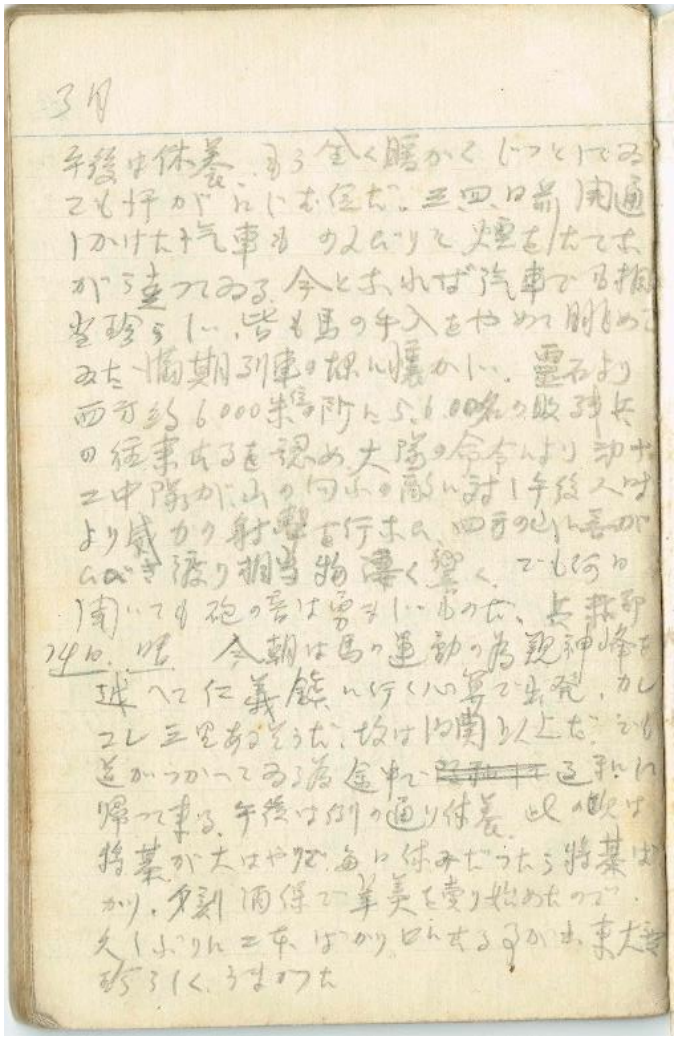
川端の桃の蕾みも、ぐっとふくらんで来た。

状態は、先日の靈石攻撃に少し手ごはく来たのは、敵の決死隊と稱する精鋭部隊の優秀な敵が、全主力を以って太原を奪回すべく向って来てゐる事が分った。

敵は尚ほ、各部落など襲撃するらしいもようである。

13 日、晴。

午前中は粟穀の徴発。常と同様、馬に乗って行ったが、今日は川の向岸の部落に行くが、此ゝも何も【徴発できるものが】なく、ニーヤのサービスは中々上々だ。



【1938 年】3 月

午後は休養。もう全く暖かく、じっとしてゐても汗がにじむ位だ。

3・4 日前、【敵の破壊工作から復旧して】開通しかけた汽車も、のんびりと煙をたてながら走ってゐる。

今となれば汽車でも相当珍らしい。

皆も、馬の手入をやめて眺めてゐた。

満期列車の様に懐かしい。

靈石より西方、約 6000米位の所に、5・600 名の敗残兵の往来するを認め、大隊の命令により第十二中隊が、山の向ふの敵に対し、午後 8 時より威力の射撃を行なひ、四方の山に音がひびき渡り、相当物凄く響く。

でも、何回聞いても砲の音は勇ましいものだ。

兵糧部に襲撃を喰ふ。【原文のこの行は右側の頁にまたがって記載されている】

14 日、晴、今朝は馬の運動の為、〇神峰を越へて仁義鎮に行く心算で出発。

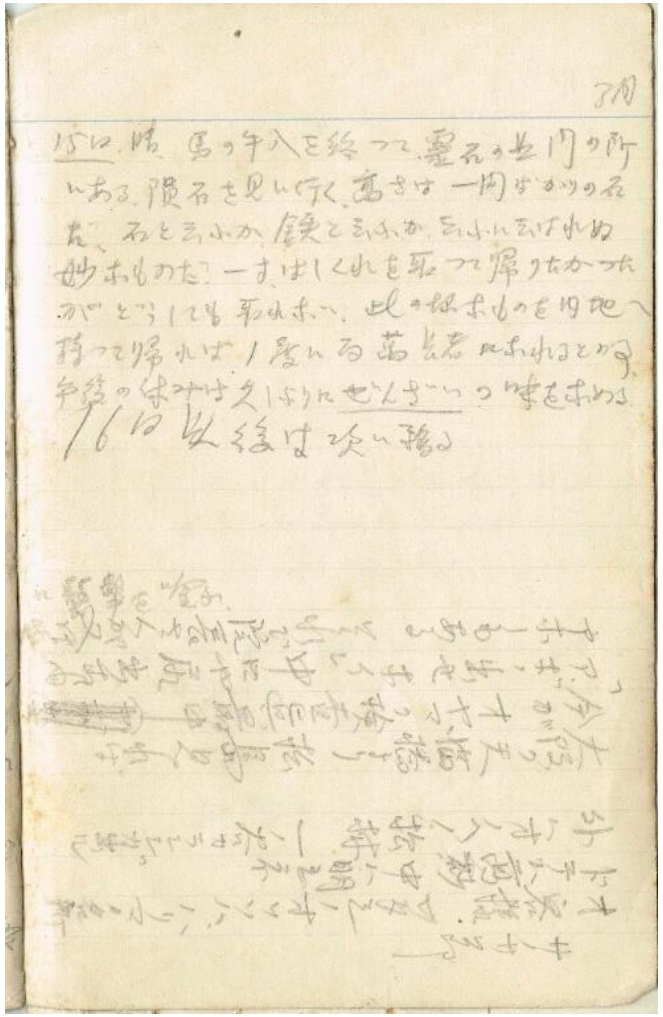
カレコレ 3 里【≒12ｋｍ】あるそうだ。坂は〇関以上だ。

でも道がつかへてゐる為、途中で反転して帰って来る。

午後は例の通り休養。

此の頃は將棋が大はやりで、毎日休みだったら将棋ばかり。

夕刻、酒保で羊羹を賣り始めたので、久しぶりに 2 本ばかり口にする事が出来、大変珍らしくうまかった。



【1938 年】3 月

15 日、晴。

馬の手入を終って、靈石（れいせき）の北門の所にある隕石を見に行く。

高さは 1 間【≒1.8m】ばかりの石だ。

石と云ふか、鉄と云ふか、云ふに云はれぬ妙なものだ。

一寸（ちょっと）、はしくれを取って帰りたかったが、どうしても取れない。

此の様なものを内地へ持って帰れば、1 度に百萬（万）長者になれるとの事。

午後の休みは、久しぶりにぜんざいの味を求める。

16 日以後は次【Dの日記】に移る。

サノサ節【替え歌】

オ客様、ワタシノオソソハ、ハリマノ名所

ドテハ高砂、中は明シネ

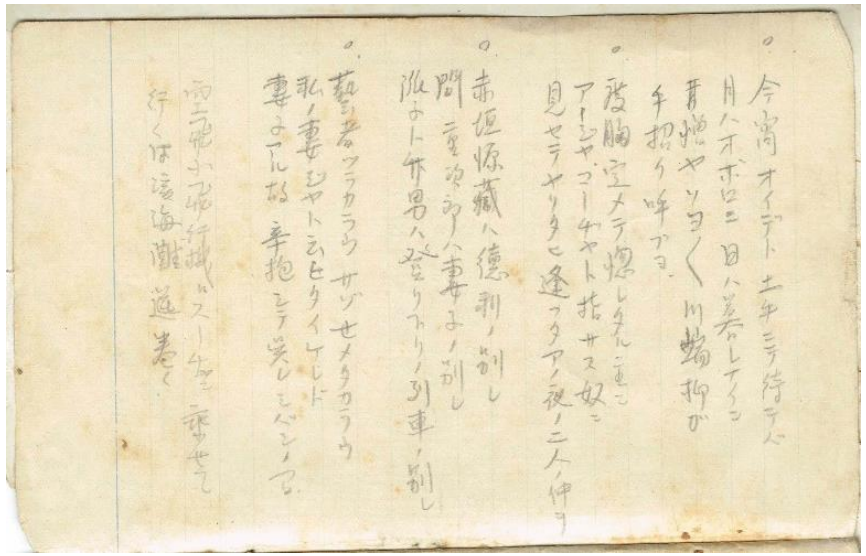
外ハオノヘノ松林、一ノ谷カラシシガ出ル

大阪の天満橋より松島見れば

今がオヤマの検査眞（真）最中

「アボノ出セナイ」中にや尻出す○

アホーもある　それで院長さんが又ほれ



【何かの替え歌？】

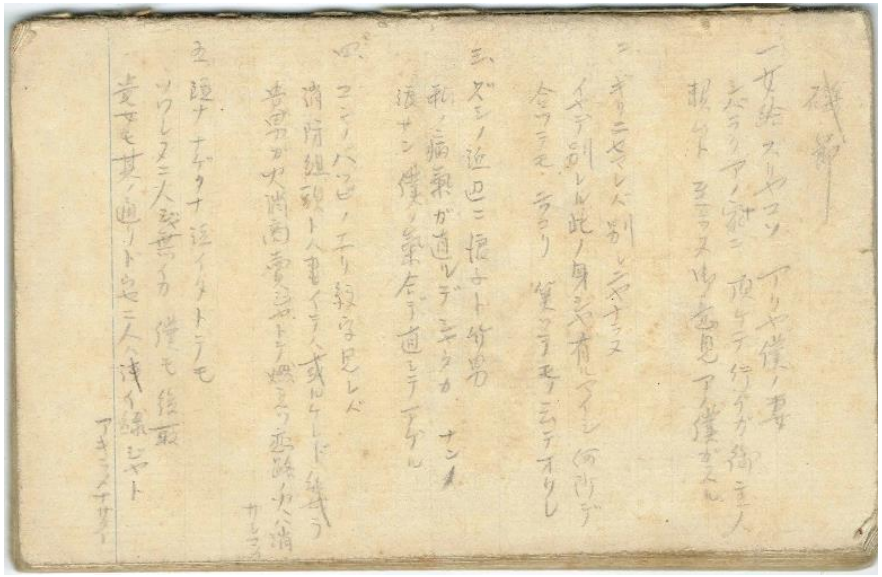
◦ 今宵オイデト 土手ニテ待テバ
月ハオボロニ 日ハ暮レナイニ【紅（くれない）ニ？】
憎ヤ ソヨソヨ川端柳ガ
手招ク 呼ブヨ

◦ 度胸定メテ 惚レタル主ニ
アージャコージャト 指サス奴ニ
見セテヤリタヒ 逢フタアノ夜ノ二人ノ仲ヲ

◦ 赤垣源蔵ハ 徳利ノ別レ
間　重次郎ハ 妻子ノ別レ
派子ト升男ハ 登リ下リ列車ノ別レ

◦ 藝（芸）者ツラカラウ サゾセメタカラウ
私ノ妻ジャト 云ヒタイケレド
妻子アル故 辛抱シテ呉（ク）レ シバシノ間

空飛ぶ飛行機にスーチャン乗せて
行くは玄海灘逆巻く



磯節【の替え歌？】

１．女給スリャコソ　アリャ僕ノ妻
　シバラクアノ家(ヤ)に　預ケテ行クガ　御主人
　頼ムト至ラヌ御意見　アノ僕ガスル

２．ギリニセマレバ　別レニャナラヌ
　イヤデ別レル此ノ身ジャ有ルマイシ　何所デ
　会ッテモ　ニッコリ笑ッテ　モノ云テオクレ

３．ズシノ近辺ニ浪子ト竹男
　私ノ病氣(気)ガ治ルデシャクカ　ナンノ
　浪サン　僕ノ氣(気)合デ直シテアゲル

４．コンノハッピノ　エリ紋字見レバ
　消防組頭トハ書イテハ　或ルケレド　幾ラ
　貴男ガ火消商賣(売)ジャトテ　燃立ツ恋ノ火ハ消サレマイ

５．泣クナナゲクナ　泣イタトテモ
　ソワレヌ人ジャ無イカ　僕モ後取
　貴女モ其ノ通リ　ドウセ人ハ浅イ縁ジャト　アキラメナサイ